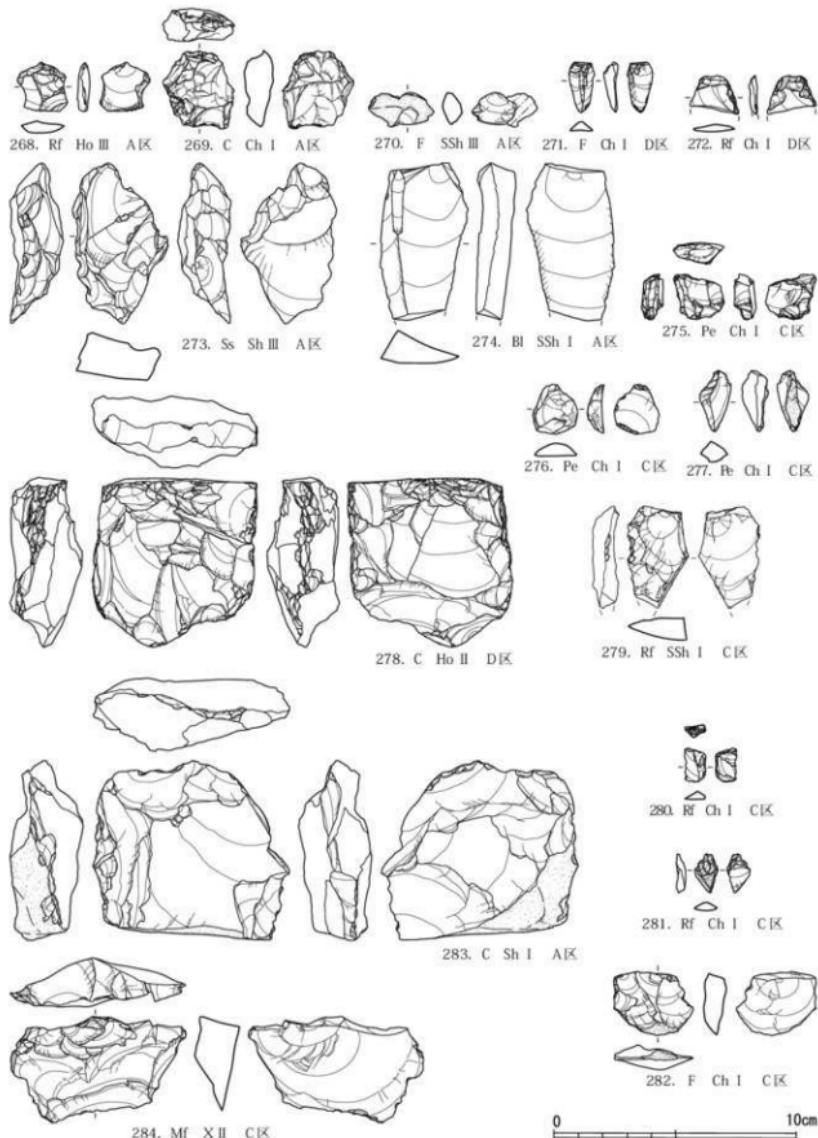
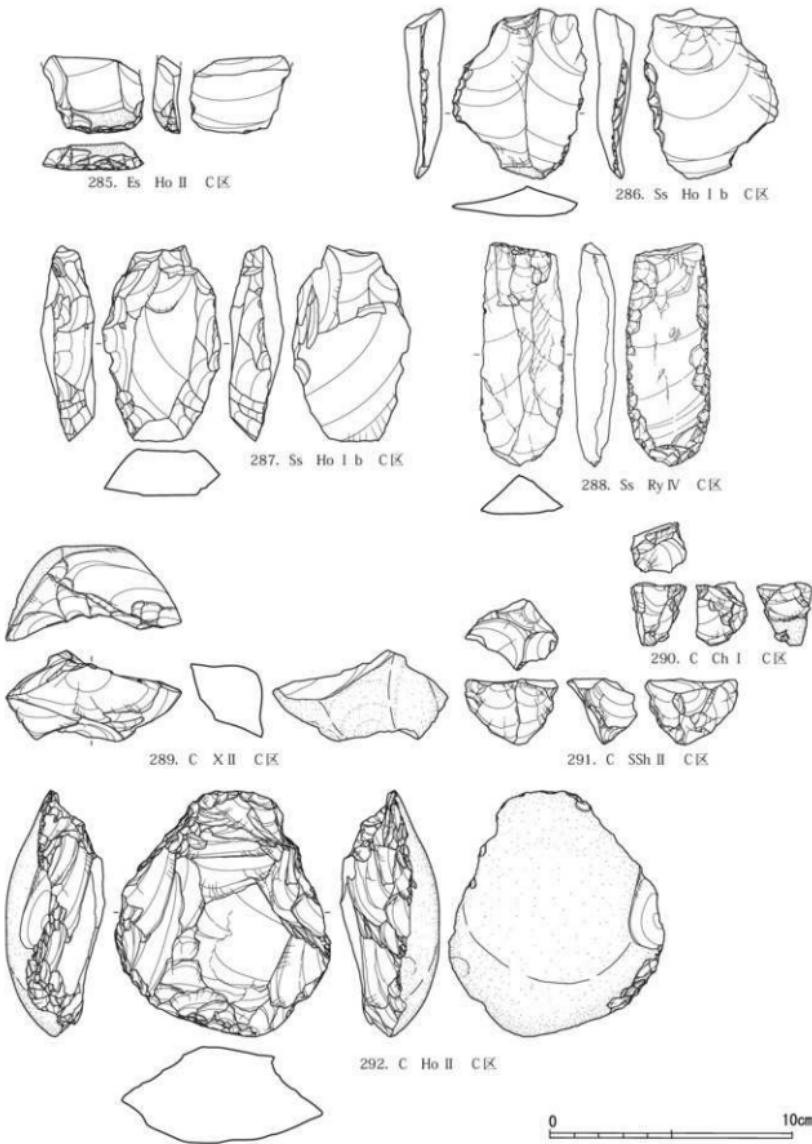


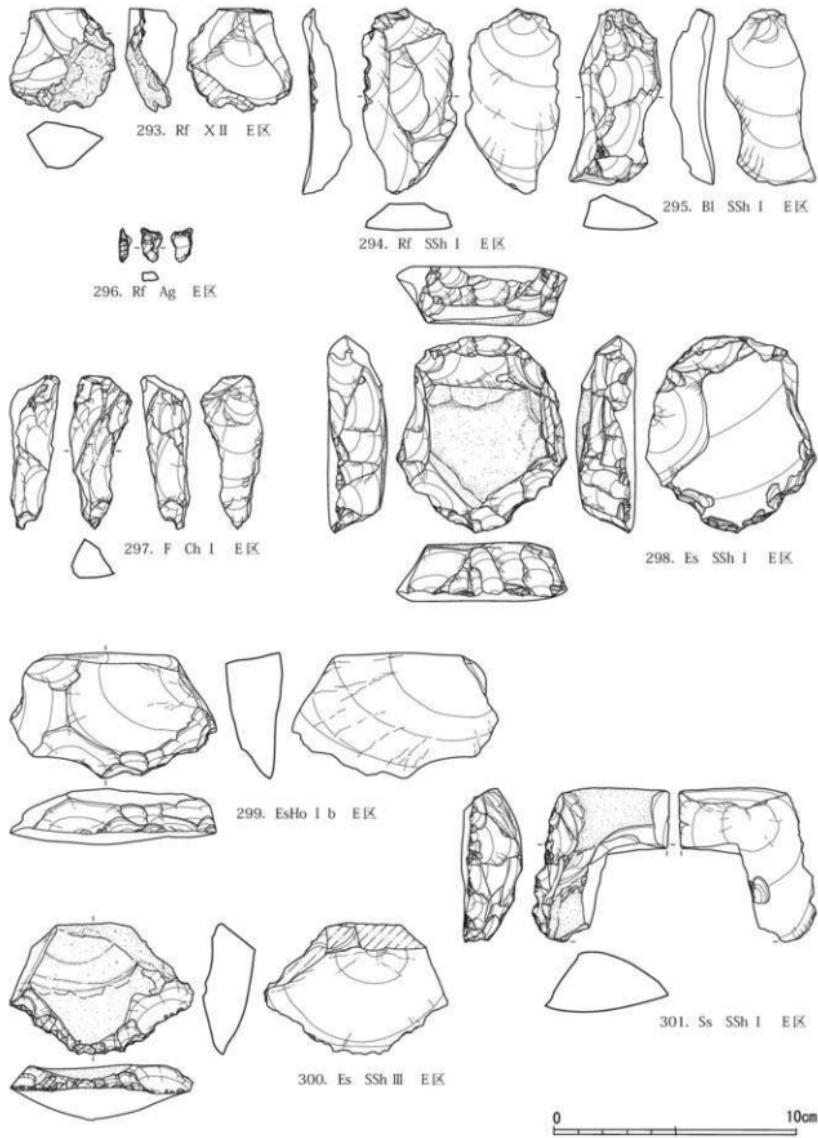
第54図 第V期の石器群(8) 角錐状石器・尖頭器 ($S = 1/2$)



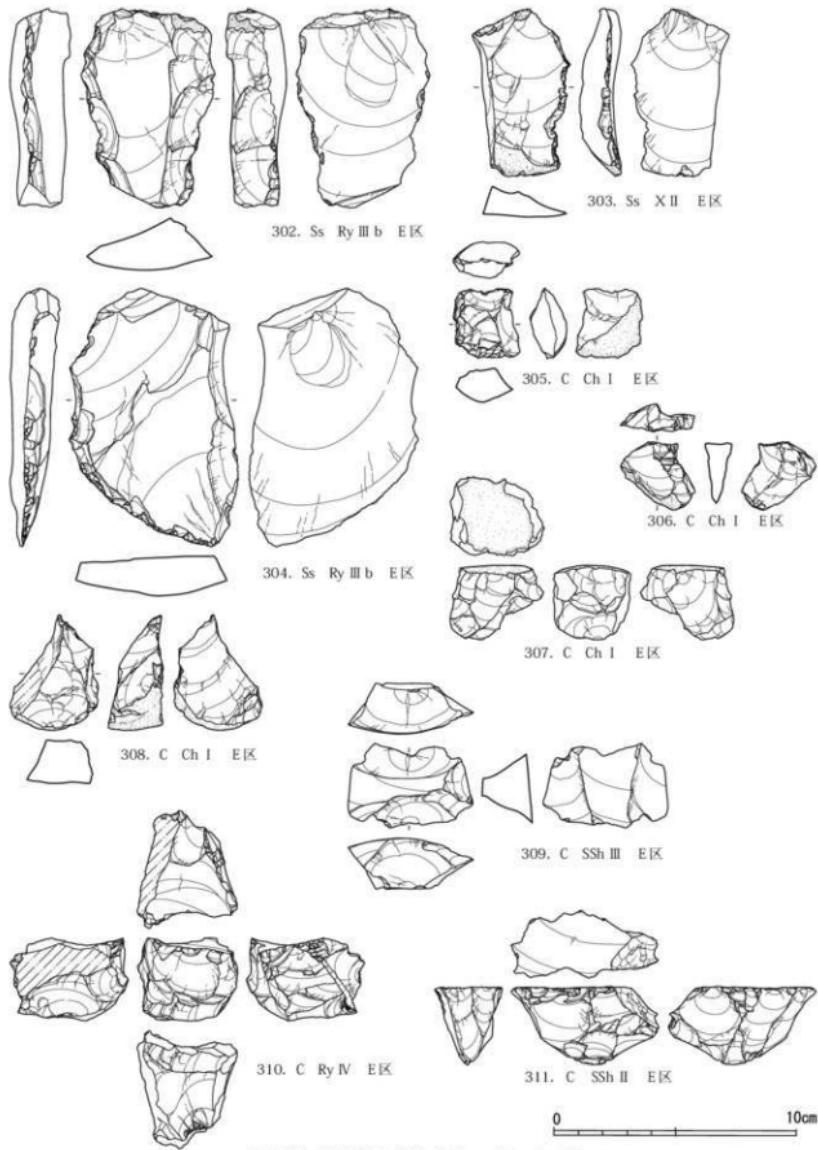
第55図 第V期の石器群(9) ($S = 1/2$)



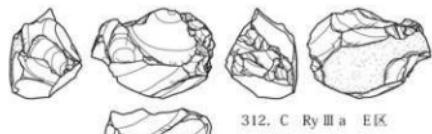
第56図 第V期の石器群 (10) ($S = 1/2$)



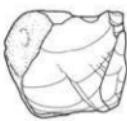
第57図 第V期の石器群 (11) ($S = 1/2$)



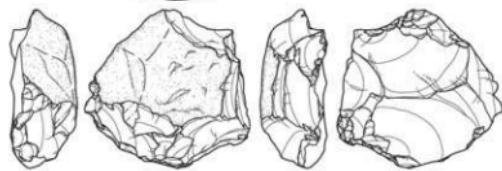
第58図 第V期の石器群 (12) ($S = 1/2$)



312. C Ry III a E区



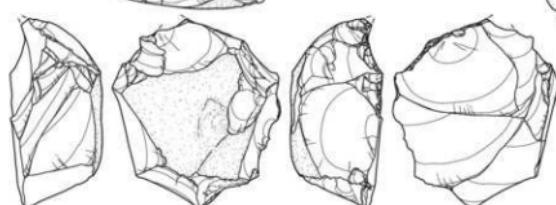
313. C Ho I a E区



314. C SSh I E区



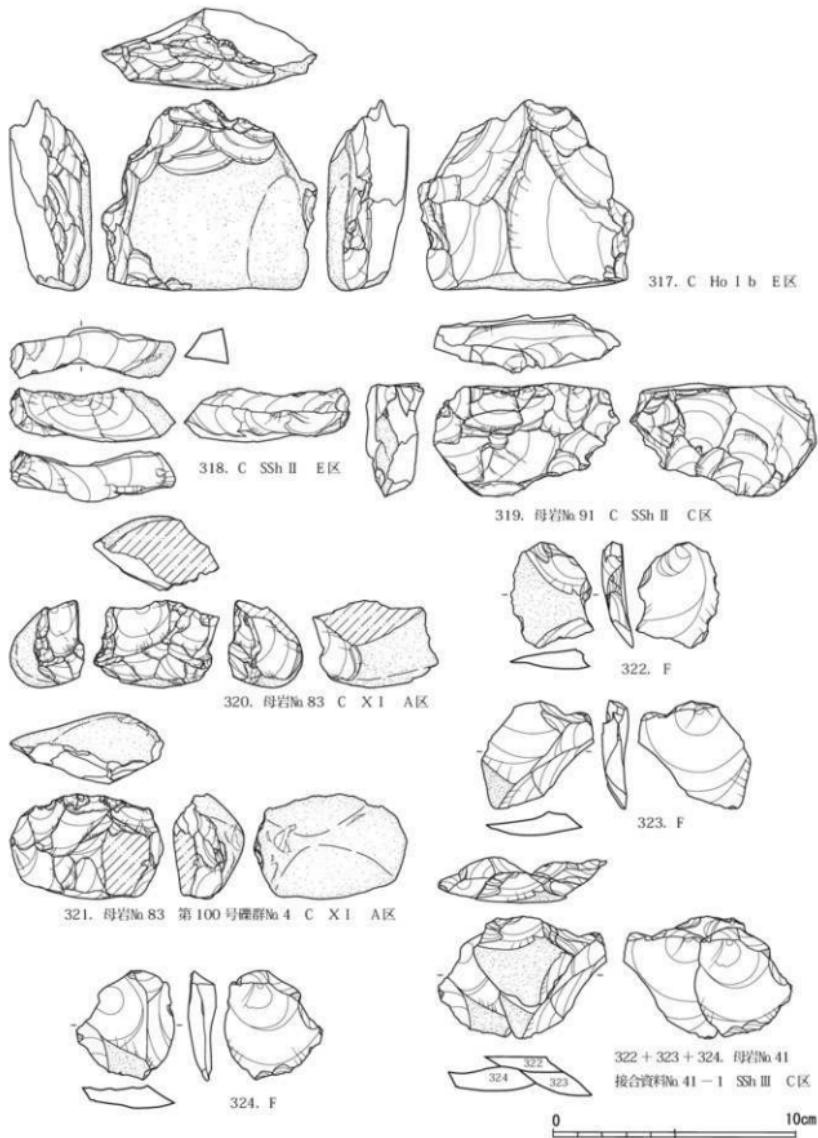
315. C Ho I b E区



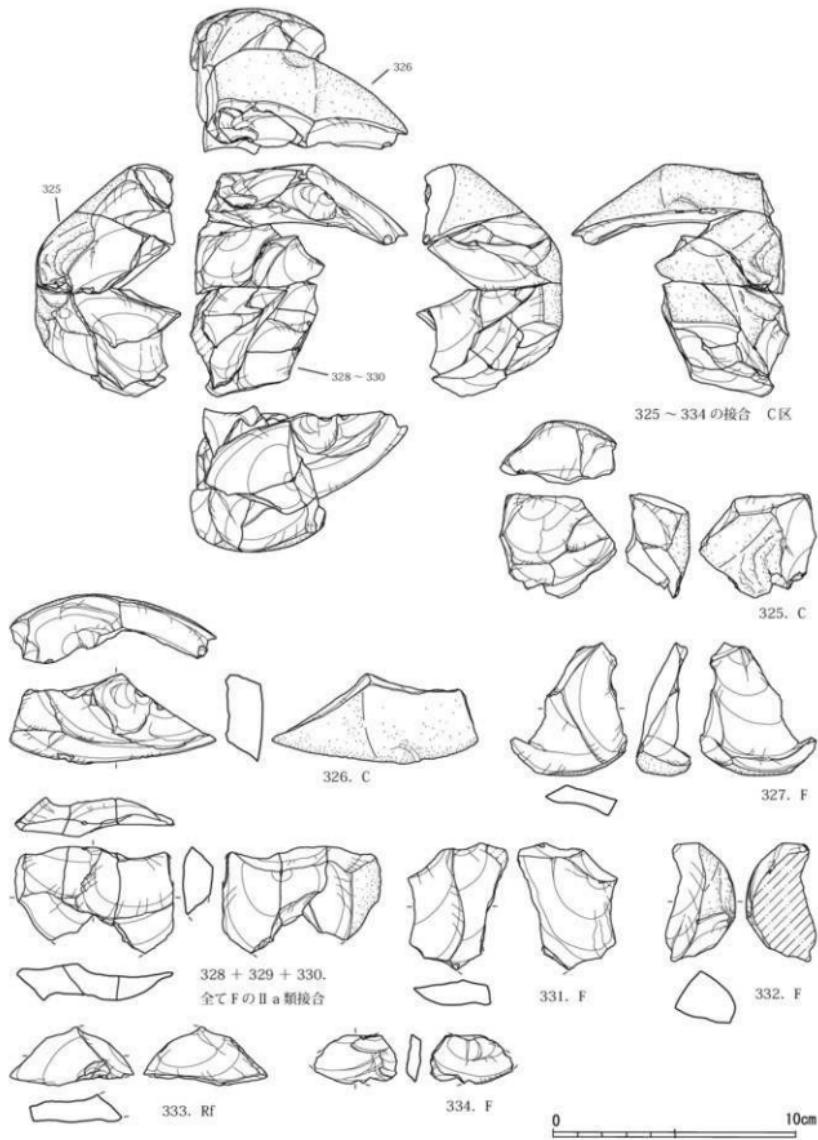
316. C SSh III E区



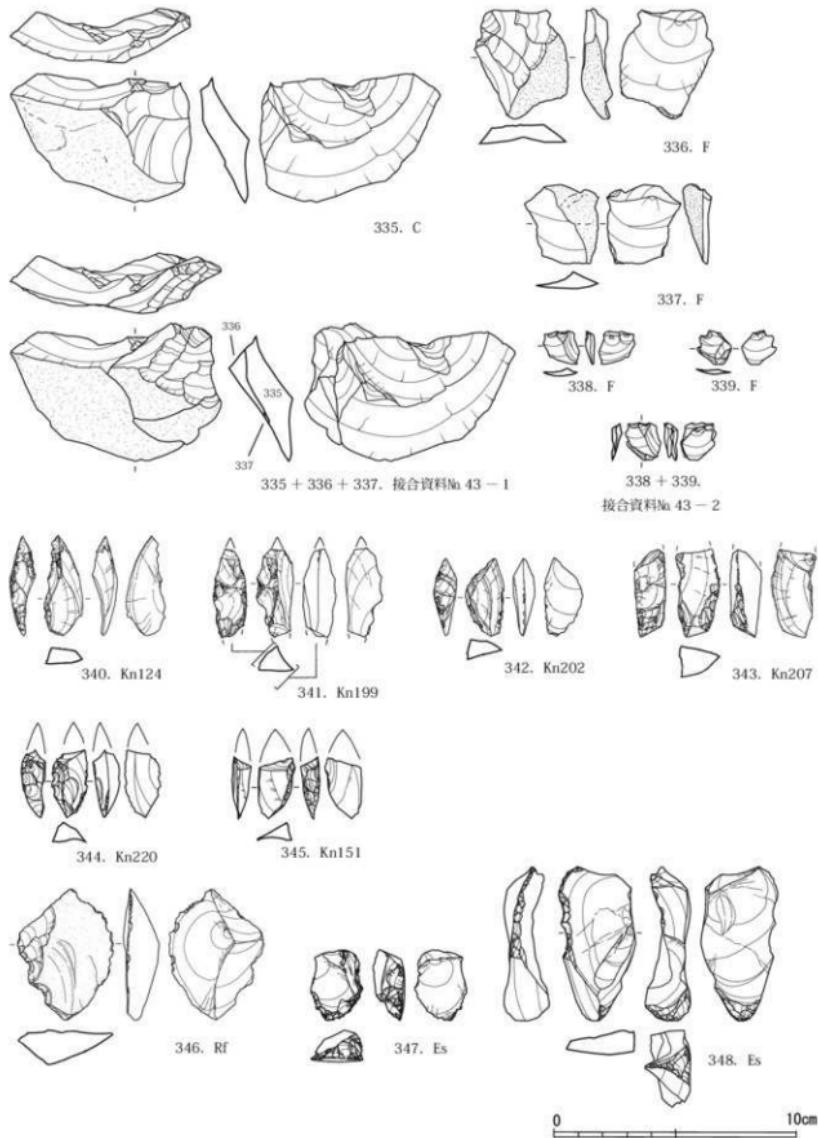
第59図 第V期の石器群 (13) ($S = 1/2$)



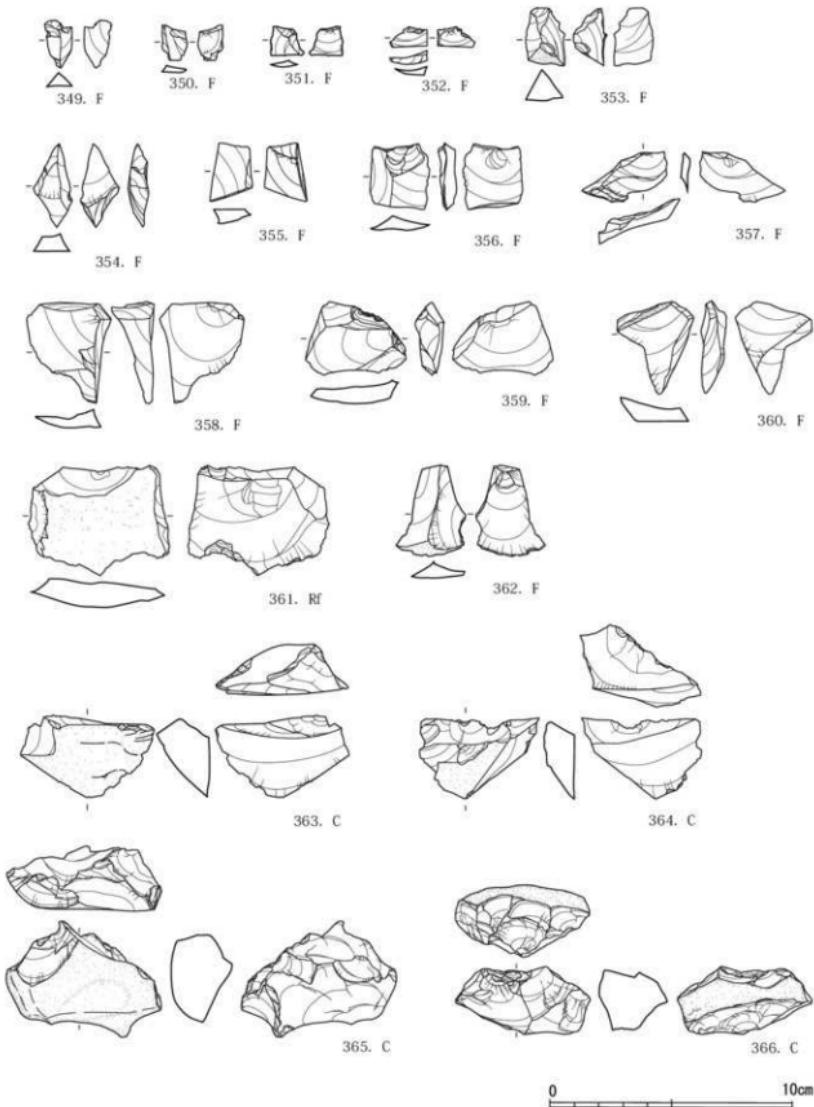
第60図 第V期の石器群 (14) ($S = 1/2$)



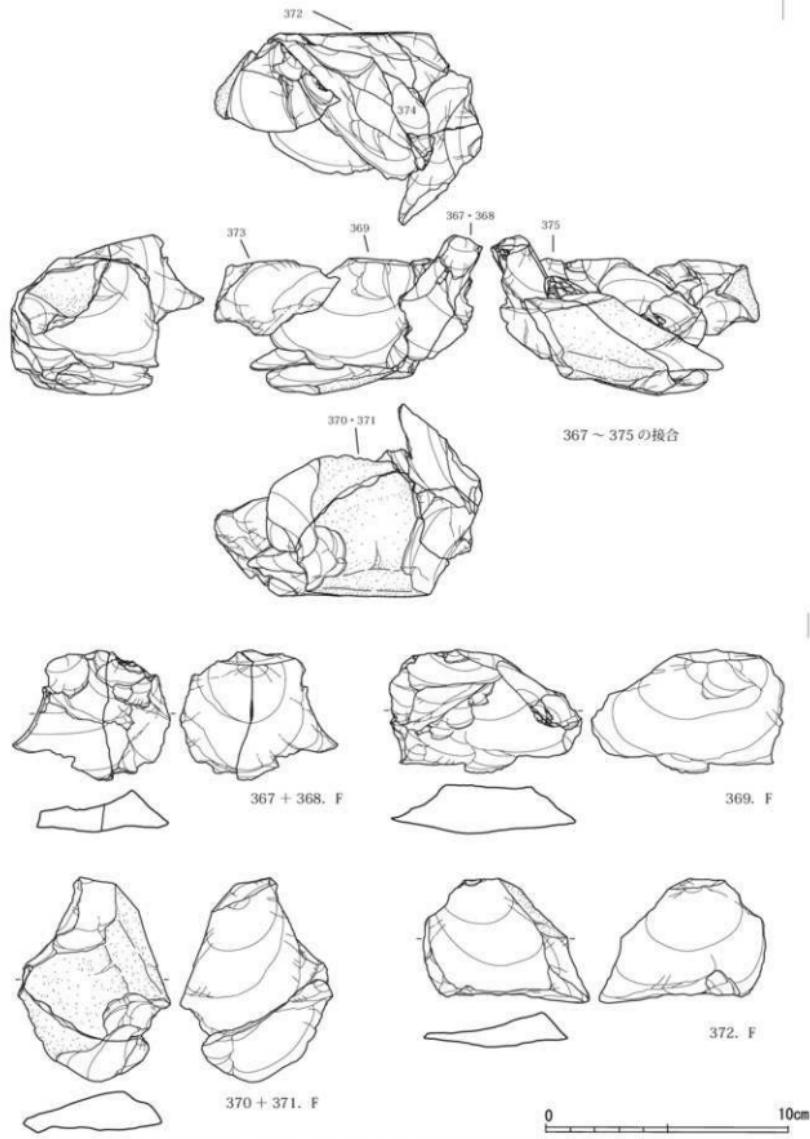
第61図 第V期の石器群(15) 母岩No.43(珪質頁岩II群)接合資料43-1① C区 (S=1/2)



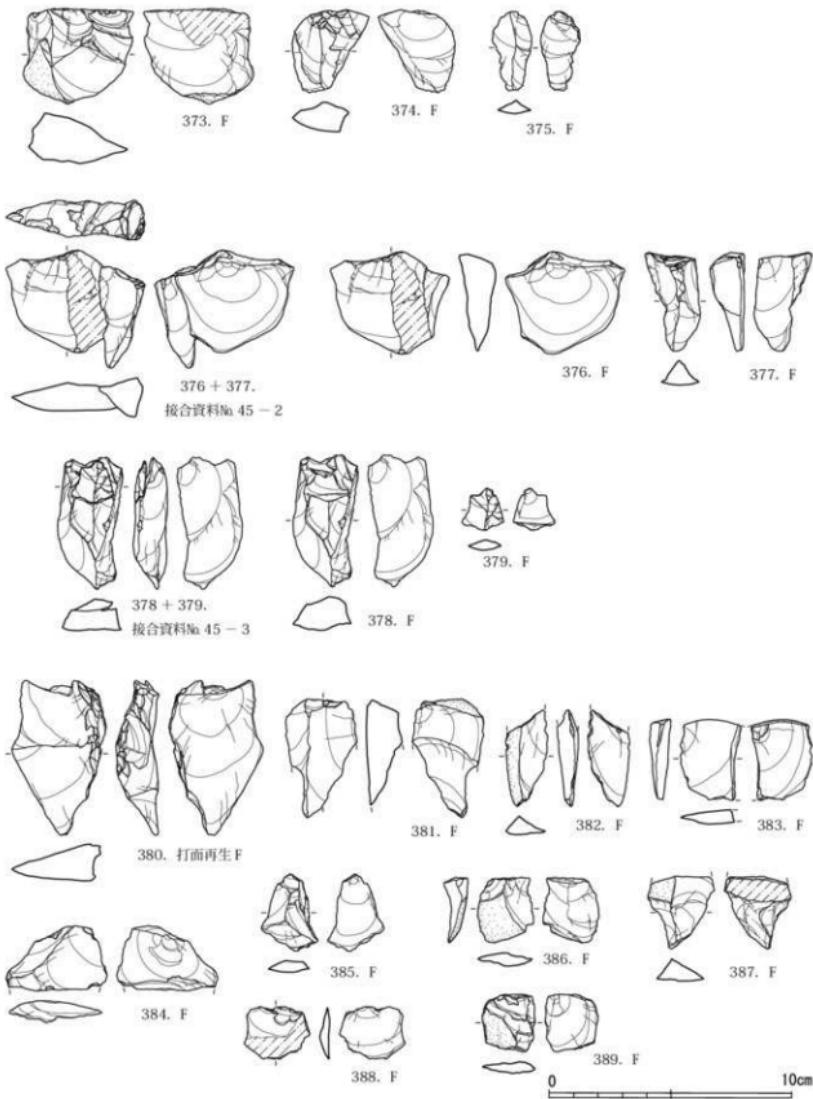
第62図 第V期の石器群 (16) 母岩No.43 (珪質頁岩II群) 接合資料43-1②・43-2・非接合資料 C区 (S=1/2)



第63図 第V期の石器群(17) 母岩No.43(珪質頁岩II群) 非接合資料 C区 (S=1/2)

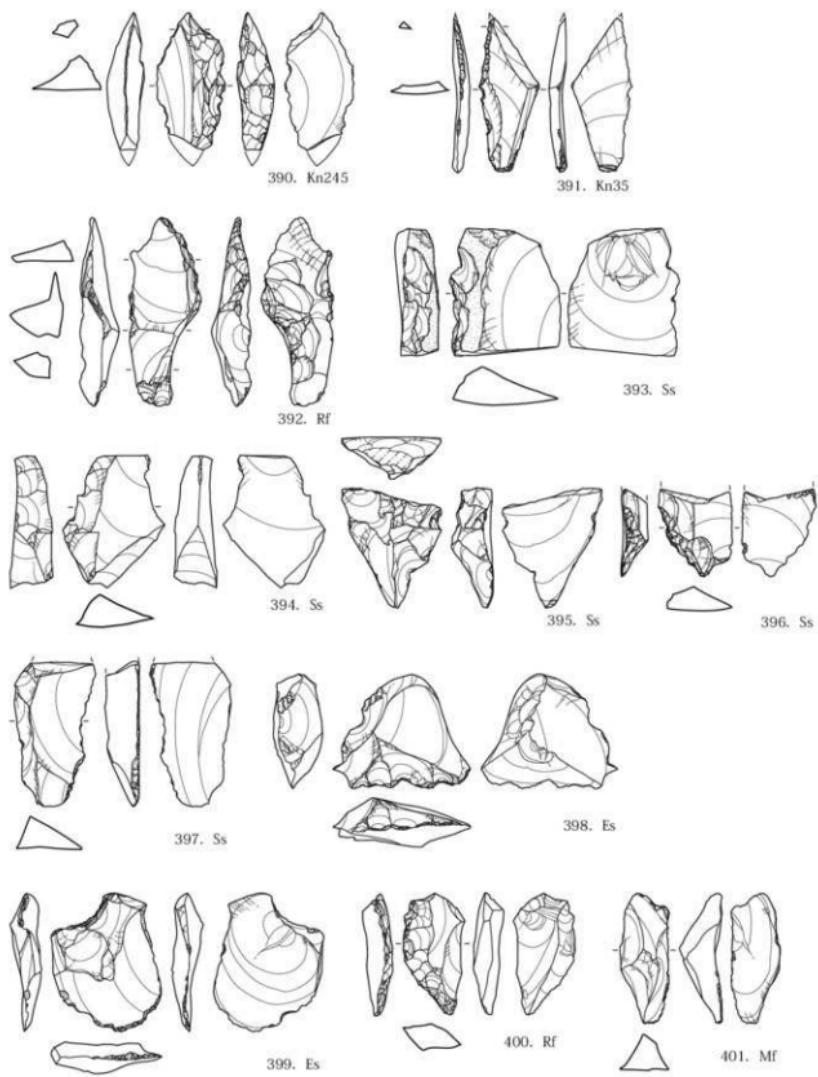


第64図 第V期の石器群（18）母岩No.45（ホレンフェルスII群）接合資料No.45-1① E区 ($S = 1/2$)



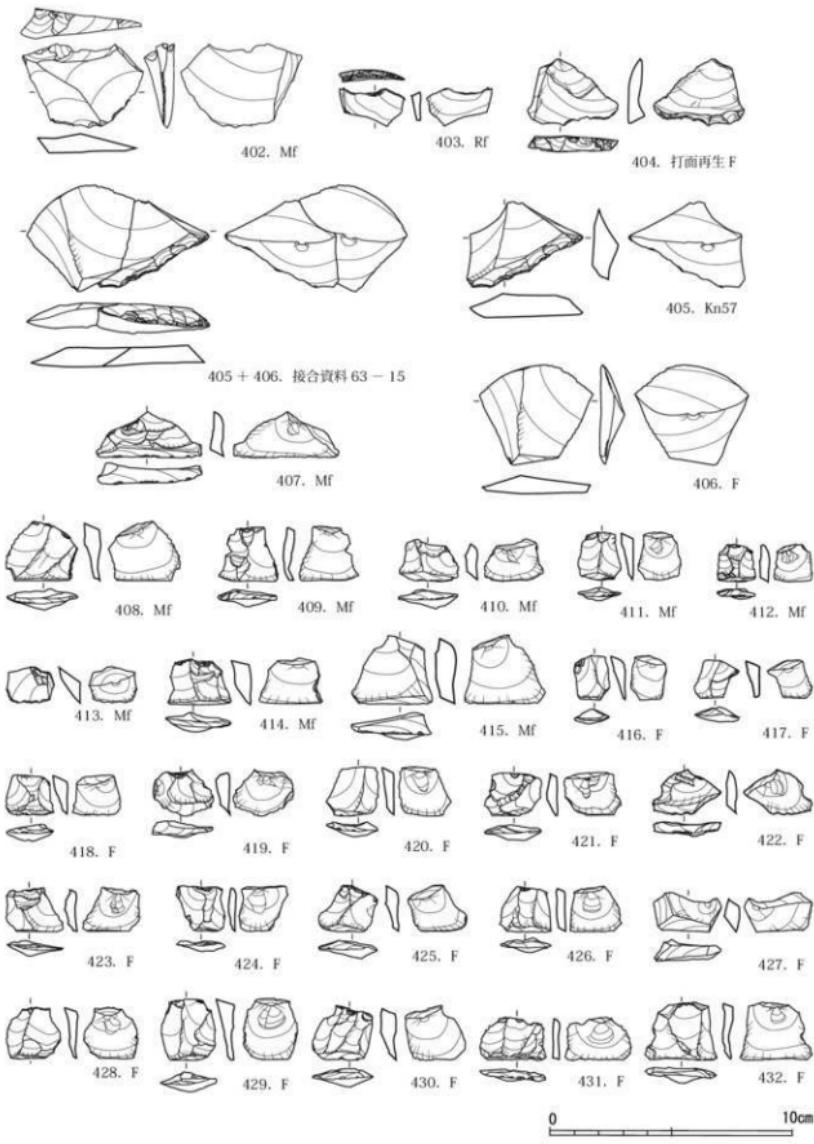
第65図 第V期の石器群(19) 母岩No.45(ホルンフェルスII群) 接合資料No.45-1②(373~375)

45-2+3(376~379) 非接合資料①(380~389) E区(S=1/2)

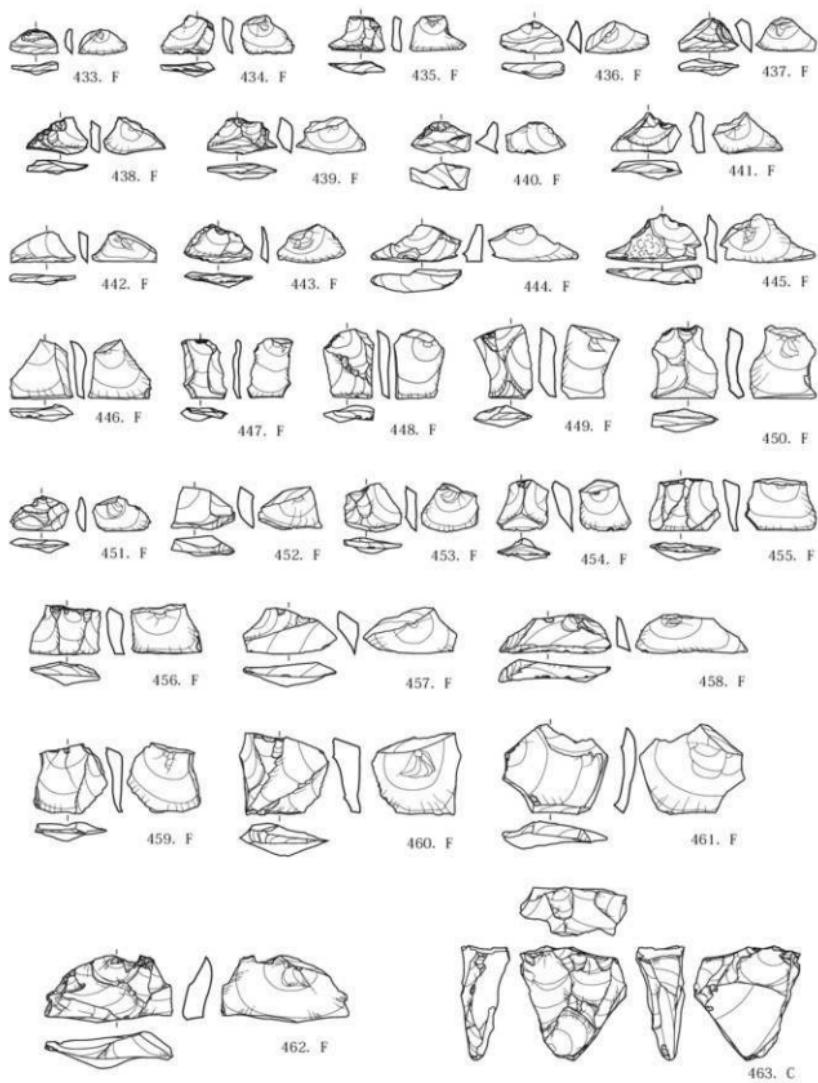


第66図 第V期の石器群 (20) 母岩資料No.63 (珪質頁岩III群) ① B (D) 区 ($S = 1/2$)

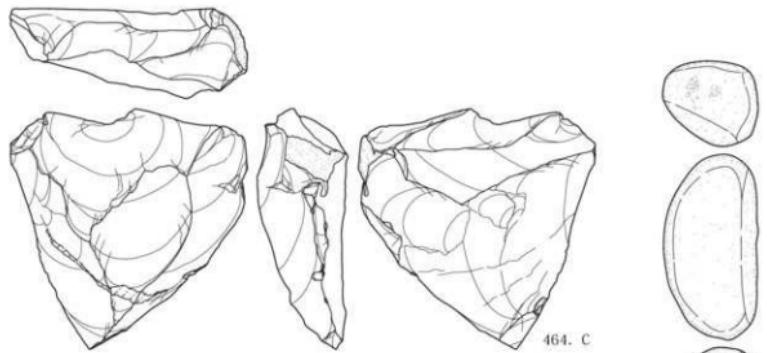
0 10cm



第67図 第V期の石器群 (21) 母岩資料No.63 (珪質頁岩III群) ② B (D) 区 ($S = 1/2$)



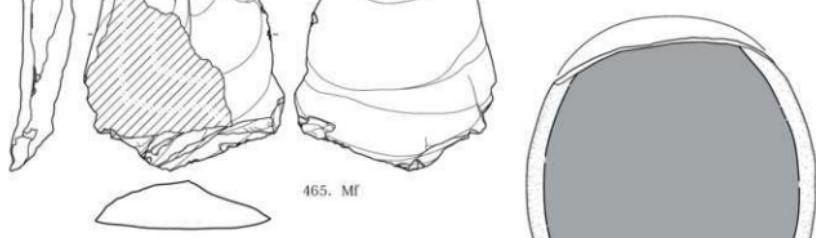
第68図 第V期の石器群(22) 母岩資料No.63(珪質頁岩)③ B(D)区 ($S=1/2$)



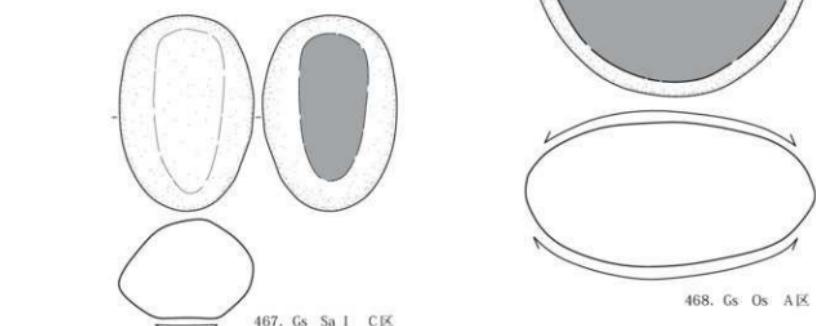
464. C



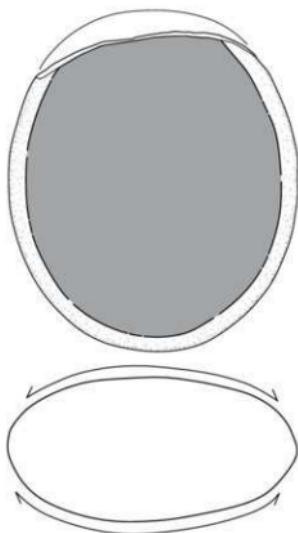
466. Hm Sa II A区



465. Mf



467. Gs Sa I C区



468. Gs Os A区

0 10cm

第69図 第V期の石器群(23) 母岩資料No.47(流紋岩II群b類) 非接合資料(464・465) E区

礫群伴出の敲石・磨石(466~468) (S=1/2)

第10節 後期旧石器時代第VI期

(1) 概要

第IV層から第V層上部を中心に遺構・遺物が確認された。ただし、遺物の上下方向への拡散も起こっている可能性が高く、第III層の縄文時代早期の遺物に混在する当該期と思しきナイフ形石器も散見された。主要な遺物としてはI群を中心としたナイフ形石器・台形石器・搔器・削器・礫器・剥片・石核などがある。

(2) 遺構(第71・72図)

礫群が6基検出された。調査区の内訳では、A区3基、C区2基、E区1基となる。

第1号礫群はA区の第IVb層上部から検出され、66点の礫から構成される。礫は間隔を保つつも、一定のまとまりを持ち、大半が直径およそ1mの範囲内に分布する。

第62号礫群は、A区の第IVa層から検出された。小林軽石の降下時期との関連を考慮すると、あるいは第VII期以降に属する可能性もある。比較的小形の礫が7点ゆるやかなまとまりを持って分布する。

第97号礫群も同様で、13点の礫が直径およそ50cmの範囲内にゆるやかなまとまりを持って分布する。A区のIV層から検出された。

第223号礫群はC区のIVa層からIVb層にかけて12点の礫がまばらに分布する。縄文時代後期以降の第23号竪穴住居に切られているため、本来は西側にも構成礫が分布していた可能性が考えられる。

第228号礫群はC区のIVa層からIVb層にかけて213点の礫が数mの範囲にまばらに分布する。縄文時代早期の散礫と類似した分布状況を示す。今回は図示していない。

第E4号礫群はE区から検出され、59点の礫がゆるやかなまとまりを持って分布する。A区第62号礫群と同様、IVa層からの出土であり、第VII期以降の可能性も考慮する必要がある。

総合的に評価して、第VI期の礫群は、第228号礫群をのぞいて規模が小さく、密集度も低い。後述するナイフ形石器の出土数と比較して、礫群が遺存する度合いは低いといえる。

(3) 遺物

ナイフ形石器(第73・74図)

ナイフ形石器の出土は計85点を認め、うち60点がA区からの出土である。他の調査区では、B(D)区8点、C区11点、E区6点の出土が確認された。大半がA区に集中して分布するよう層が窺える。85点中、48点を図示した。

形態としては、I群a類が多く、続いて同群b・c類の順に数を減じる。II群など他の形態は少量のみ認められる。

I群a類は剥片素材の石核から生産された素材を用いる(第73図469~487、第74図506・513)。石核の素材剥片のボジ面を背面構成に取り込んでいる。

469は背面に被熱によるハジケと考えられる表面の破損が観察される。470は背面は厳密にはボジ面ではなく、節理面であるが、剥片剥離工程の構造上は同等の評価を与える。

474は通常とは異なり、基部付近に背面側から腹面側に向けてプランティングを施す(インバースリタッチ)。

483は大きく反った分厚な剥片を素材とし、基部付近に微弱なプランティングを施している。487も483と類似した形状の剥片を素材とする。

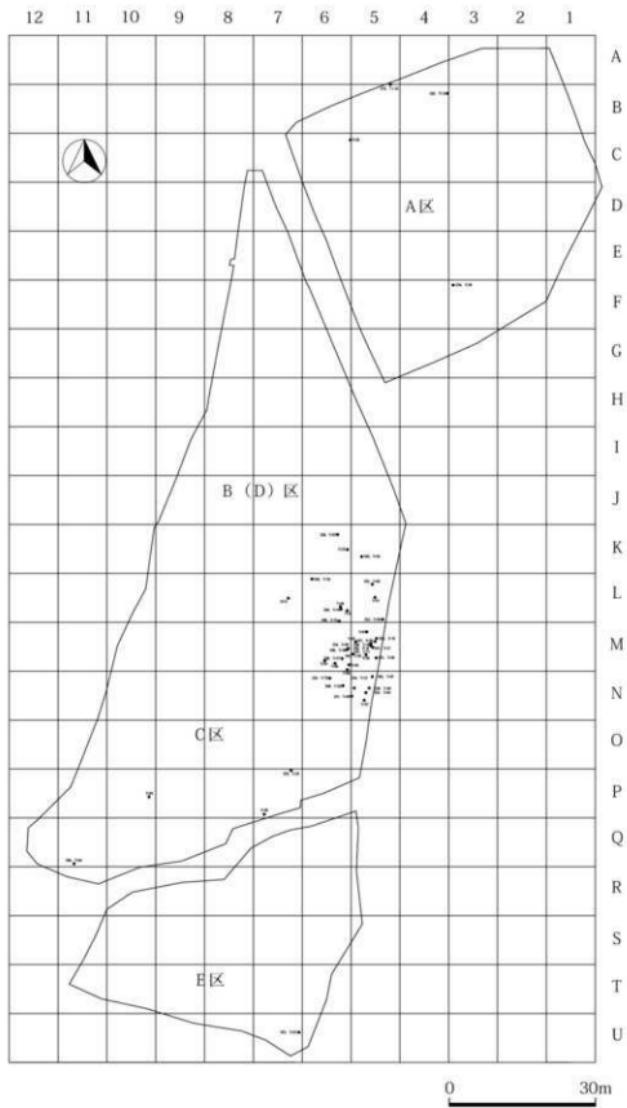
I群b類はa類と同様の剥片剥離技術の所産と考えられるが、背面は全てネガ面で構成される(第73図488~第74図498)。

488・489は黒曜石製であり、黒曜石製の資料は他にもう1点図示していない基部のみのものがある。黒曜石Ib類としたが、产地は不明である。488はI群b類とII類の中間的な加工の様相を示す。

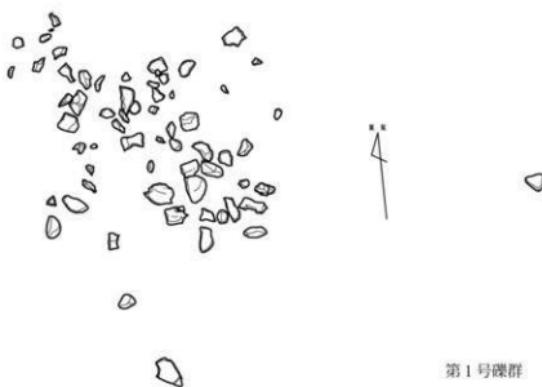
492にもインバースリタッチが認められ、腹面側のバルブの高まりを減じるような平坦剥離も伴う。493は二側縁加工でII群b類とも評価できる。

498は後世の遺構からの出土であり、縄文時代以降の所産である可能性も拭えない。

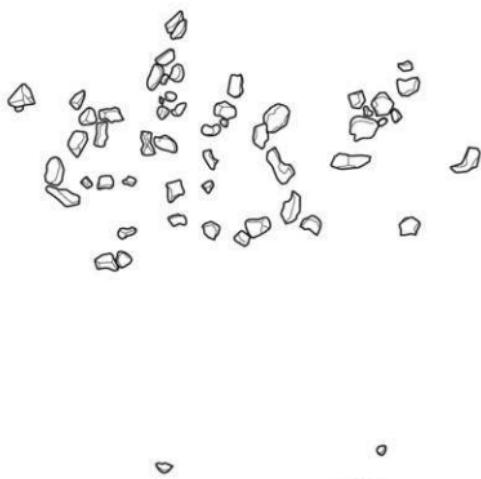
I群c類は、幅広い打面を持つ縦長剥片を素材とする(第74図499~502)。500は一側縁にのみプランティングを施し、III群b類とも評価できる。刃縁には連続する微細剥離痕を伴い、使用



第70図 第VI期の石器の分布 台形石器の分布 ($S = 1 / 1,000$)



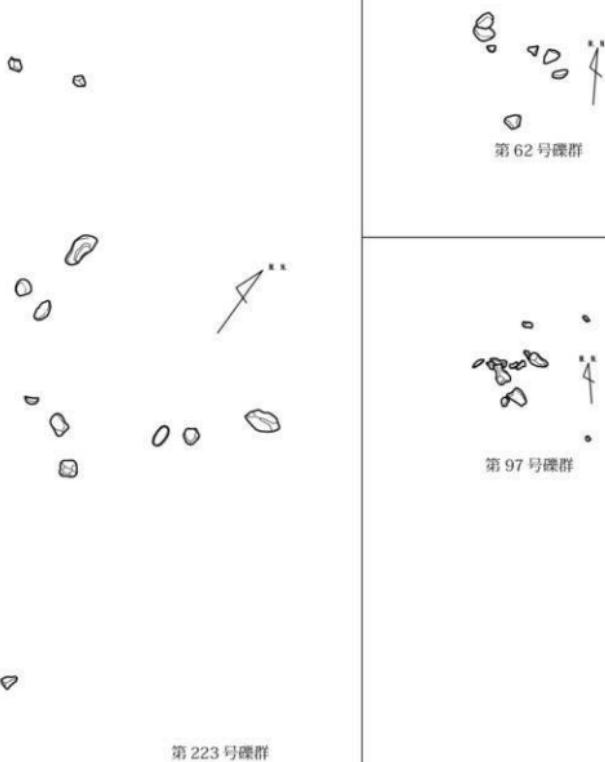
第1号砾群



第E 4号砾群

0 1m

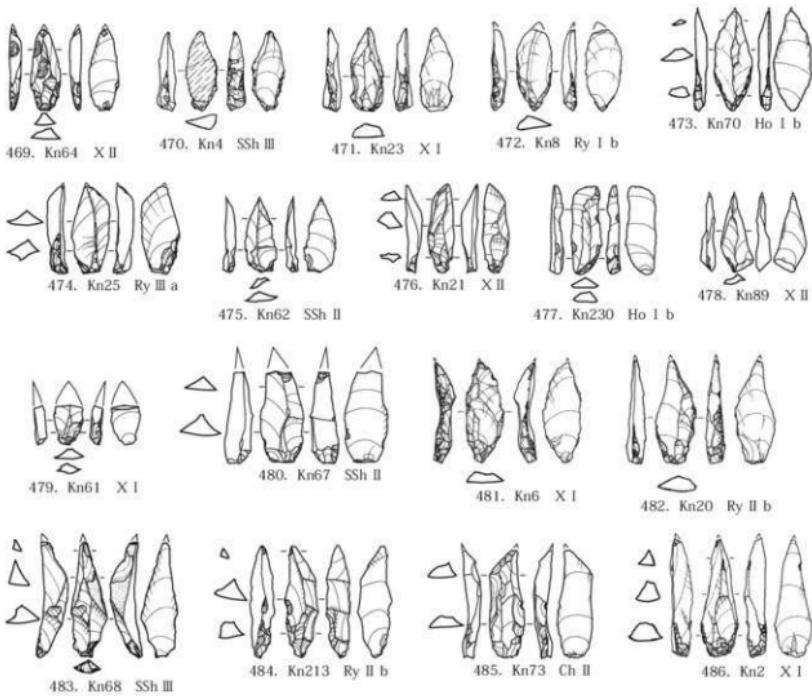
第71図 第VI期の砾群 (1) 第1・E 4号砾群 ($S = 1/20$)



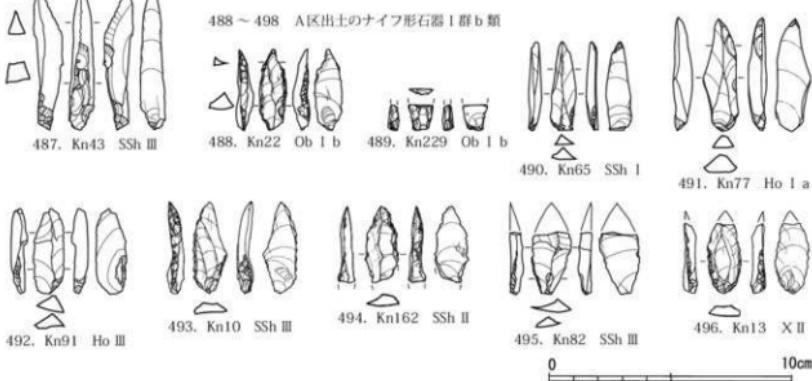
0 1m

第72図 第VI期の硃群（2）第62・97・223号硃群 ($S = 1 / 20$)

469 ~ 487 A区出土のナイフ形石器 I 群 a類



488 ~ 498 A区出土のナイフ形石器 I 群 b類

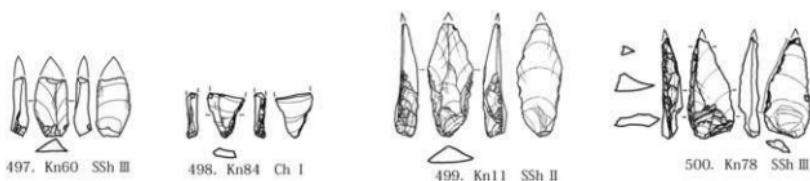


0

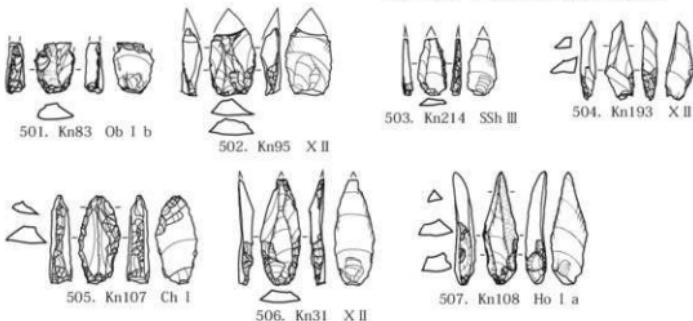
10cm

第73図 第VI期の石器群(1) ナイフ形石器 (S = 1/2)

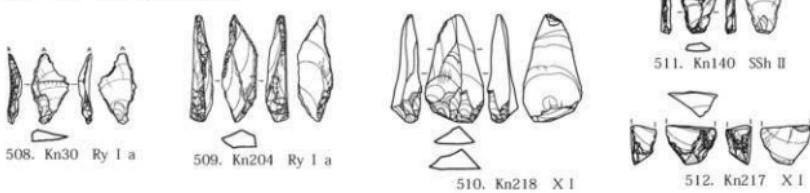
499 ~ 502 A区出土のナイフ形石器 I群 c類



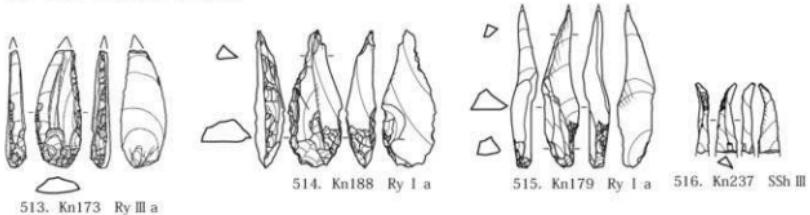
503 ~ 507 B (D) 区出土のナイフ形石器



508 ~ 512 C区出土のナイフ形石器



513 ~ 516 E区出土のナイフ形石器



0 10cm

第74図 第VI期の石器群(2) ナイフ形石器 (S = 1/2)

痕である可能性を指摘できる。

B (D)・C 区からは A 区とはやや異なる様相の資料の出土も確認された。B 区の 505 は、全周にプランティングが巡る資料で、小形の角錐状石器とも評価できる。先端付近の腹面に平坦剥離が観察される。501 は後世の遺構からの出土であり、縄文時代以降の所産である可能性も考えられる。C 区の 508・509 は小形の II 群 a 類とも評価できる資料である。509 の基部にはインバースリタッチも観察される。513・514 も二側縁加工である。513 は背面の左方にボジ面を残す。

512 は、後世の遺構からの出土であり、縄文時代以降の所産である可能性も考えられる。515 は側縁が湾曲した縦長剝片を素材とする。

台形石器（第 75 図）

台形石器は、58 点確認され、うち 40 点を図示した。調査区毎の内訳では、A 区 11 点、B (D) 区 5 点、C 区 41 点、E 区 1 点となる。ナイフ形石器とは異なり、C 区に集中して分布する様相が明確である。

A 区は 11 点中、8 点を掲載した（517～524）。石刃ないしこれに類する縦長剝片を素材とした台形石器 I 群としては、519・524 などが挙げられ。他は一般的な剝片を素材とした II 群である。注目すべき資料としては、黒曜石 I 群 a 類を用いた 520 と、黒曜石 II 群 b 類を用いた 521 がある。前者は典型的な桑ノ木津留・上青木系であり、後者は日東産黒曜石によく類似する石質である。

平面形態の点では逆台形を呈する通有の資料のほか、523・524 のように逆二等辺三角形を呈する資料も認められた。

518 には刃縁に細かな平坦剥離痕が複数観察され、使用痕である可能性も考えられる。

B (D) 区では 5 点中、3 点を掲載した（525～527）。525 は典型的な台形石器 I 群である。526 は小形品で、良質のチャート製である。527 は後世の包含層からの出土である。

C 区では 41 点中、27 点を図示した（458～554）。台形石器 I 群としては、528～532 が挙げられる。いずれも小形の石刃および縦長剝片を

折断し、二側縁の台形石器に仕上げている。いずれもバルブ側の部位を用いるという共通点が取扱われる。

一般的な剝片を用いる II 群の中でも、形態には変異が認められる。539・545 などは幅に比べて長さが短く、半月形に近い形状を呈する。刃部が必ずしも直線にならない 537・542～544 などの資料も注目される。

553・554 は比較的大形の資料である。553 は背面に、554 は腹面に、それぞれ奥まで伸びる広く深い平坦剥離が施されている。これらはバルブ付近の厚みを減じるための対応と考えられる。

E 区では 555 の 1 点のみ確認された。典型的な台形石器 I 群である。

■母岩 No 42 (流紋岩 II 群 b 類)：接合資料 No 42-1・2 (第 76～92 図)

E 区の S 7 グリッドを中心に集中部が形成され、他に 3 点が 10～20 m ほど離れた分布を示す（第 76 図）。このうち 1 点は集中部と接合関係を持つ。接合資料 42-1 : 82 点、42-2 : 2 点、非接合資料 : 12 点で総計 96 点から構成される母岩資料である。

接合資料 42-1 は石核 28 点と剝片・二次加工剝片・微細剥離剝片類 54 点を中心に構成され、二次加工剝片、微細剥離剝片以外の明確なトゥール類を欠くが、技術的特徴から、ナイフ形石器 I a・b 類の製作を主目的とした剝片剥離の結果残された母岩資料と考えられる。石核は 605 のように石刃・縦長剝片以外の剝片を目的とする資料も含むが、大半は剝片を素材として小形の石刃・縦長剝片を獲得した痕跡を残す。

全てのバーツが接合した状態では、碟面のカーブから推定して一抱えほどのラグビーボール大の原石が想定される。この大形の原石を複数に分割した大形剝片、分割碟を素材とした剝片剥離工程が枝分かれしてゆく。記述・記載上の便宜から、接合資料 No 42-1 を A～H の八つのパートに分けた。

接合資料 No 42-1 A は、3 点の石核と 18 点の剝片から構成される（第 79・80 図）。石核はいずれも小形石刃ないし縦長剝片の生産に対応し

たもので、557には原石から分割した際の素材のボジ面が残存する。558も残核は小形であるが、当初は、556や557と同様のサイズと形態であったと考えられる。これらの石核に接合するのが559～573の剥片である。559～565は不整形ではあるが、石刃の範疇に入れてよかろう。559～561のようにウートラバッセが多発したこと、も、558のような残核形態に至る一因かもしれない。いずれも打面調整・作業面調整などは顕著ではない。これらの剥片のうち、567のみ微細剥離痕が末端に残るが、他はすべて未使用のまま残されていた。

接合資料No 42-1Bは、2点の石核と2点の剥片からなる（第81図）。576と577の石核はいずれも大形厚手の剥片を素材とする。簡単な打面調整も認められる。577は最終的には階段状剥離が頻発し、剥片剥離を終了したものと考えられる。556には作業面が2面みられ、正面図下側に位置する作業面が最終作業面となる。さながら細石刃石核のような外観を呈するが、生産されているのは、575のようなサイズと形態の剥片と推定される。574も石刃と呼べるが、やはりウートラバッセを起こしている。背面の稜線上には若干の小剥離痕が観察され、石核調整の痕跡である可能性もある。

接合資料No 42-1Cは、4点の石核と5点の剥片、1点の二次加工剥片からなる（第82図・第83図585～587）。石核はすべて剥片素材であり、剥片の末端に設けた折断面を打面にするものの（578）や、石核の素材剥片の元々の打面をそのまま打面として利用するもの（580・583）など変異がある。目的剥片としては、581や582以上のサイズの石刃が考えられる。

接合資料No 42-1Dは、9点の石核と5点の剥片からなる（第83図588～591・第84図）。

石核はやはり剥片素材石核が多く、593以外はすべてこれに該当することが明白である。石核の素材剥片の元々の打面を利用するものが目立ち、588～592、595がそれにあたる。剥片素材石核の場合、元々の剥片の側縁を背面に取り込むように剥片剥離をおこなっている様子がよくわかる。

接合した状態を観察すると、これらの剥片素材石核は、打面と主要剥離面の方向が揃う事実から、元は同じ石核から剥離された兄弟剥片であったことが理解される（第83図588～601の接合）。

原石を数個に分割したうちの1個の分割碟ないし大形剥片の碟面を除去し剥片剥離を開始した初期段階の所産であろう。593・594は剥片剥離の工程上は本来、接合資料No 42-1Cと一連のものと評価できる（第85・86図）。

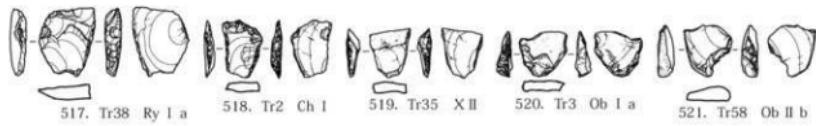
接合資料No 42-1Eは石核4点、剥片4点、二次加工剥片1点からなる（第87図・第88図609～611）。石核の形態は、概ねこれまでに述べてきた接合資料No 42-1A～Dと一致するが、605のみ趣きを異にする。これも本来は剥片素材石核であった可能性があるが、最終的には碟面を背にした作業面の周囲を巡るように剥離が繰り返され、幅広・貝殻状などの一般的剥片を得ていている。接合状態では内部の核となる位置にあり、このパートの最終的な残核との評価が妥当である。609～611は石刃・ないし縦長剥片で、打面調整は観察されず、609のみに頭部調整の可能性がある剥離痕跡が観察される。

接合資料No 42-1Fは、剥片類のみによる接合資料で、6点の剥片と1点の二次加工剥片からなる（第88図612～618）。6点の剥片のうち、2点はおそらく剥片剥離時の衝撃による同時割れのIIc類接合である（616+617）。これらの剥片類は、616+617、618をのぞき、分厚で不整形な資料が多く、①原石→②分割碟→③石核素材となる剥片→④トゥールの素材となる剥片、のいずれの工程にも位置付けにくい。可能性としては③の石核調整時の副産物である可能性（⑥）を考えられよう。612は石刃といつてよいが、やはり、ウートラバッセを起こしている。

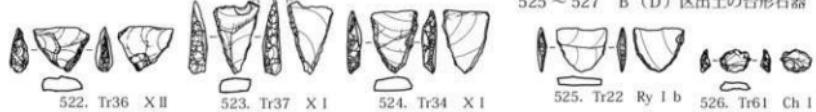
母岩資料No 42-1Gは、1点の石核と5点の剥片からなる（第89図）。

619は石核で、やはり剥片素材である。打面に観察される剥離痕は簡素な打面調整の痕跡である可能性が考えられる。剥片類には目的剥片と思しき資料はなく、いずれかの段階の石核調整に伴

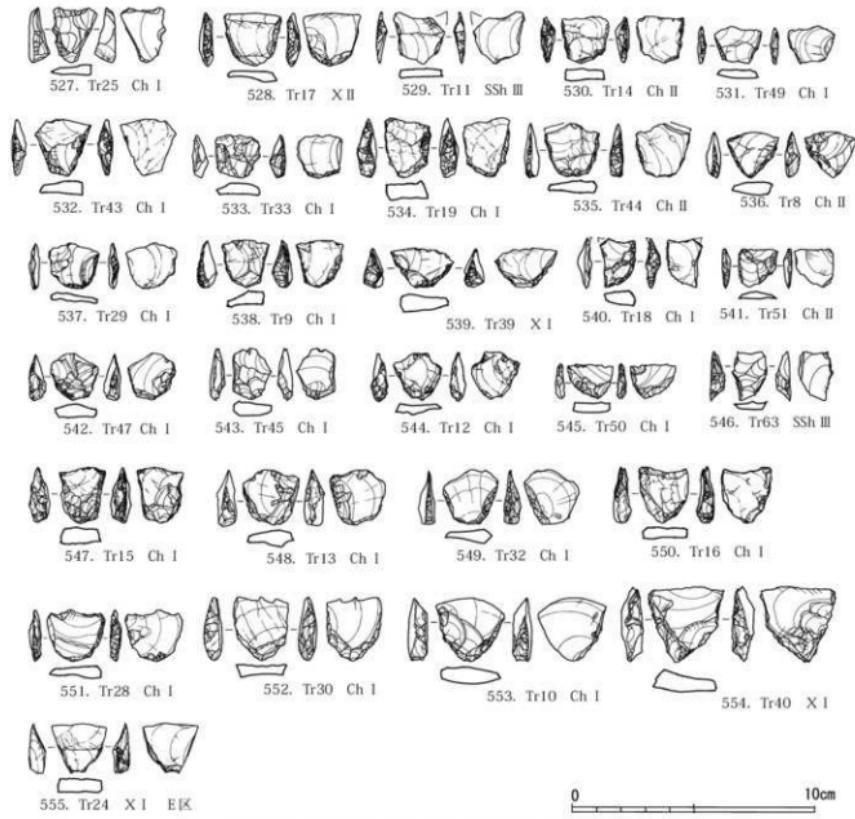
517～524 A区出土の台形石器



525～527 B (D) 区出土の台形石器

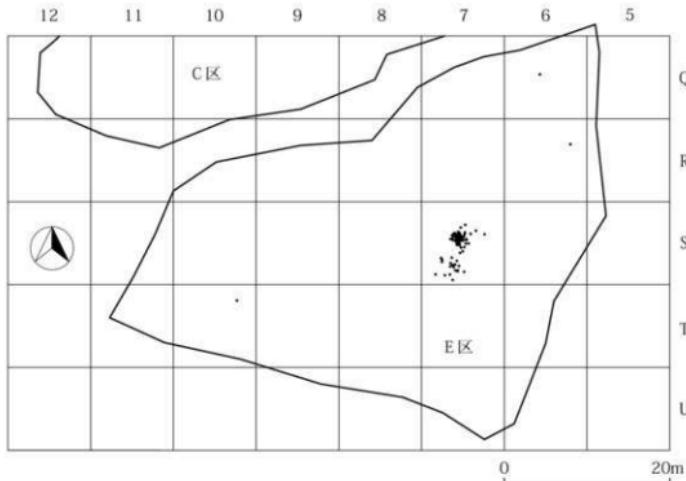


528～554 C区出土の台形石器



0 10cm

第75図 第VI期の石器群(3) 台形石器 (S = 1/2)



第76図 E区における母岩No 42の分布 (S = 1 / 500)

う剥片であると考えられる。620は前述した⑤の段階の所産である可能性があろう。また、624も作業面調整剥片である可能性が高い。

接合資料No 42-1Hは、4点の石核と10点の剥片からなる(第90・91図)。

625・626・628は典型的な剥片素材の石刃石核であり、その小口を作業面に設定して石刃・縦長剥片を生産している。ただし、打面の設定は、接合資料No 42-1C・Dにみられたような元々の打面をそのまま利用する方法ではなく、剥片の側縁などに折断面を作出し、これを打面とする場合が目立つ。627の石核からは637の底面を有する矩形剥片(有底剥片)が剥取されており、続く636も有底剥片である。また、現在は欠落しているが、同様の剥片が637に先行して剥取されていることを、接合資料に残る空隙から読み取ることができる。したがって、石刃やそれに類する縦長剥片類とは別立てで、これらの有底剥片に対する一定の需要があったことが推定される。とはいって、その需要は629~632などの石刃類に比較してごく少量であったことも間違いかろう。

633+634は1点の縦長剥片のIIa類接合である。

接合資料No 42-2は2点の剥片同士の接合である(第92図639・640)。639は石刃、640は不定形剥片である。本接合資料も接合資料No 42-1に合流する可能性が高いが、これまでの整理作業中にはかなわなかった。

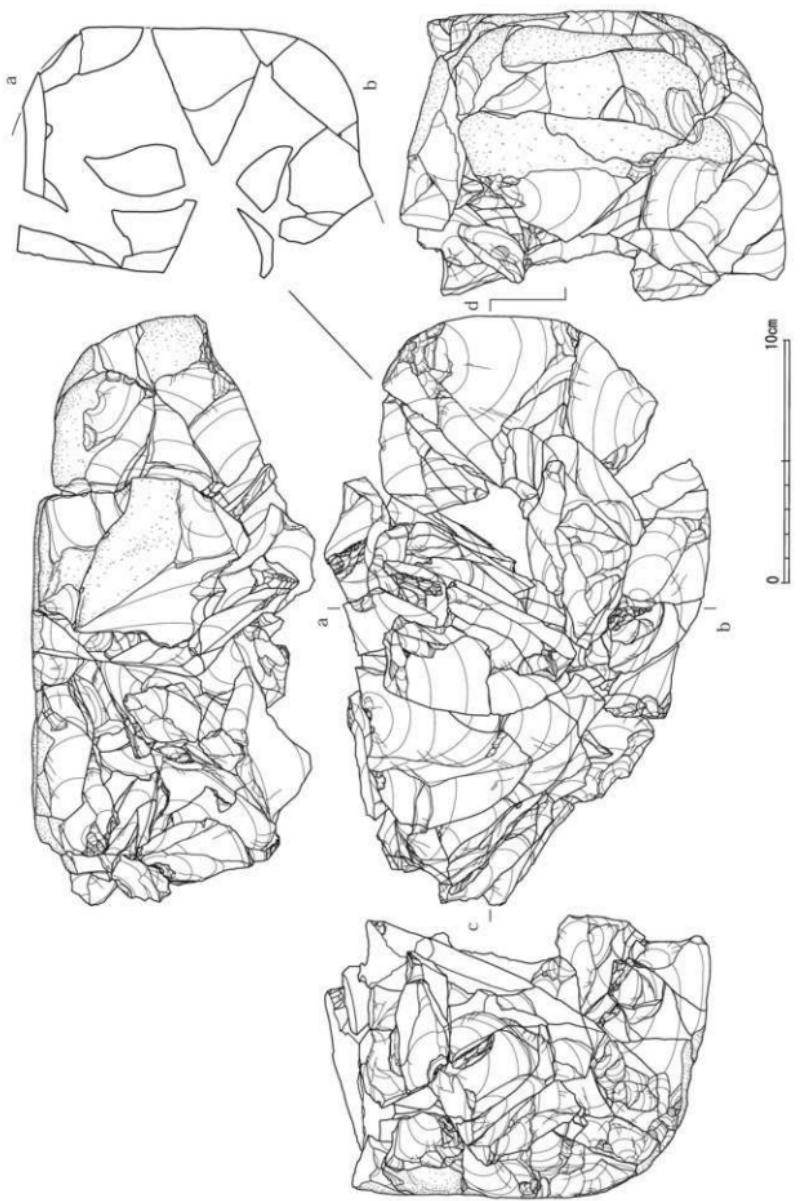
母岩No 42には、これまで述べた接合資料以外に、12点の非接合の同一母岩資料がある(第92図641~652)。このうち641~643は石刃と呼びうるもので、特に641は第73図483・487や第74図515のナイフ形石器の素材と共通する形態を備えている。これらの非接合資料についても、本来的には接合資料No 42-1に含まれる可能性がきわめて高い。

楔形石器(第93図653・654)

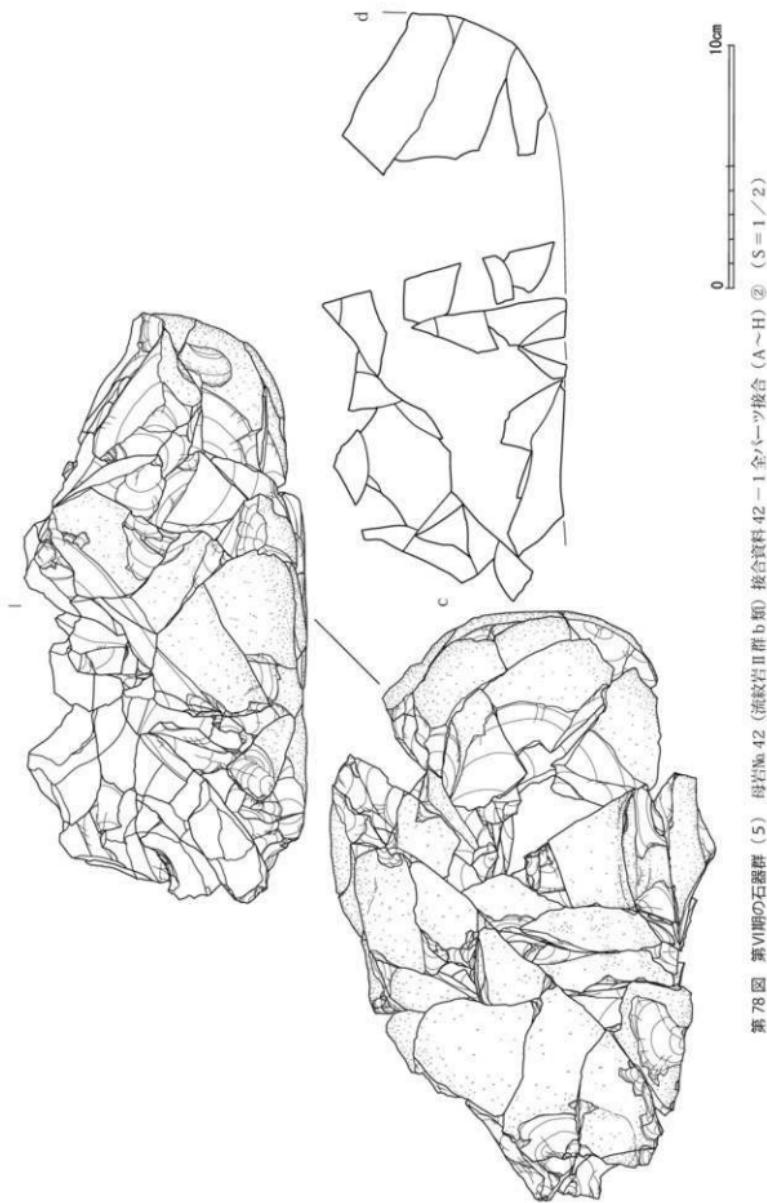
楔形石器が2点確認された。いずれもチャート製である。具体的な機能・用途は不明である。

削器(第93図656~658)

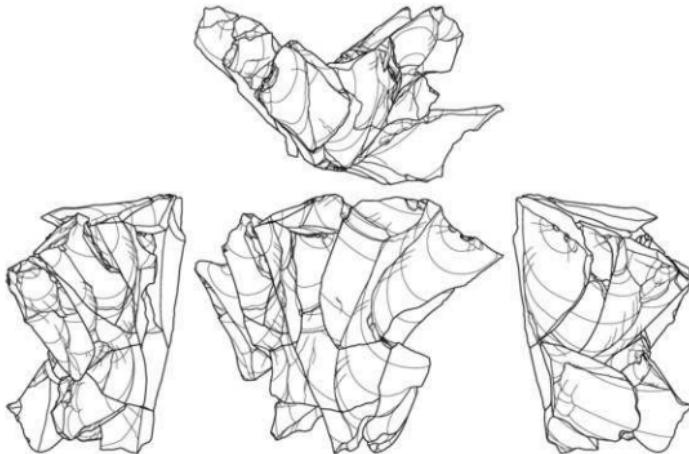
656・657は縦長剥片製の削器である。656は両側縁に刃部が形成される。658は幅広剥片製で、主要剥離面の打面側に平坦な剥離痕が多数入る。



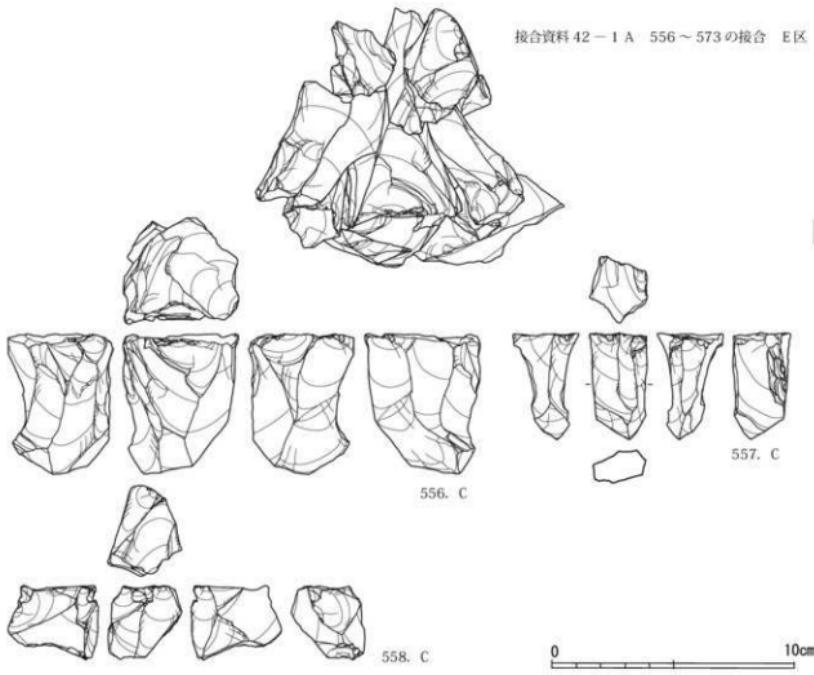
第77図 第VII期の石器群(4) 石片No.42(流紋岩II群b類) 接合資料42-1全ハーフ接合(A~H)① (S=1/2)



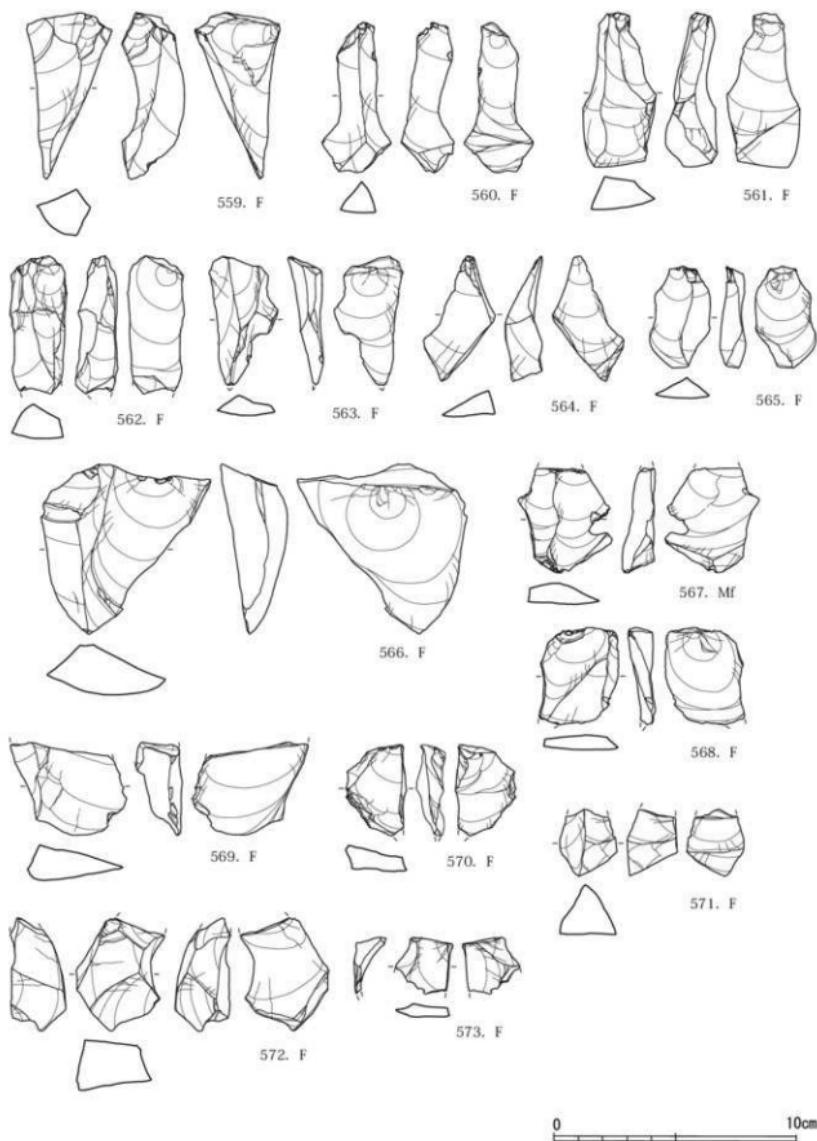
第78図 第VII期の石器群(5) 母岩No.42(流紋岩II群b類) 接合資料42-1全, パーツ接合(A~H)② (S=1/2)



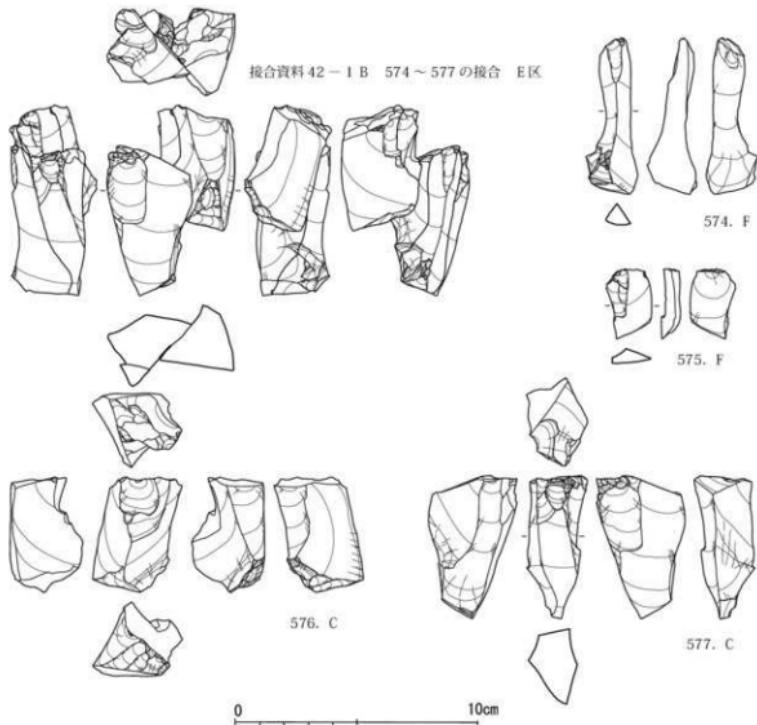
接合資料 42-1 A 556~573 の接合 E 区



第 79 図 第VI期の石器群 (6) 母岩No 42 (流紋岩 II 群 b 類) 接合資料 42-1 A① ($S = 1/2$)



第80図 第VII期の石器群（7）母岩No.42（流紋岩Ⅱ群b類）接合資料42-1A② ($S=1/2$)



第 81 図 第VI期の石器群(8)母岩No.42(流紋岩II群b類)接合資料42-1B (S=1/2)

一応、削器としたが、別の石器の未完成である可能性も考えられる。

礫器 (第94図 669・670, 第95図)

669は両刃礫器である。礫面が残る側の刃縁にhじや細かな剥離痕が観察される。他の三点はいずれも片刃礫器である。670の刃縁にもやや細かな剥離痕が観察される。673と674に関しては石核V群(礫器状石核)とする余地も残る。

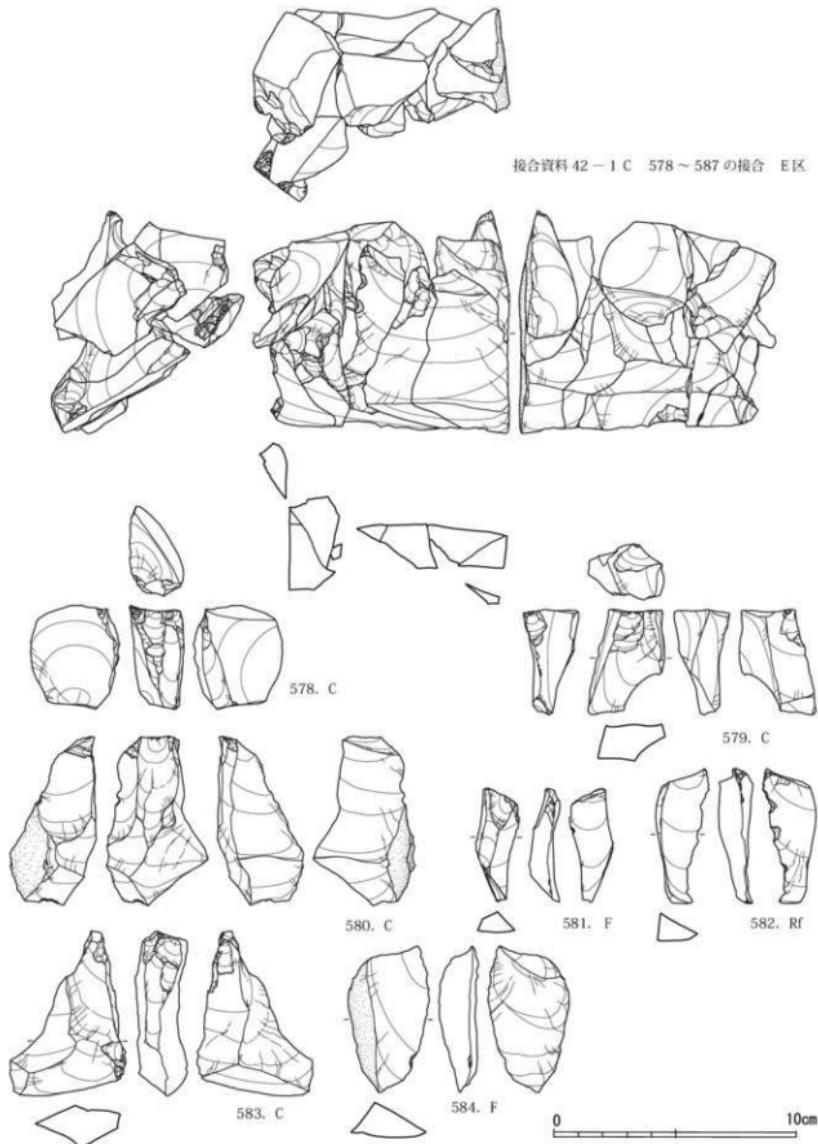
磨石・敲石 (第94図 671・672)

671は磨石の破片であった可能性がある資料である。側縁をのぞき表裏両面が著しく平滑である。ただし、自然礫の可能性もある。672は敲石であるが、敲打痕は弱い。

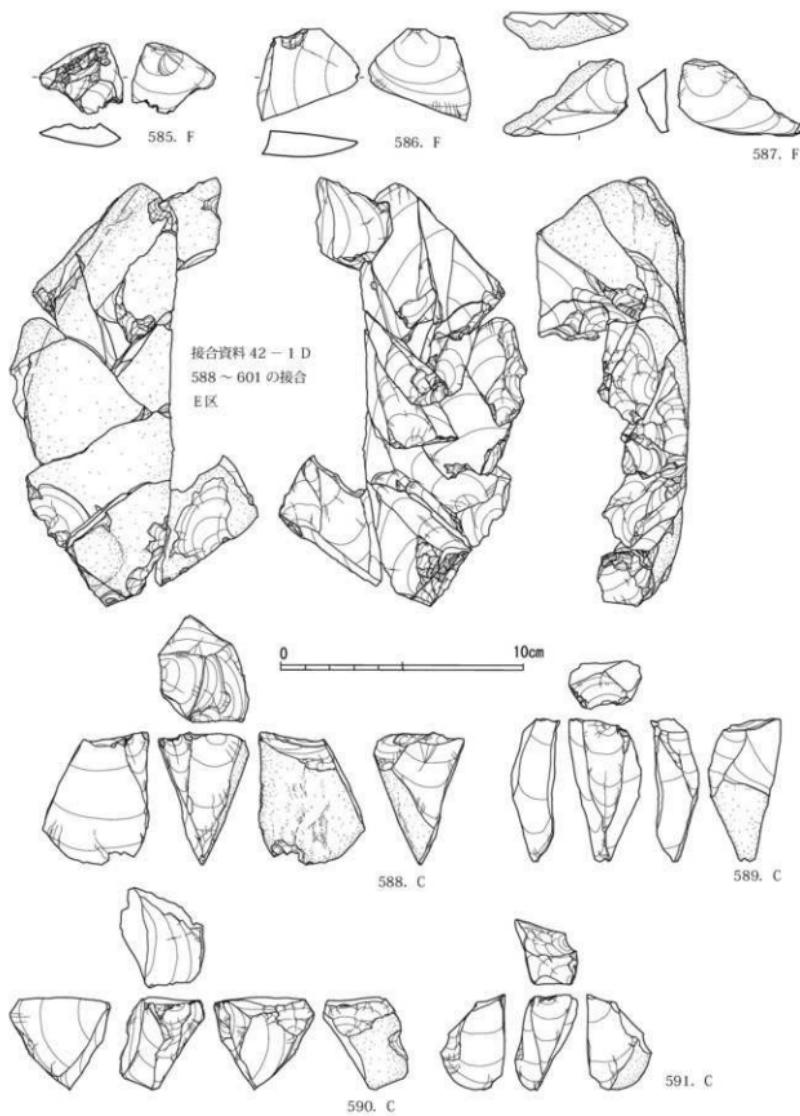
(4) 小結

a 器種構成と剥片剥離技術

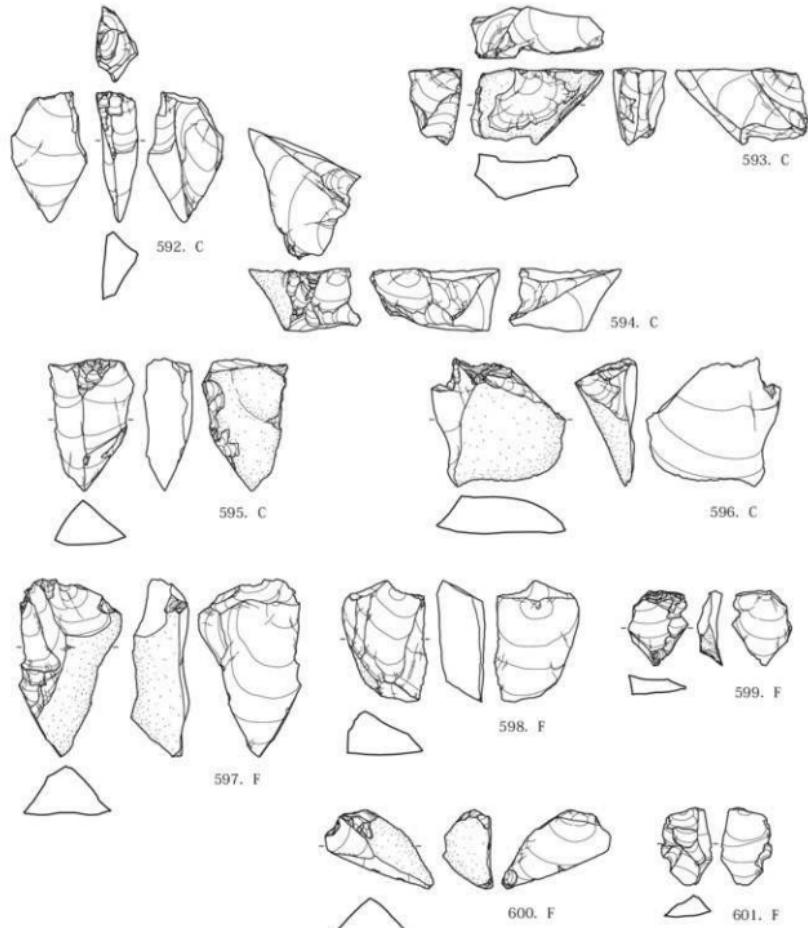
器種構成はナイフ形石器I a・b類、剥片、石核からなる。石核は、分割礫を素材としたものに加え、明確な剥片素材石核も認められる。剥片素材石核は、打面を、素材剥片の打面、分割面、折断面、背面など様々な部位に設定する。一方、作業面は剥片素材石核の小口に設定する場合などがある。しばしば背面にボジ面を残し断面が矩形を呈する前者はナイフ形石器I a類の素材に、後者はI b類の素材にほぼ対応しよう。いずれにおいても、打面調整や作業面調整の痕跡に乏しい。こ



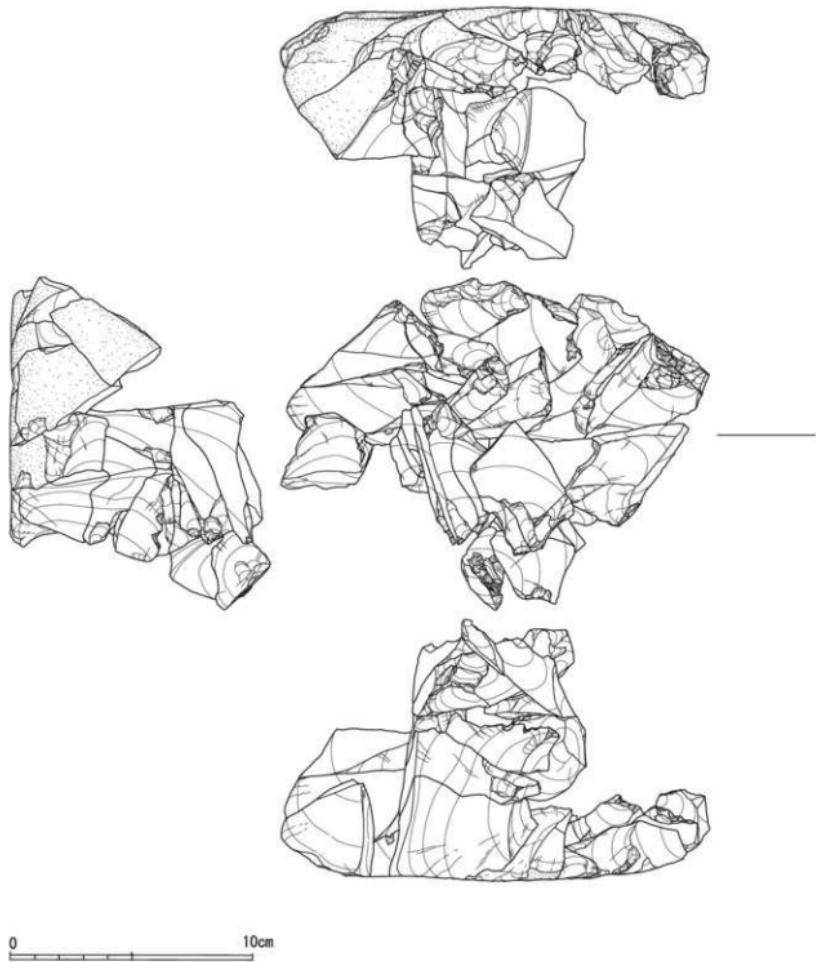
第82図 第VII期の石器群（9）母岩No.42（流紋岩Ⅱ群b類）接合資料42-1C① (S=1/2)



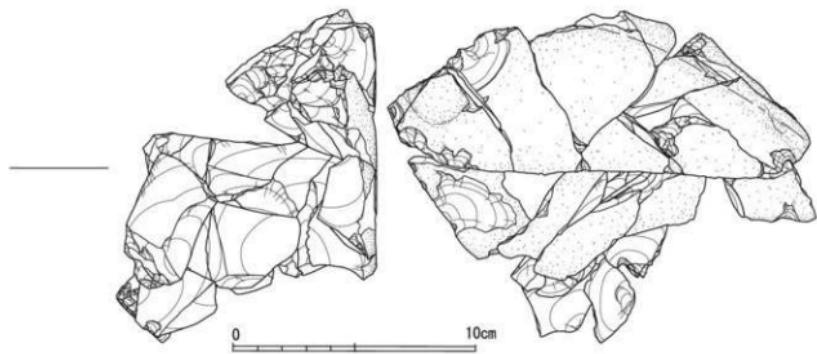
第83図 第VII期の石器群(10)母岩No.42(流紋岩Ⅱ群b類)接合資料42-1C②(585~587)
接合資料42-1D①(588~591)(S=1/2)



第84図 第VI期の石器群 (11) 母岩No.42 (流紋岩II群b類) 接合資料42-1D② (S=1/2)



第85図 第VI期の石器群（12）母岩No.42（流紋岩II群6類）接合資料42-1C+D①（S=1/2）※次ページに続く



第86図 第VI期の石器群(13) 母岩No.42(流紋岩II群b類)接合資料42-1C+D②(S=1/2)

れらはいわゆる岩戸6上型石刃技法の範疇に入れ
てよい。

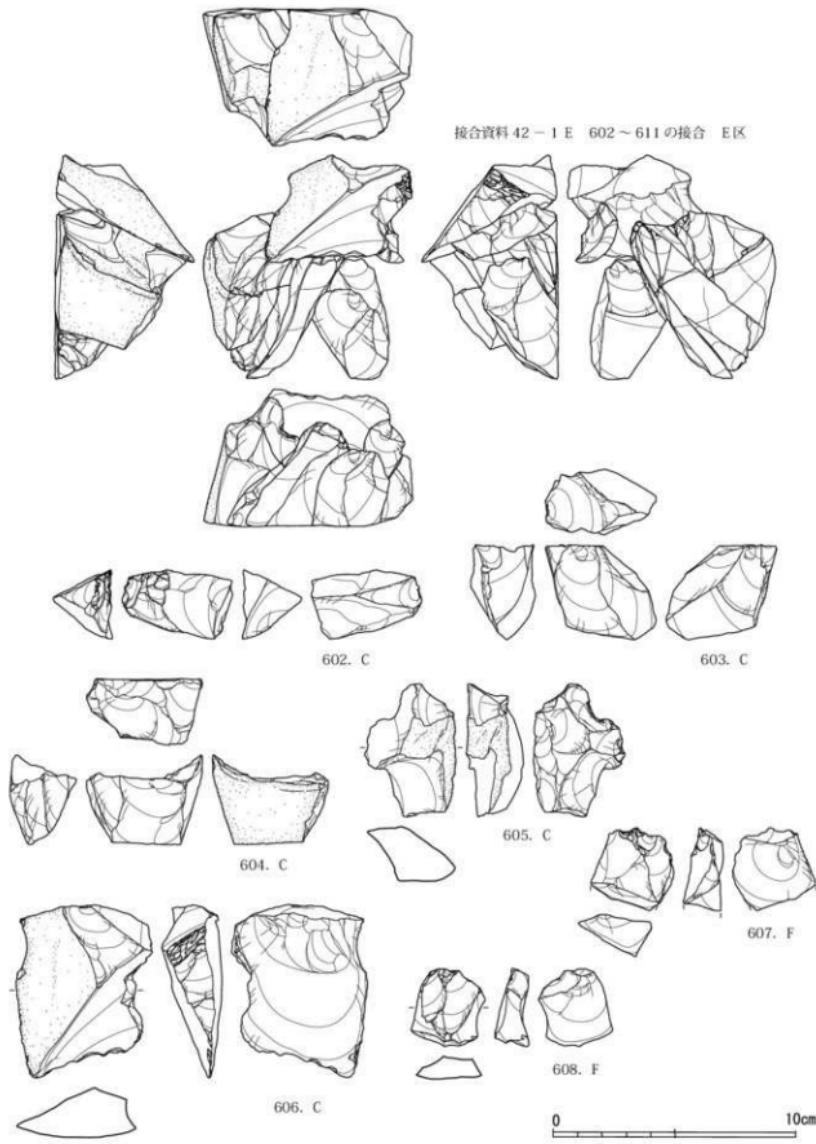
b 石材利用

ナイフ形石器に関しては、大勢として在地産と
思しき珪質頁岩やホルンフェルスを用いる傾向が
看取される。これに少数のチャート、黒曜石が加
わる。

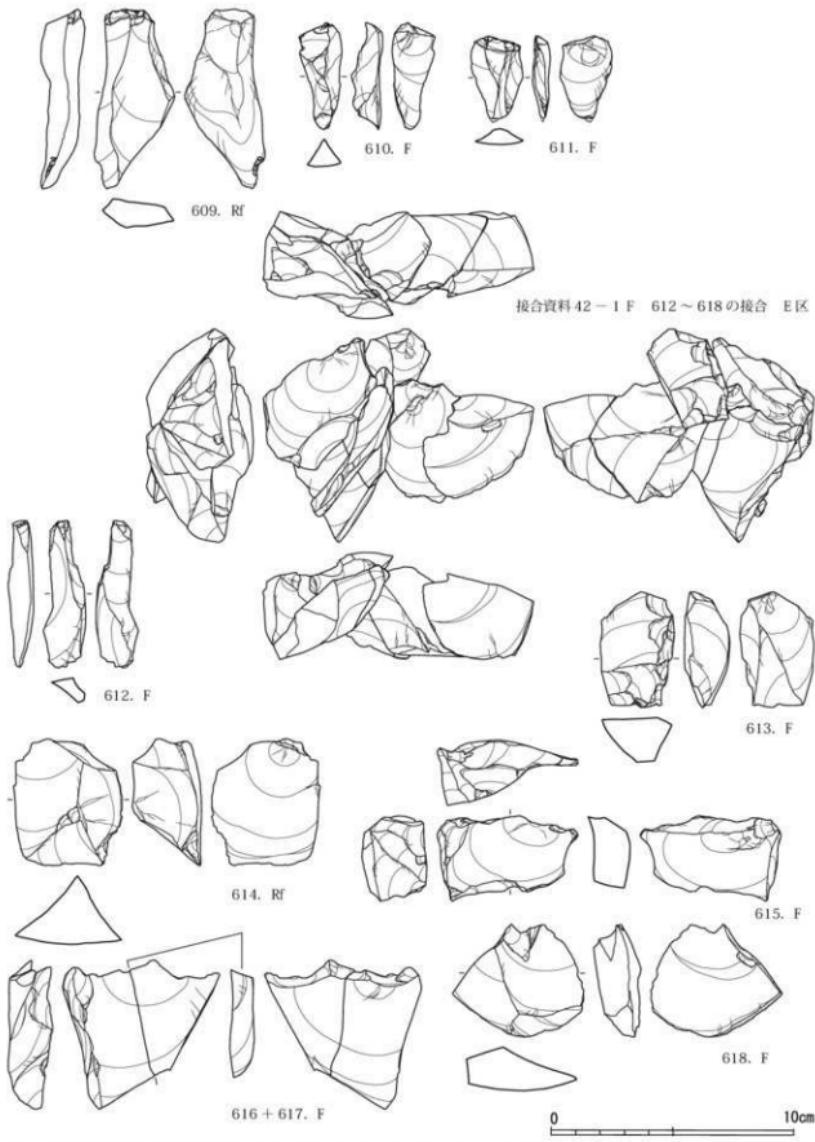
一方、台形石器に関しては、チャートが優勢で、
珪質頁岩、ホルンフェルスがこれに続き、少数の
黒曜石などが加わる。注目されるのは鹿児島県日
東産と思われる黒曜石を使った台形石器である。
ややイレギュラーな形態なので、二次加工剥片の
可能性もあるが、いずれにせよ客的な石材利用
の在り方を示している。

d 資料の意義と派生する課題

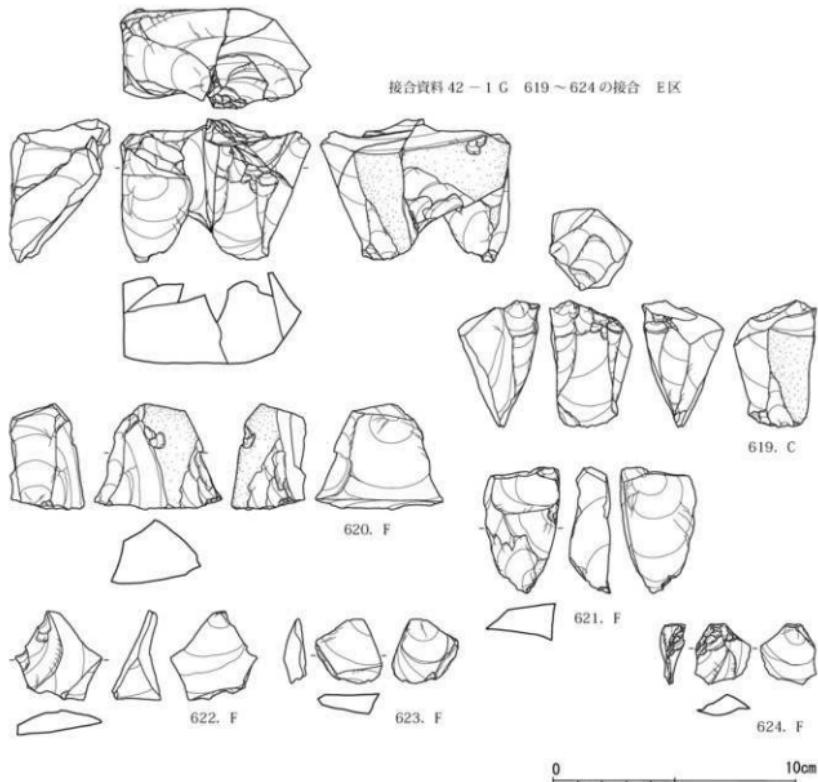
第VI期の石器群において特筆すべきなのは、や
はり終末期のナイフ形石器に関する接合資料(母
岩No.42)の存在であろう。ナイフ形石器I群に
関連する剥片剥離技術は、大分県下の岩戸遺跡、
前田Ⅲ遺跡などの資料から明らかとなっていた
が、百町原遺跡、南学原遺跡第1地点などの宮崎
県下の諸遺跡においては、トゥールの存在以外に
は、いまひとつ剥片剥離技術の様相が詳らかでな
かった。そうした事情から、本標準の石器群にみ
られる、剥片剥離技術を窺い得る接合資料および
母岩資料は、今後の研究において大きな意義を持つ。
また、トゥールを伴わず剥片と石核のみの接合
資料を残す1C類母岩(A区主体)と、トゥー
ル1点のみの3T類母岩(A区主体)の距離を隔
てた組み合わせは、行動論的観点からも興味深い。



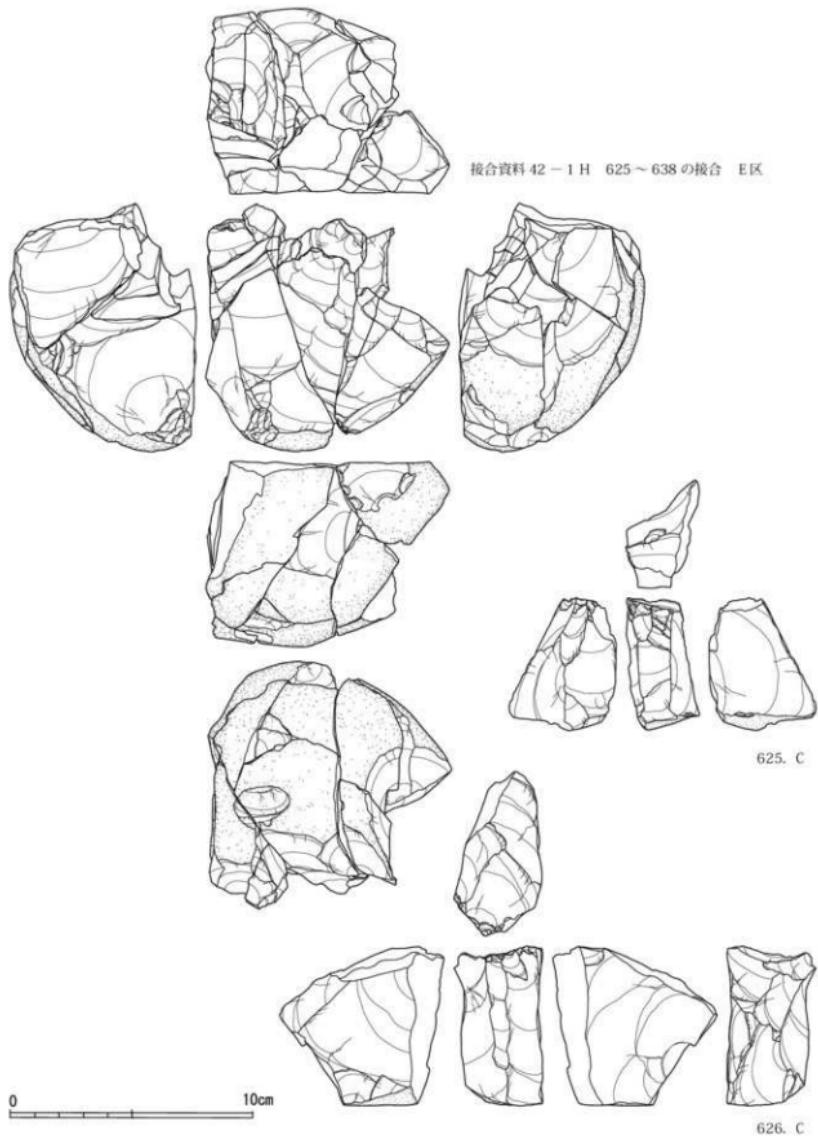
第 87 図 第VII期の石器群 (14) 母岩No.42 (流紋岩II群b類) 接合資料 42-1 E① (S=1/2)



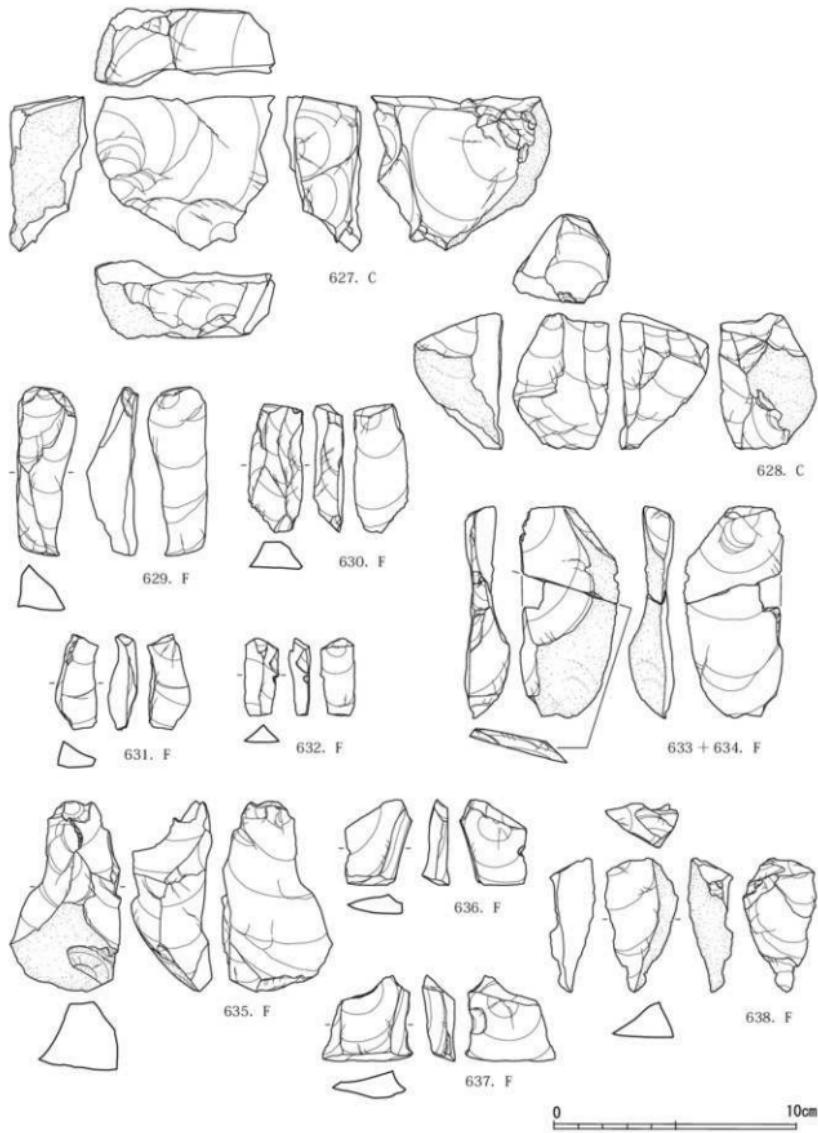
第88図 第VII期の石器群(15)母岩No.42(流紋岩Ⅱ群b類)接合資料42-1 E②(609~611)・F(612~618) (S=1/2)



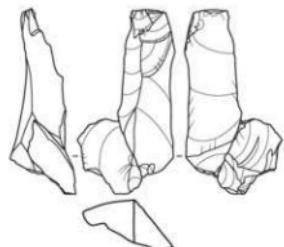
第89図 第VII期の石器群 (16) 母岩No.42 (流紋岩II群b類) 接合資料42-1 G (S=1/2)



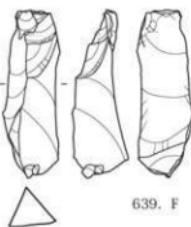
第 90 図 第VII期の石器群 (17) 母岩No 42 (流紋岩 II群 b類) 接合資料 42-1 H① (S=1/2)



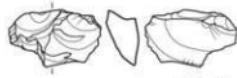
第 91 図 第VII期の石器群 (18) 母岩No.42 (流紋岩 II群 b類) 接合資料 42-1 H② (S=1/2)



接合資料 42-2 639 + 640



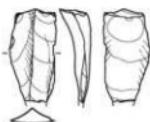
639. F



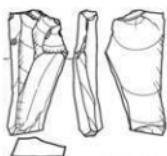
640. F



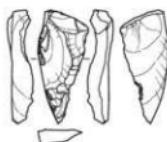
641. F



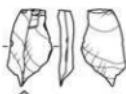
642. F



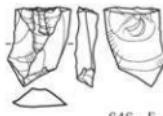
643. F



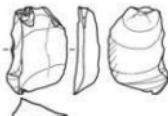
644. F



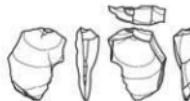
645. F



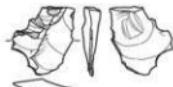
646. F



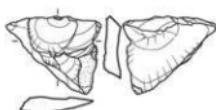
647. F



648. F



649. F



650. F



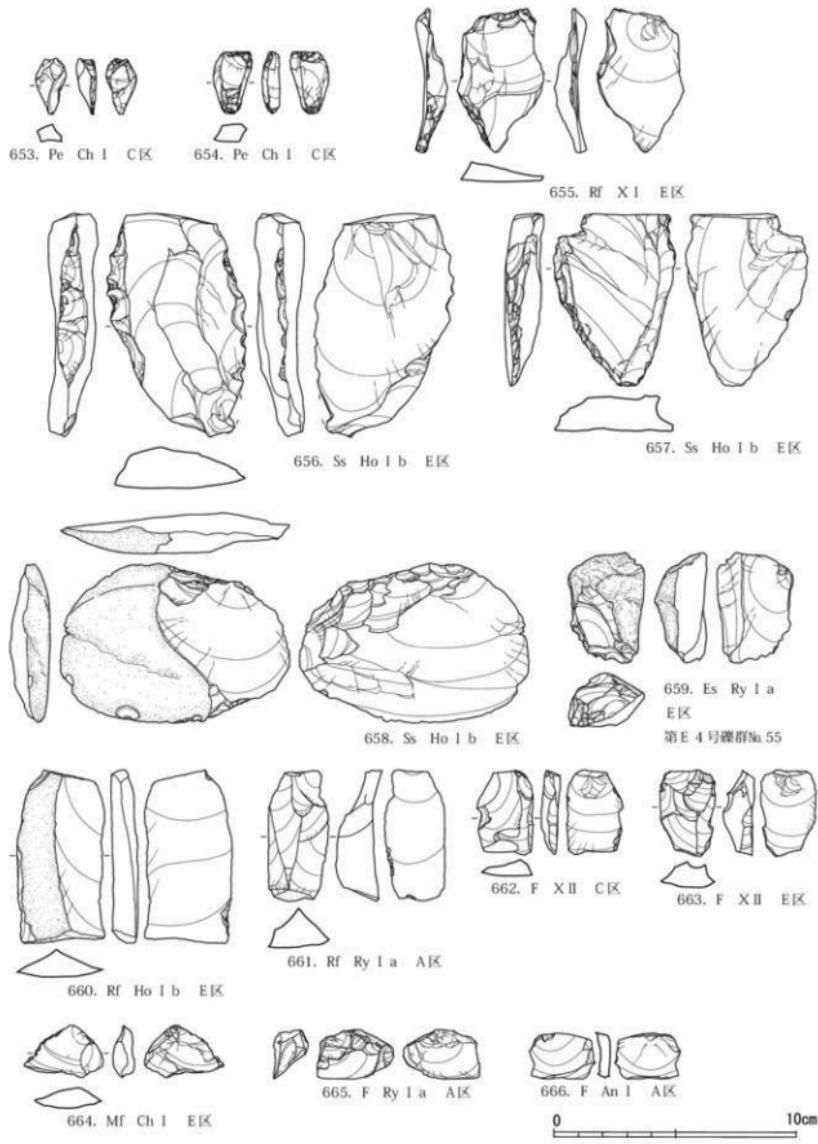
651. F



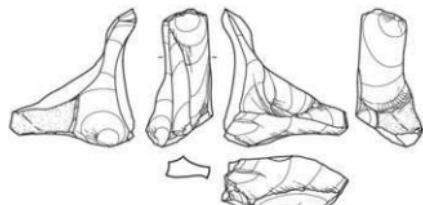
652. F



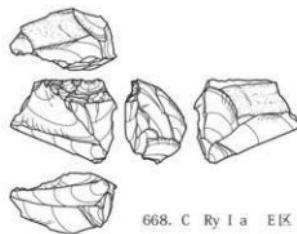
第92図 第VII期の石器群(19) 母岩No.42(流紋岩Ⅱ群b類) 接合資料42-2(639・640)・非接合資料(S=1/2)



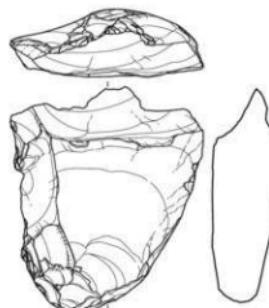
第93図 第VI期の石器群 (20) ($S = 1/2$)



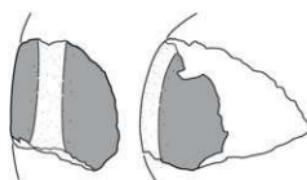
667. F SSh I E区



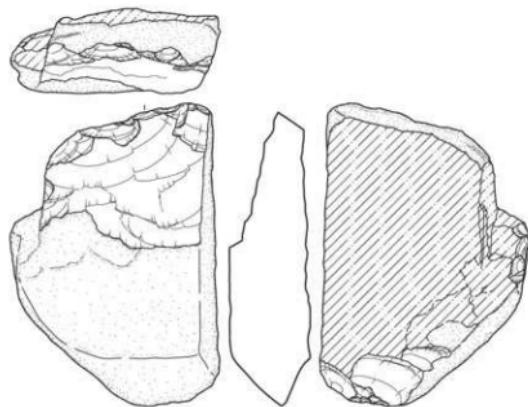
668. C Ry I a E区



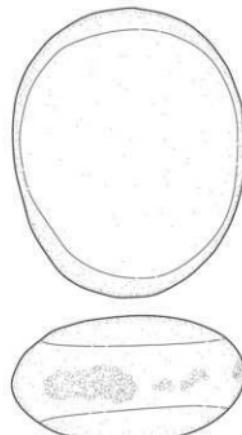
669. Ct Ho I b E区



671. Gs Os A区 碓群第62号No 1



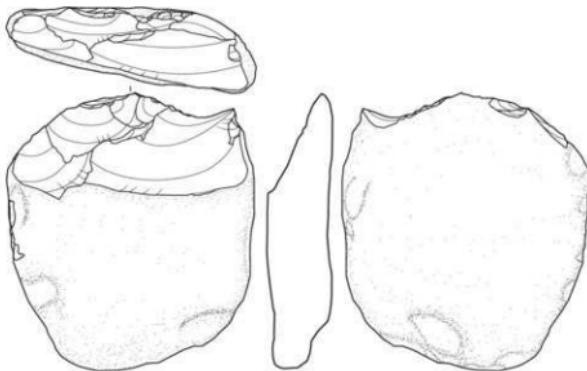
670. Ct Sh I E区



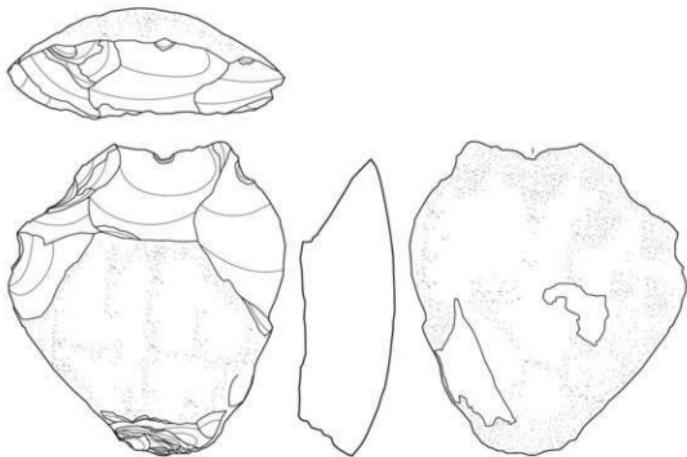
672. Hm Os C区
碓群第228号No 184



第94図 第VII期の石器群(21) (S=1/2)



673. Ct Ho III A区



674. Ct Ho I b C区



第95図 第VI期の石器群 (22) ($S = 1/2$)

第11節 後期旧石器時代第VII期

(1) 概要

第VI期と同様、第IV層から第V層上部を中心には遺物が出土し、第III層や第V層下部にも上下方拡散している。これまでの研究成果から、J期うい分けるのが妥当と判断し、ここでは第VII期を設定している。したがって、遺物の抽出は細石刃および細石刃石核を中心に、出土地点が重なる資料などのみにとどめた。

遺構としては礫群を1基のみこの時期に帰属する可能性が考えられた。主な遺物としては、細石刃、細石刃石核、剥片・石核類が挙げられる。

(2) 遺構

161号礫群は、第IVa層から第IVb層にかけて礫が分布する。直径約3m四方の広範囲に礫が分布する。IVa層から検出された。比較的小さな礫が間隔を空けて分布するIb類礫群の大規模なものと評価できる。

(3) 遺物

当該石器群に含まれる主要な資料の内訳は、細石刃109点、細石刃石核26点に剥片・石核類が加わる。これらの遺物の分布は、A区において細石刃のごく散漫な分布が認められたほか、C区の南東部隅のO6グリッド付近および南西部隅のQ11グリッド付近を中心に、細石刃・細石刃石核を含めた石器群のまとまった分布が観察された(第96図)。また、E区からも、細石刃・細石刃石核が少量検出されている。ただし、このように確認された分布の傾向には注釈が必要である。詳しくは第二分冊に触れる予定であるが、野首第2遺跡では縄文時代後期以降のいずれかの時期に、調査区内の土壤が大規模に失われる現象が起きている。この現象が自然のものか、人為的なものかについて現時点で結論を出すのは困難であるが、いずれにせよC区の中央付近には第VII期の石器群が包含される土層は確認できなかった。このため、本来はC区からその西側についても分布が拡がっていた可能性は否定できない。

以下、細石刃石器遺群を中心に解説をくわえる。

細石刃(第98～100図736～741)

A区3点、B(D)区5点、C区91点、E区

10点の総計109点を確認した。使用される石材としては、圧倒的に黒曜石が多く、他に地元産の砂岩が少数、成因不明ながら良質の石材X1群が用いられる。黒曜石製の細石刃(第98図～第99図724)は、形に近いもの(第98図675～685)、頭部のみ残存するもの(第98図686～702)、中間部のみ残存するもの(第99図706～715)など残存形態のヴァラエティーに富む。また、大多数の資料と比較して、ややサイズの大きな一群も認められた(第99図716～724)。

細石刃石核(第100図)

C区18点、E区8点の総計26点を確認した。A区およびB(D)区では出土がみられなかった。

出土層位は、下はV層中部、上はIII層およびIVa・b層付近に集中する傾向がみられる。最も出土数が多かったC区の東南部では、桑ノ木津留産と思しき黒曜石の利用率が高く、他にみられる石核・剥片・碎片・細石刃などと共通する。

形態的には、従来野岳・休場型と呼ばれてきた形態類型が多く認められ、細分化が可能である。

他の類型としては、E区の出土層位が不明な船野型、縄文時代早期の包含層(III層)から確認された畦原型がそれぞれ1点認められるのみである。以下、文献18に従って、ここで用いる各類型について記す。

A類：背面に自然面を配し、幅広い作業面を持つ一群。作業面側から打面調整を施すことが多く、石核調整もしばしば観察される。細石刃生産が進行した結果、ほとんどの場合、扁平な形態を呈する(与位牌塔型・茶園型・扁平型)。

B類：両面に礫面を配するか、片面に礫面を配する扁平な素材の小口に作業面を設定する一群。

C類：ボジおよびネガを呈する複数の剥離面から構成される分割礫を素材とし、作業面側からの打面調整を施す。しばしば打面再生を伴う。各種石核調整を伴う場合がある。打面転移をおこない、複数の作業面を有する資料も含まれる。作業面幅は狭い場合と、石核周囲を巡るように残存する場合とがある(与位野岳・休場型)。

D類：B類と同様の素材を用い、その小口側に作業面を設定する。細石刃生産の進行方向に直交す

る方向に側方からの打面調整を施す(≒岩土原型・宇久島型)。

E類:厚手の剥片や分割礫を素材とし、その主要剥離面や分割面を打面に設定する。細石刃生産に先立ち、打面から側面に向けて石核整形剥離をおこなう。作業面を正面に据えた平面形は逆台形(U字形)を呈する。打面調整は基本的に施されない(船野I型)。地面に置くと自立する。

その他:上記の分類に該当しない資料については、他の残核形態として便宜的に一括する。

742・743は典型的なA類である。743は限界まで細石刃の剥離が進行したものものであろう。A類はこの他に5点認められる。

744は砂岩製の類型との対応をとるならば、円礫を素材とするC類ということになろうか。円礫を用いる素材選択の点では、畦原型際石刃石核が想起されるが、明確な打面調整が入ること、作業面を小口に限らず広くとる点などで、大きな違いがあり、やはりC類(≒野岳・休場型)の特徴を備えていると評価できる。

この他に出土している黒曜石以外の石材を用いた細石刃石核としては、排土中から採集されたE類(船野型)、縄文時代早期に相当する第Ⅲ層から出土した畦原型があり、黒曜石製ではA類以

外にC類の存在が確認された。機会を得て図化をはかりたい。

細石刃石器群に伴う他の石器としては、次のようなものが挙げられる。なお、以下は全て桑ノ木津留・上青木系と思しき黒曜石を素材とした資料となる。

楔形石器(第101図745~747)

3点確認された。745・746は小形の資料である。747は楔形石器の使用に伴う削片の可能性が指摘できる。

掻器(第101図748)

748は非常に小形の掻器である。いわゆる拇指状掻器に該当しよう。

二次加工剥片(第101図749)

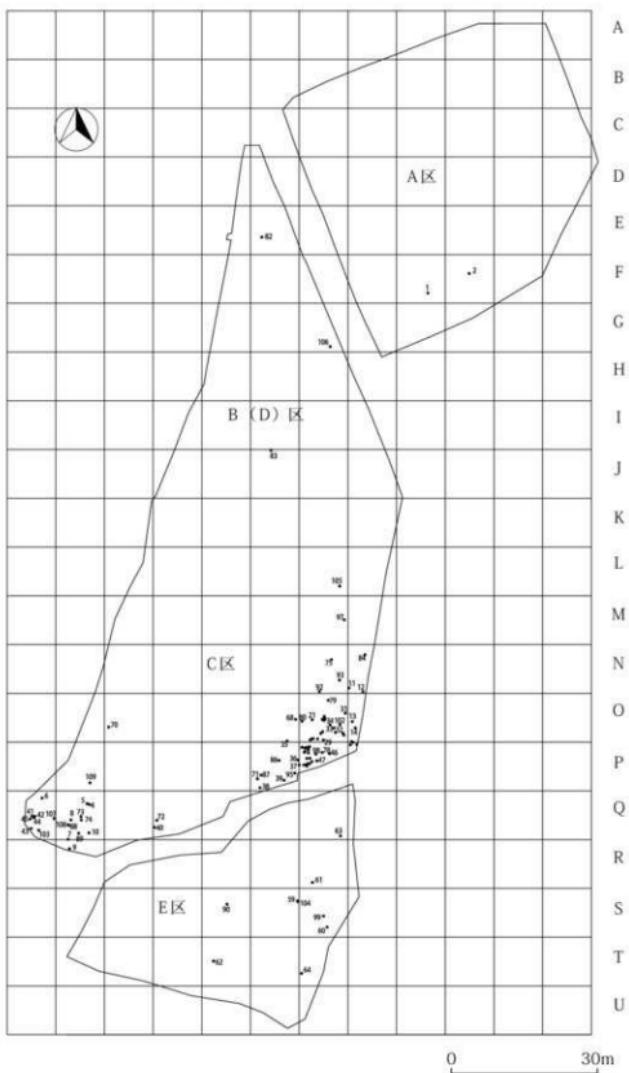
749は一応、二次加工剥片とした。ナイフ形石器のプランティングと同様の二次加工が一辺に施されている。あるいは、掻器の刃部が破損して遊離した資料の可能性も考えられる。

剥片・石核類(第101図750~第102図)

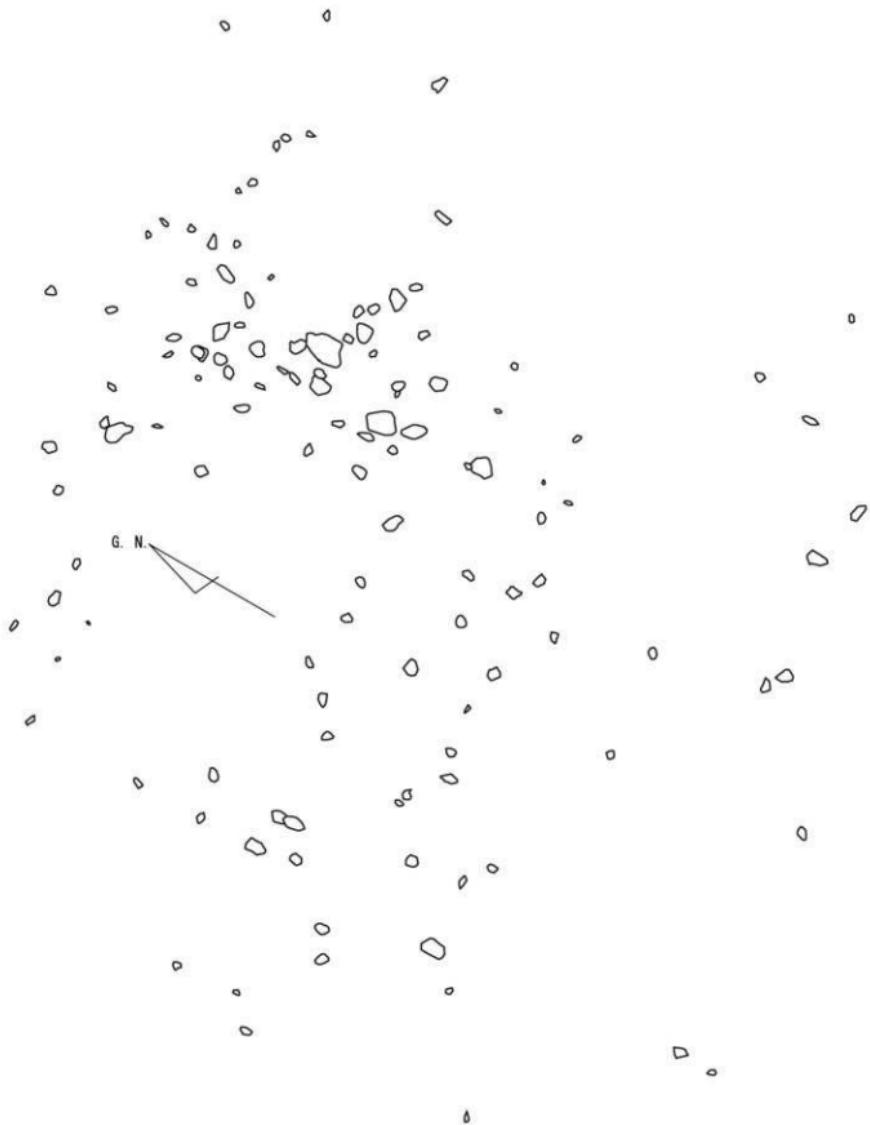
750は剥片である。剥片はこの他にも小形を中心として多数の資料が検出された。

751~755は石核である。754は細石刃石核のプランクである可能性も考えられよう。

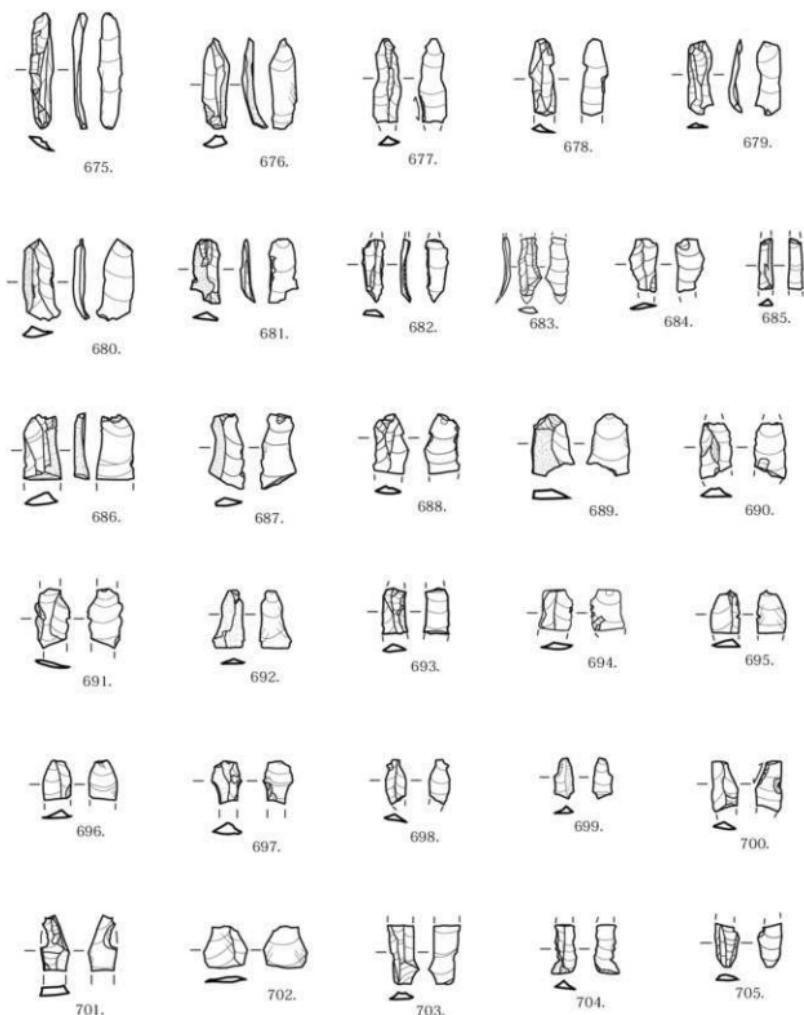
12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



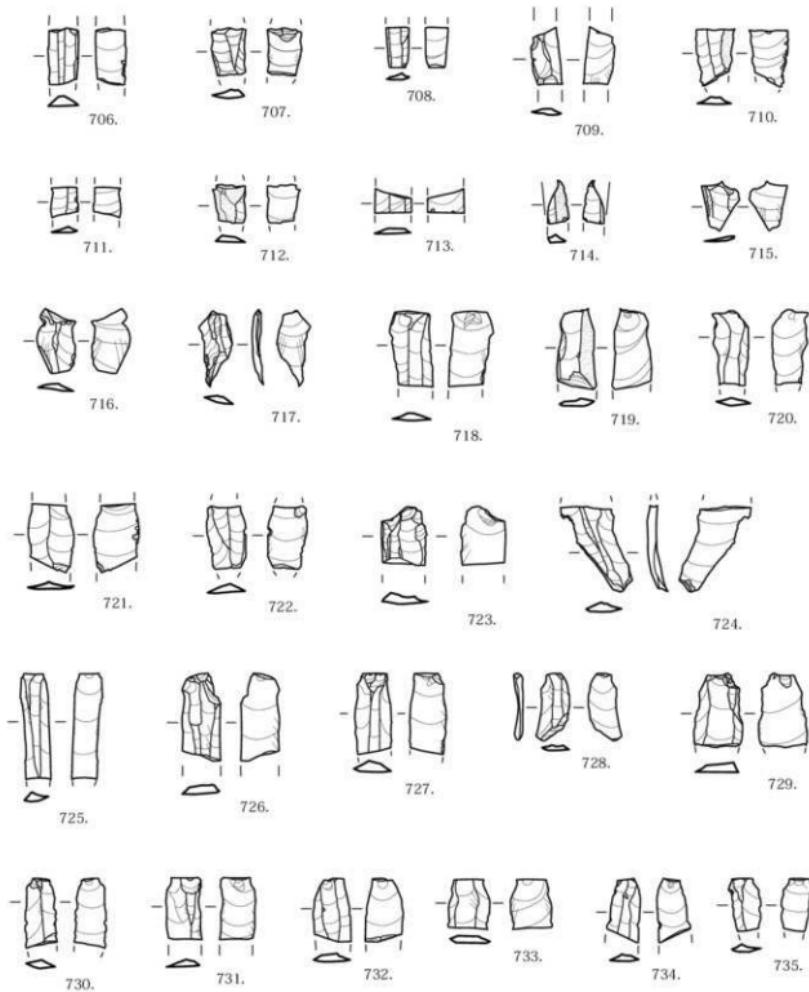
第96図 第VII期の石器の分布 細石刃 (S= 1/1,000)



第97図 第VII期の碟群 第161号碟群 ($S = 1/20$)



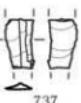
第98図 第VII期の石器群（1）黒曜石製の細石刃① ($S = 1/1$)



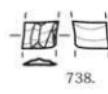
第99図 第VII期の石器群（2） 黒曜石製の細石刃②（706～724）、非黒曜石製の細石刃①（725～735） (S = 1 / 1)



736.



737.



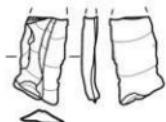
738.



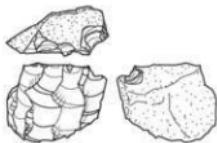
739.



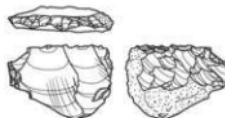
740.



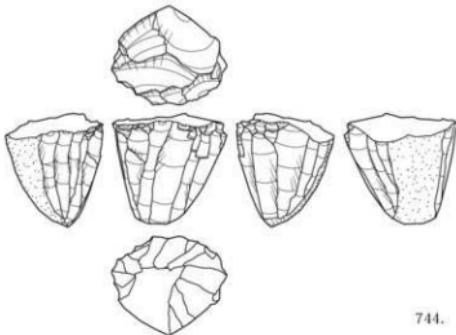
741.



742.

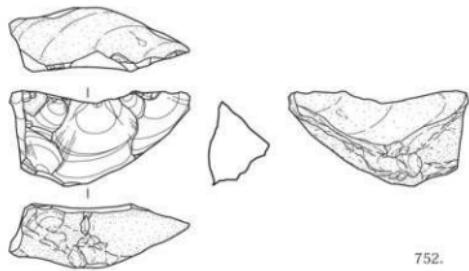
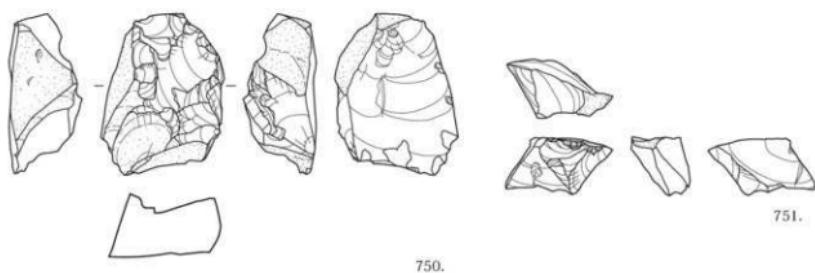
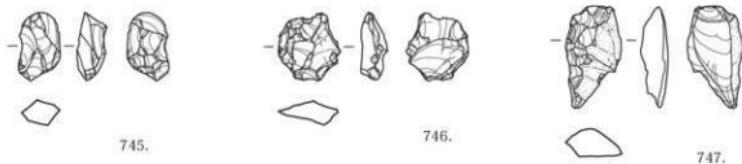


743.

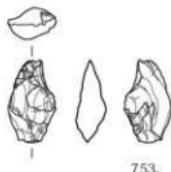


744.

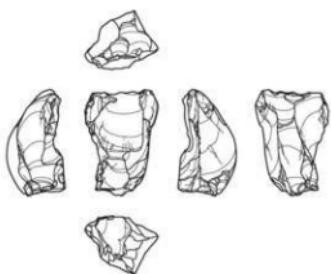
第100図 第VII期の石器群（3） 非黒曜石製の細石刃② 細石刃石核 (S = 1 / 1)



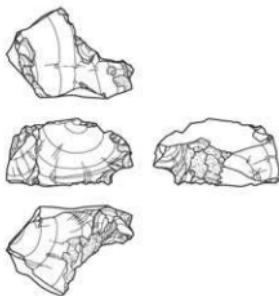
第101図 第VII期の石器群(4) ($S = 1/1$)



753.



754.



755.

第102図 第VII期の石器群(5) ($S = 1/1$)

第12節 繩文時代の土器・石器の器種分類および類型化について

主に次節以降の事実記載の便宜をはかるため、あらかじめ必要とされる石器・土器の器種分類について説明する。ただし、石器に関して工程器種と決定器種の一部については、本章第1節と重複するので省略した。また、繩文時代後期以降に新たに加わる石器・土器の器種・器形については、第二分冊においてあらためて述べる。

(1) 土器

当遺跡からは早期・後期・晚期の土器が出土しており、本分冊では早期土器の文様・器種・器形について分類を行っている。早期土器分類の詳細を以下に述べる。

■ I群 爪形文土器

繩文時代草創期のいわゆる爪形文土器とはやや特徴を異にする一群。比較的薄手で、人間の爪に押圧が加えられ器面に爪形が残る。

■ II群 無文土器

器面調整痕のみで、施文工程時に施された文様が無い土器の総体である。出土資料は全て深鉢である。完形資料に恵まれず、接合状況も芳しくないため、資料は小片が大多数を占める。この状況にあって、分類の基準はまず口縁部の形態分類を基準にしている。

口縁部の分類としては、I 内湾、II 直口がある。Iは口縁部がやや内側にすぼまるものである。IIは口縁部が直口または、外側にやや開き気味になるもので、頸部のくびれは無いに等しい。

また口唇部の形態はI 尖り気味、II 丸みを帯びる、III 平坦の3者に分類可能である。本来であれば、これら口縁部の形態分類に器面調整分類が加わるが、観察の結果、器形と調整の相関関係が看取されないため具体的な分類を行っていない。

なお胴部については、文様形態等の属性に、胎土などの観察事項を加味した結果、口縁部分類の各個体と比較し、同一個体もしくは同一類型の可能性が高いものについては、その口縁部の分類の中で報告している。判断がつきかねるものに関しては、胴部一括として取り扱った。

■ III群 押型文土器

施文原体を回転押圧させて文様を施した土器群である。文様は山形文をはじめ多種にわたっている。野首第2遺跡で出土した押型文土器は全て深鉢である。その中で完形品の出土は1個体のみであり、残りは小片が多かったため、分類の基準をまず口縁部に求めた。

口縁部の分類としては①直口と②外反がある。①は口縁部が直口または、外側にやや開き気味になるもので、頸部のくびれは無いに等しいものとする。全体的な器形は砲弾形に近いものと思われる。②は頸部に括れをもち、口縁部が外反するものである。これには、口縁部の上端のみが外反するものも含む。

前述した器形分類に、押型文の文様分類が加わる。これには、I 山形押型文、II 楕円押型文、III 格子目押型文、IV 繩文、V 撫糸文、VI 複合押型文、VII その他がある。I の山形押型文には、鋸歯状や波状の文様も含む。II の楕円押型文には、連珠文を含んでいる。V の撫糸文には網目状撫糸文を含む。VI の複合押型文とは、一つの個体に複数の押型文を折衷したものである。その組み合わせには、山形押型文+楕円押型文などがある。VII の他の項目には、枝回転文などI ~ VI の文様に含まれないものを一括した。これらの押型文を、外面・内面の施文方向・施文要素に基づき以下のように分類した。

外面施文

- 1 文様小横方向施文
- 2 縦方向・斜方向施文
- 3 文様大横方向施文
- 4 縦方向・斜方向施文

前述のように、外面施文に関しては施文方向の差に着目して分類を試みた。つまり、いわゆるベルト状施文など施文手法の分類は行っていない。

内面施文

- A 横方向施文+原体条痕
- B 原体条痕
- C 2重の原体条痕
- D 横方向施文のみ
- E 無文

なお胴部については、文様形態等の属性に、胎

土などの観察事項を加味した結果、口縁部分類の各個体と比較し、同一個体もしくは同一類型の可能性が高いものについては、その口縁部の分類の中で報告している。判断がつきかねるものに関しては、胴部一括として取り扱った。これは底部も同様である。

■III群2類 手向山式

本来ならば、押型文土器のカテゴリーに含めるべきであろうが、本遺跡からは押型文を施した手向山式が出土していないため、別類型とした。

■IV群 貝殻文系・条痕文系土器

円筒形の器形を基調とし、文様の施文原体として貝殻が多用される。器形・文様バリエーションにより以下のように分類を試みた。なお器種は全て深鉢である。

1類 貝殻腹縁押突文+楔形突帯文

2類 貝殻腹縁押引文+楔形突帯文

3類 貝殻条痕で羽状文を施す

4類 連続貝殻腹縁貝殻腹縁押引文

5類 貝殻条痕文

なお胴部については、文様形態等の属性に、胎土などの観察事項を加味した結果、口縁部分類の各個体と比較し、同一個体もしくは同一類型の可能性が高いものについては、その分類の中で報告している。

■V群 沈線文系土器

ラッパ状に大きく外反した口縁部で、円筒形の胴部という器形の一群であり、沈線文を多用する。文様の組合せで、以下のように細分される。

1類 沈線文+連点文

2類 沈線文+網目状撚糸文

3類 沈線文

■VI群 その他

I～VI群にあてはまらないものをまとめた。

(2) 石器・石製品

■石器

石器は以下に示す四つの属性を類型化し、その組み合わせを考慮して分類した。詳細なデータは第二分冊所収の計測表を参照されたい。

①成形技術（打製・磨製・局部磨製）

②外郭結線（正三角形・長身二等辺三角形・短身

二等辺三角形・五角形・その他）

③基部形態（極凹基・凹基・微凹基・平基・微凸基・凸基）

④調整技術 I（通常押圧剥離・鋸歯状剥離）

調整部位 II（全面調整・周縁調整）

■石匙

いわゆる横形を I 類、縦形を II 類とした。II 類は II a 類：成形・整形が精緻なものと II b 類：成形・整形の度合いが少ないものに細分される。

第 13 節 繩文時代早期

(1) 概要

遺物としては押型文土器と貝殻・条痕文土器が分布を違えて確認され、各種石器が伴う。遺構では、集石遺構、散礫、炉穴、陥入穴状遺構、土坑などのほか注目すべき遺構として環状ピット群がある。

(2) 遺構

a 集石遺構

総計 189 基の集石遺構が確認された。調査区毎の内訳は A 区～C 169 基、E 区 20 基となり、特に A 区に集中して構築される傾向がみられた。

検出面の様相（礫の量・埋没過程）、土坑の有無・規模、敷石（配石）の有無・様相などの諸属性の変異により、以下の類型化が可能である。

I 群：直径と深さの比率が 1 : 1 程度の土坑を備えるグループ。底部施設として敷石を有する a 類とこれを持たない b 類に細分される。

II 群：明確な掘り込みを持たないか、持つ場合でも浅い皿状の土坑を備えるグループ。やはり底部施設として敷石を有する a 類とこれを持たない b 類に細分される。分布図と合わせ、実測図は第 2 分冊に掲載する予定である。

b 散礫

A 区の全域（ただし調査区西半は削平のため残存不良）、B（D）・C 区の東辺一帯、E 区全域と、概ね集石遺構や炉穴の分布に重複して確認された。多くの礫は被熱のため赤化しており、砂岩や尾鈴山酸性岩類が多用される。

c 炉穴（第 103 ～ 109 図）

単独の炉穴を 1 基とし、切り合い関係を持つ複

数の炉穴が連なる分布の単位を群と捉えた結果、総計 168 群の炉穴が確認された。

炉穴の分布も概ね、集石遺構や散礫の分布と重なる。なお、調査時には焼土が確認できず土坑と判断したものの中にも、炉穴が含まれる可能性がある。

d 陥し穴状土坑

B (D) 区から 1 基（第 1 号陥し穴状遺構）、E 区から 1 基（第 2 号陥し穴状遺構）が確認された。

第 1 号は平面形が長楕円形で深さ約 1.5 m を測る。IV b 層において検出された。底部に逆茂木の可能性がある土質の変化が観察された。

第 2 号は平面形圓円長方形で深さ約 0.5 m を測るが、VI 層での検出であったため、本来はより深かった可能性がある。いずれの陥し穴状土坑も緻密な時期特定は難しい。小林軽石を含む覆土の特徴から判断して、小林軽石降灰以降、アカホヤ降灰以前の可能性が高く、概ね後期旧石器時代終末～繩文時代早期の範囲に絞ることができようか。

e 土坑

明確な機能・用途が不明な土坑を一括した。この中には焼土などの確認はできなかったものの、本来は炉穴であった可能性が考えられるものを含んでいる。

f 環状ピット群および礫群 C 類

A・B・C 区において、繩文時代後期以降の遺構とは異なる埋土のピットが複数近接して分布する傾向がみられた。特に B 区・C 区では礫を充填したピットが環状に配置される事例も 3 例確認された。

これらのピットの埋土の特徴は、炉穴や集石遺構にみられるような硬質・黒褐色であることが多いが、後述するように周囲の自然堆積層との判別が困難な例も多い。したがって、検出可能であった遺構は、必ずしも本来の実数を意味しない。

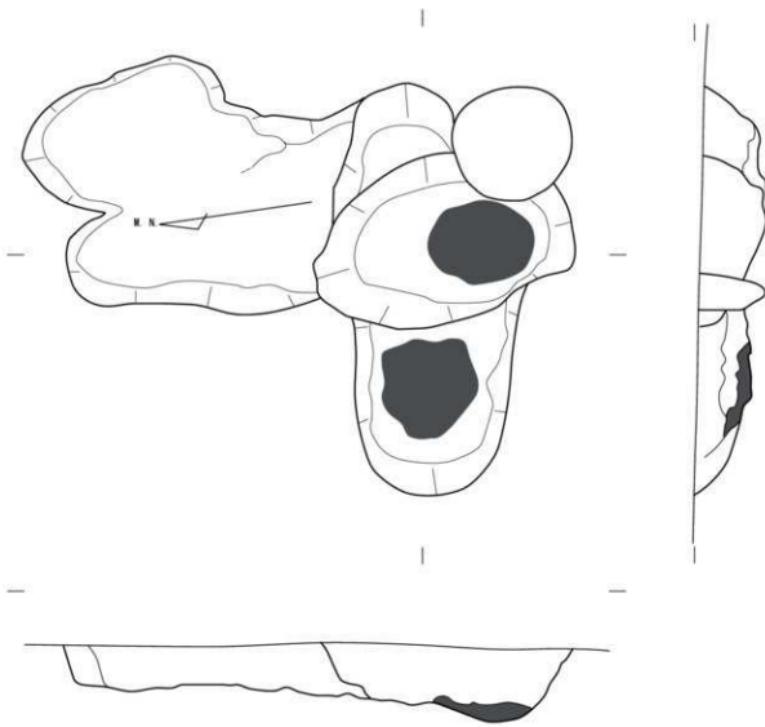
特筆されるのは、ピット内部に焼礫を充填する事例である。これらの充填礫の検出深度は様々で、特に次のような場合は注意を要する。すなわち、周囲の層位が後期旧石器時代包含層であり、かつピット埋土が周囲と酷似する（ほぼ不可視のピット）事例である。ここで懸念されるのは、ピット

の存在に気付かずに、たとえば A T 直上まで掘り進めた段階で初めて充填礫を検出した場合に、縄文時代早期のピット充填礫を A T 直上の礫群と誤認する可能性である。実際、本遺跡では、A T 上位の様々なレベルであたかも積み上げられたかのような外観を呈する「礫群」が多くみられ、調査中には、不審に思いつつも暫定的に後期旧石器時代の所産と判断していた。その後、次節に詳述する放射性炭素年代測定法の実施において、A T 直上の礫群と考えていた第 19-2 号礫群に重複するピットからの炭化物の年代が、8000 年代との分析結果が得られた。これらのピットには充填礫の検出はなかったが、いずれも縄文時代早期のピットが A T 面に至って初めて検出された状況を示すものと考えられる。また、ピットが環状にめぐる例は 3 例確認されたが、他の単独ないし少數のピットの検出例についても、底面のレベル差を想定するならば、本来、環状ないし何らかの規則性をもって配置されていた可能性は充分に考えられる。

以下、環状ピット群、単独のピットないし少數で構成されるピット群、ピット群の充填礫であった可能性が指摘される C 類礫群について説明をくわえる。

第 1 号環状ピット群は B (D) から確認された。検出面は III 層下部～IV a 層であり、15 単位の焼礫のまとまりが円環状に巡る状況が最初に注意された。その後、円環のほぼ中央の点から個々の礫のまとまりに向かって放射状に線を延ばし、礫の付近にサブトレーナーを入れ、断面の観察をおこなった。その結果、不明瞭ではあるが、わずかな土色の変化と感触の違いを認めた。この土色の変化は、V 層中ではきわめて感知しにくいが、周囲が VI 層 (A T) の場合には、明瞭に確認できた。また、礫を伴わないか、円環の中央からややそれた箇所において、周囲より若干暗めの土色で硬質の埋土を持つピットを検出した。以上から、環状に巡る焼礫を伴うピット 15 基と、中央付近に位置する通常のピット 1 基から構成される遺構として、第 1 号環状ピット群を認定した。

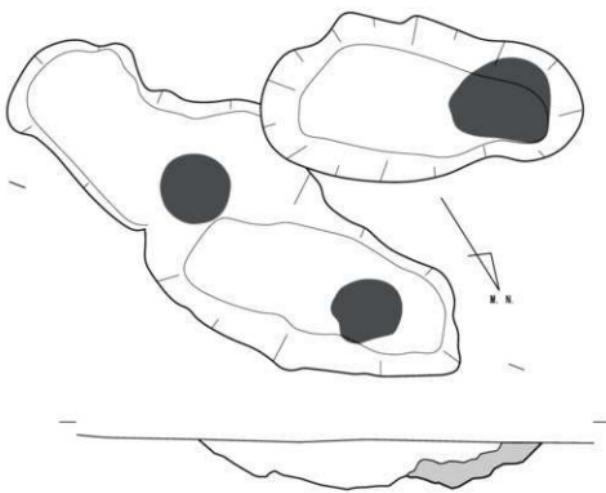
焼礫を伴うピットの形状は、確認した限りで



炉穴第3群

第103図 炉穴実測図(1) 炉穴第3群 ($S = 1/30$)

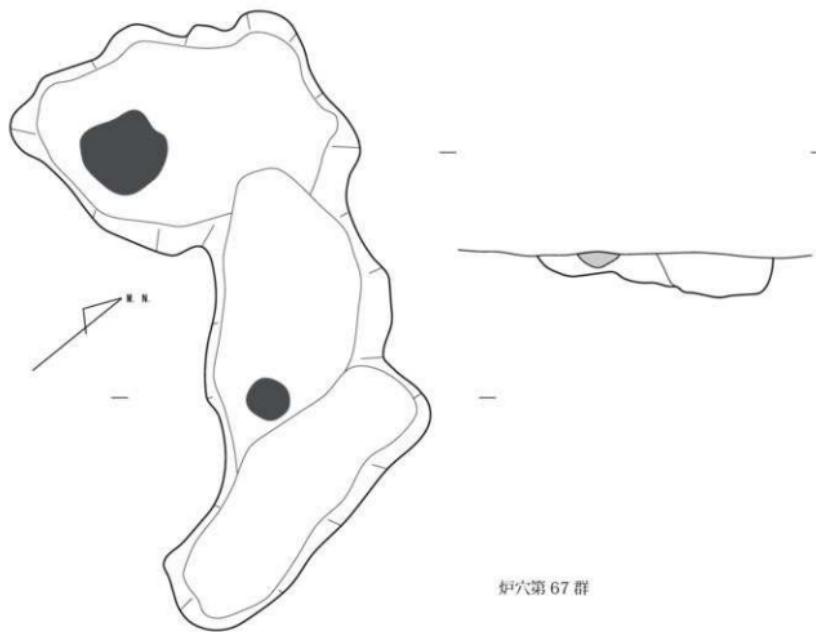




炉穴第26群

第104図 炉穴実測図(2) (S=1/30)

0 1m



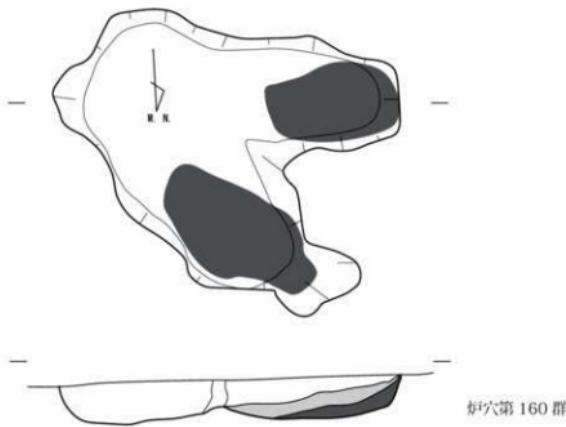
炉穴第 67 群

第 105 図 炉穴実測図 (3) ($S=1/30$)

0 1m



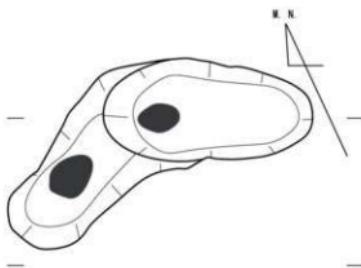
炉穴第 57 群



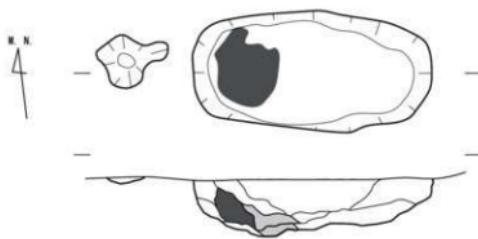
炉穴第 160 群

第 106 図 炉穴実測図 (4) (S= 1 / 30)





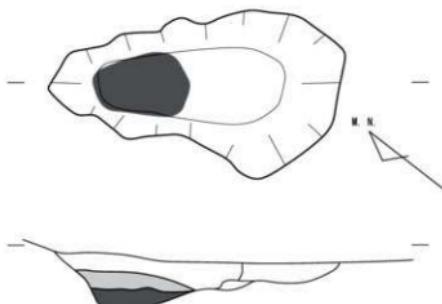
炉穴第 78 群



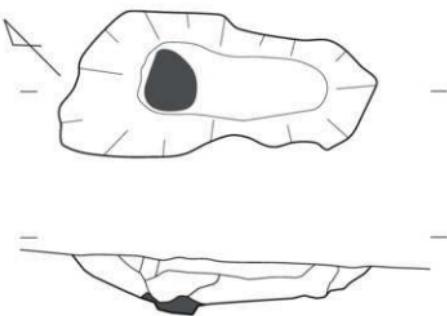
炉穴第 4 号

第 107 図 炉穴実測図 (5) ($S=1/30$)





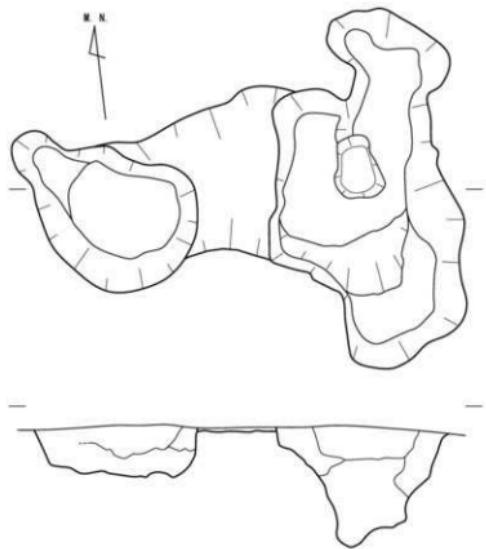
炉穴第 12 号



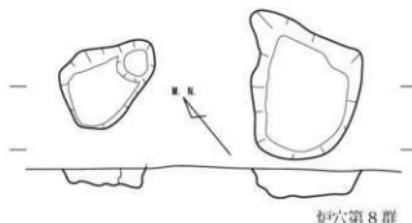
炉穴第 13 号

第 108 図 炉穴実測図 (6) ($S=1/30$)





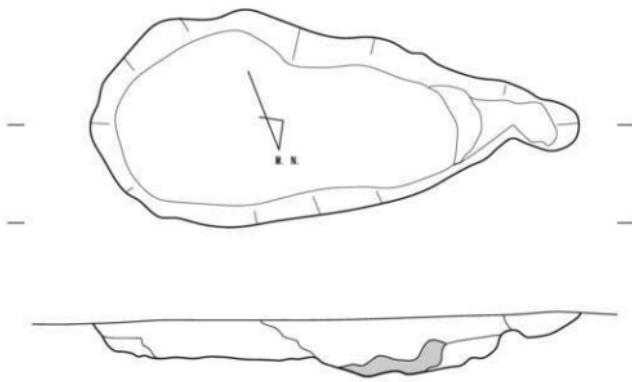
炉穴第44群



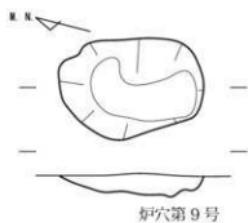
炉穴第8群

第109図 炉穴実測図(7) (S= 1/30)



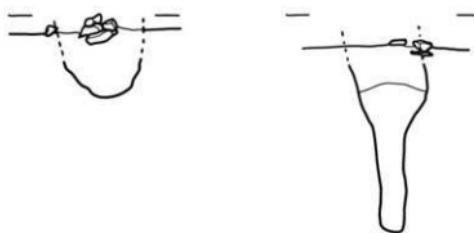


炉穴第 10 号

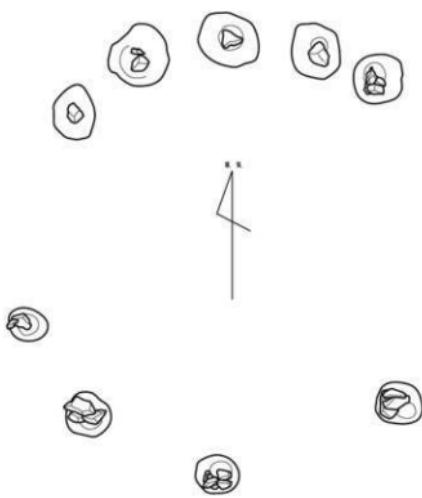


炉穴第 9 号

第 110 図 炉穴実測図 (8) ($S=1/30$)



第111図 環状ピット群実測図（1）(S=1/20)



第112図 環状ピット群実測図（2）・碟群C類 ($S=1/30$)

は、上方が広く下方に向かうにしたがってすばまる傾向がある。充填された焼蹠のサイズや個数は、ピット毎に変異に富む。

なお、細心の注意を払って検出に努めたが、これらのピット埋土には炭化物や土器・石器などの包含は確認されなかった。

その後、注意を払って精査した結果、第1号と同様の特徴を持つ第2～4号環状ピット群が検出された。

先述したC類礫群はA・B（D）区から3基が確認された（第114図）。その全てが縄文時代早期以降の所産とは断定できないが、可能性は指摘し得るものである。

（2）遺物

a 出土遺物の概要

早期の指標的な遺物として押型文がA区を中心多く出土した。一方C・E区では貝殻・条痕文系土器が目立つ分布を見せた。

b 遺物詳説

■土器・土製品

ここでは、前節の分類に基づいて、包含層出土土器の報告を行う。紙面の都合上、各土器の記述は最小限に抑え、なるべく多数の資料の掲載に努めた。各土器の詳細は観察表を参照されたい。

なお、野首第2遺跡からはⅢ層を中心に、I～IV層から早期前半～後半期に該当すると考えられる土器群が出土している。集石遺構や炉穴など、縄文時代早期における主体的な遺構はⅢ層に構築されている事から、この層が早期の主体的な生活面に該当すると考えられる。しかしながら、縄文時代後期、古墳時代中期を中心とした集落造営のために、早期の文化層は著しく破壊されており、そのため遺物の元位置は不明瞭であると言わざるを得ない。この状況を踏まえ、詳細な土器分布図の作成は行わず、出土土器類型毎の重量分布図の作成に留めた。出土状況に関しては、第IV章第2節において詳述する。

I群 爪形文土器（第113図801）

E区より1点出土している。801は、指でつまみ上げる事により尖らせた口唇部を持つ、直口した口縁部である。内外面ともに、貝殻条痕による

調整が行われた後に、その条痕をナデ消している。

一連の調整が終わった後に、外面に爪形文が2列連続して施されている。この爪形文は半裁竹管などの工具を刺突あるいは押引く事により施したものではなく、ヒトの爪を刺突する事により施文したものと推測される。

なお、器面の観察により胎土中には纖維が含まれていたと思われる。

II群 無文土器

E区を中心に分布し、隣接するC区に僅かに出土が見られた。その一方で、押型文土器が主体的に分布している押型文土器の主体的な分布域であるA区からは出土が見られない。これは集石遺構が多数検出されたB区も同様である。

①内湾する口縁部（第113図803・805）

803・805が内湾する口縁部を持つ器形を有する無文土器である。口唇部は丸く仕上げている。内外面ともに、貝殻条痕調整の後をナデ消している。胎土中には纖維が含まれていたと考えられ、焼成は硬緻である。両者は同一個体である。

②直口する口縁部（第113図802～814、第114図815～821）

802～821が、直口あるいは、やや開き気味の口縁部を持つ器形である。口唇部は基本的に丸く仕上げており、先の内湾する口縁部と比べると、僅かの差はあるが、器壁が厚いものが多い。

内外面ともに非常に丁寧なナデ調整が行われている。胎土中には纖維が含まれていたと考えられる。焼成は硬緻である。

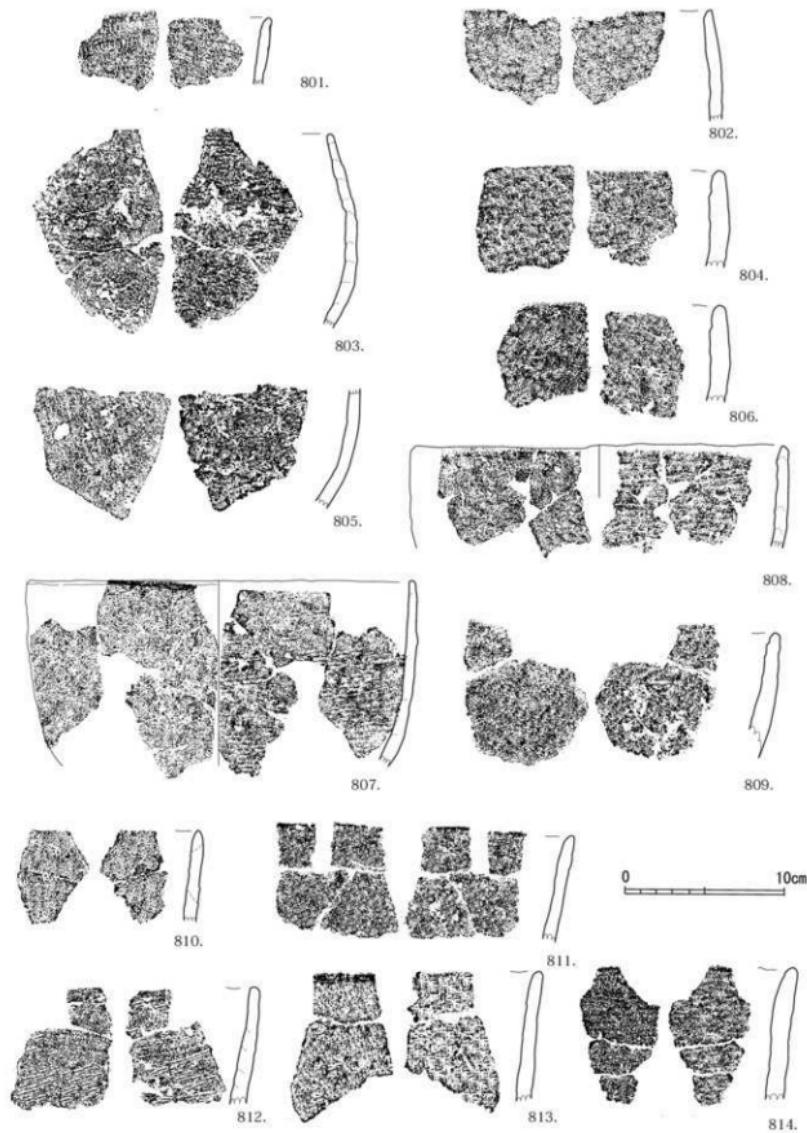
III群 押型文土器

I. 山形押型文

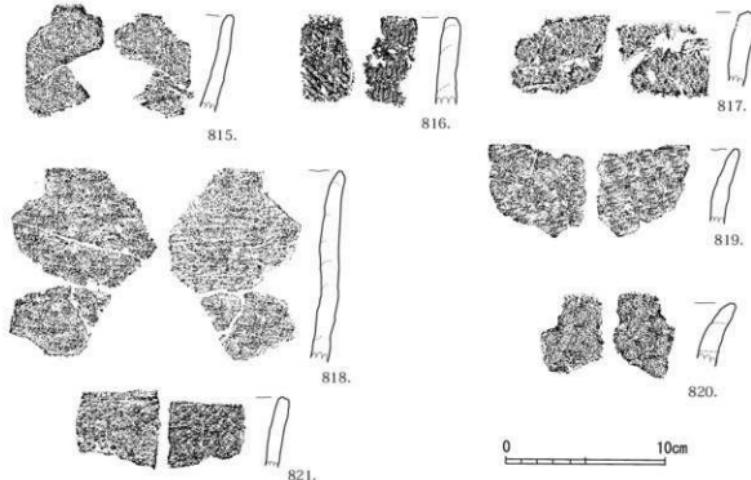
口縁部形態②

3B類（第115図822）

822は平坦な口唇部を持つ、やや外反する口縁部である。外面は横走する山形押型文を施している。内面はナデ調整を行った後に、原体条痕を施している。この内面原体条痕に直行するように、口唇部に刻みが施される。この刻みと、原体条痕の幅は同じである事から、同一原体を用いて、刻みから原体条痕という一連の作業を行った事が窺える。



第 113 図 繩文土器実測図 (1) ($S = 1/3$)



第114図 繩文土器実測図(2) ($S=1/3$)

4B類(第115図823)

823は口唇部をわずかに尖らせた、やや外反する口縁部である。外面は縱走する山形押型文を施すが、口縁部上端部には、わずかに無文帯が存在する。内面はナデ調整を施した後に、粗雑な原体条痕が施されている。

4D類(第115図824～831)

この類型が、山形押型文土器の主体をなしている。その中でも口唇部に施文を施さない、824～827と、施文を施す828～830に2分される。口唇部に施文を施さないものに関しては、口唇部形状に僅かな差違が認められる。すなわち、口唇部を僅かに尖らせた824・827、口唇部を丸く仕上げた825である。今回掲載を見合わせた他の資料に関しては、口唇部形状は大きくこの2種類に分類可能である。この中でも、827は口縁部をつまみ上げる事により、口唇部を尖らせる形状をしている。

口唇部に施文を施すものは、口唇部を平坦に仕上げており、この平坦部を文様帶として使用している。

口唇部施文の有無があれど、調整・施工工程は

共通している。外面には縱走する山形押型文を施している。内面にはナデ調整を施した後に、口縁部上端部にのみ横走する山形押型文を施文している。この後、口唇部に外面と同様の施文を施している。826は、口唇部形状は欠損のため不明瞭であるが、外反する口縁部である。調整・施文は824・825と同様である。830は口唇部を平坦に仕上げた、外反する口縁部である。外面はナデ調整が施され、内面はケズリにより稜を形成した後に、ナデ調整を施している。その後、稜の上部に横走する山形押型文を施文している。これら、内外面の調整・施文の後に、口唇部に内面と同様の施文を施している。831の口唇部形状は欠損のため不明瞭であるが、やや外反し、内面に稜を持つ資料である。外面に縱走する山形押型文(小波文)を施しておらず、内面にはナデ調整が施され、稜線から上部にのみ横走する楕円押型文が施されている。

4E類(第115図832～835)

この類型が、出土量から5D類と共に、山形押型文の主体をなしている。

832～835の資料に関しては口唇部の形状に

それぞれ特徴がみられる他は、共通の調整・施文を行っている。今回掲載を見合せた他の資料に關しても、口唇部形状は大きくこの3種類に分類可能である。すなわち、832は口唇部が平坦、833は口唇部が尖る、834は口唇部を丸く形成する。それぞれ外反する口縁部である。内面はナデ調整が施され、外面は縱走する山形押型文が施される。835は外反する口縁部である。外面は縱走する粗雑な山形押型文が施されている。内面はヘラ状の工具によるナデ調整が施される。焼成後に穿孔されているが、これは土器内面から器壁中ほどまで穿孔し、その後、外面から同様の作業を行う事により形成されている。

836と837は同一固体ではないものの、ほぼ同じ調整・施文を施しており、器形もほぼ同じものであると推測される。836は口唇部を尖らせた、やや外反する口縁部である。外面は縱走する山形押型文が施されている。内面はナデによる調整が施されている。この調整及び外面施文工程の後に、口唇部に棒状工具によるものと推測される刻みが施されている。なお、刻みが施された後に、ナデ等の調整が加えられた形跡は観察できない。837は口唇部が丸い形狀をしている他は、836と同じ調整・施文を施している。

胴部（第115図838・839）

各類型に分類する事が困難だった資料をまとめた。

838は外面に無文体を持つ資料である。外面は縱走する山形押型文を施した後、押型文間をナデる事により無文帶を形成している。内面は貝殻条痕調整を行っている。

839は外面に縱方向の山形押型文が施されている。内面はナデ調整が施されている。この839が野首第2遺跡の山形押型文が施された胴部片の最も典型的な資料である。

底部（第115図840）

山形押型文を施された底部は、小片が1点のみ出土している。具体的な底部形態は不明瞭であると言わざるを得ないが、山形押型文土器が楕円押型文土器と共に器形であると仮定するならば、底面がやや平らな丸底の可能性が高い。外面には

縱走する山形押型文が施されており、内面はナデ調整が施されている。なお内面には炭化物が付着している。

II 楕円押型文

野首第2遺跡の早期土器において主体をなす一群である。そのためバリエーションも豊富であるが、類型事に出土量の偏在が看取される。

口縁部形態①

1 D類（第116図841・842）

841はやや開き気味の口縁部である。口縁部は先細りであるが、口唇部はナデ調整により平坦に仕上げている。外面は、横走する楕円押型文が施されている。内面はナデ調整の後に口縁部上端にのみ横走する楕円押型文が施される。内・外面ともに押型文の粒径は小さい。

842は口唇部が欠損しているため、器形は不明瞭であるが、調整・施文が841と酷似しているため、おそらく開き気味の口縁部であると推測される。

4 D類（第116図843）

843は開き気味の口縁部であり、口唇部を平坦に仕上げている。外面に斜走する楕円押型文を施し、内面には、ナデ調整の後に横走する楕円押型文を施している。その後、口唇部に山形押型文を施している。

4 E類（第116図844・845）

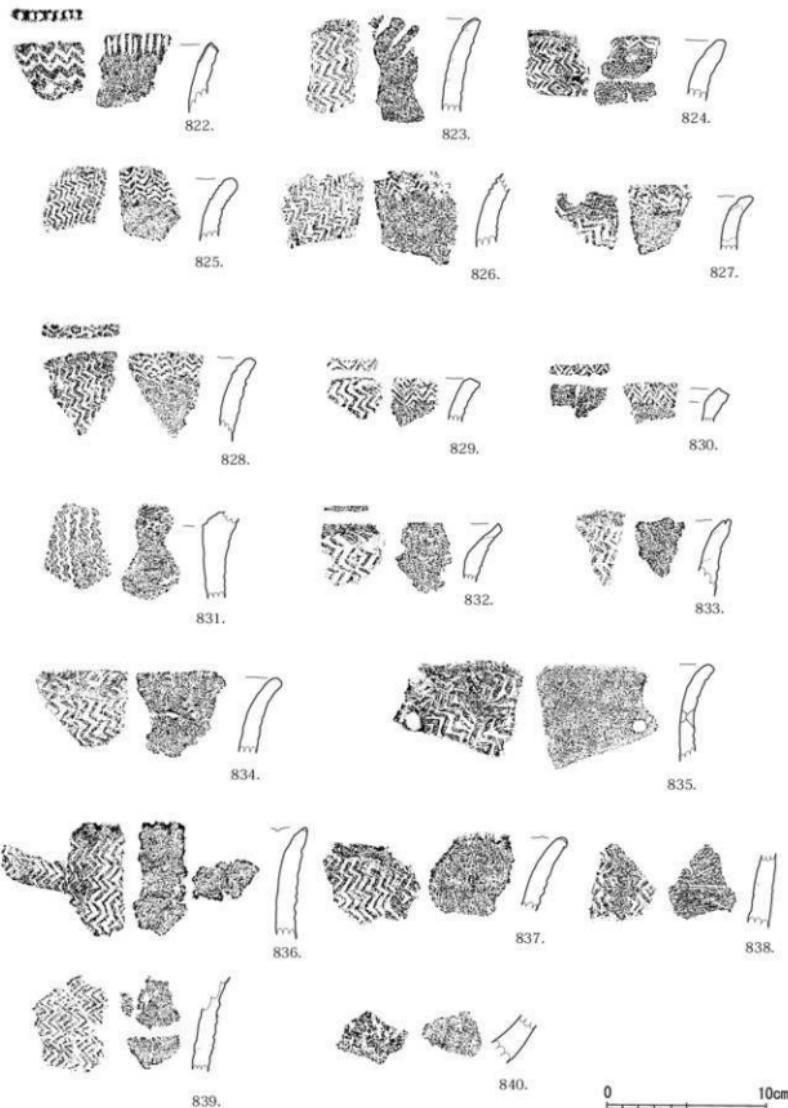
844・845は開き気味の口縁部である。844に関しては口唇部にも外面と同様の施文を行っている。その結果、口唇部が押しつぶされ、口縁部の先端が外反したような印象を与えている。845は口唇部を尖らせた口縁部である。口唇部に施文が無い他は、844と同じ調整・施文を行っている。

口縁部形態②

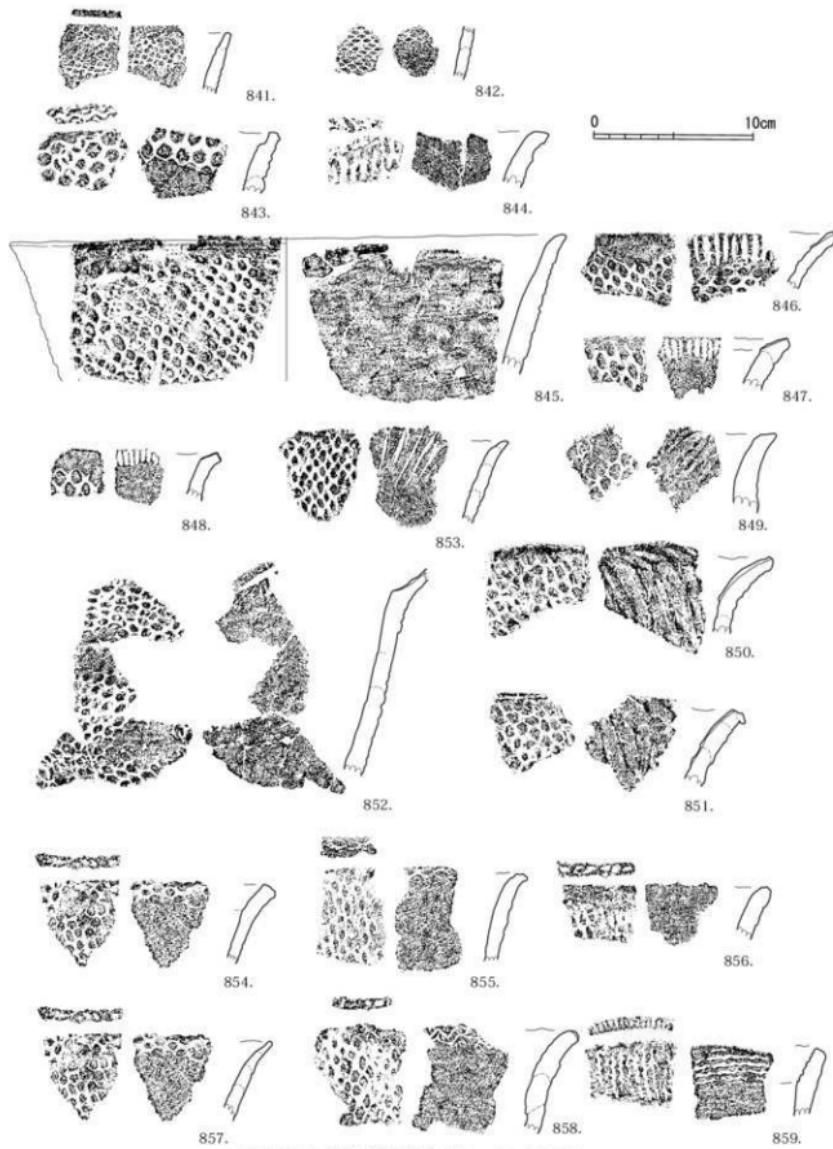
楕円押型文の主体をなす口縁部である。後に報告する胴部・底部も、おそらくはこの口縁部らと同一個体であった可能性が高い。

4 A類（第116図846）

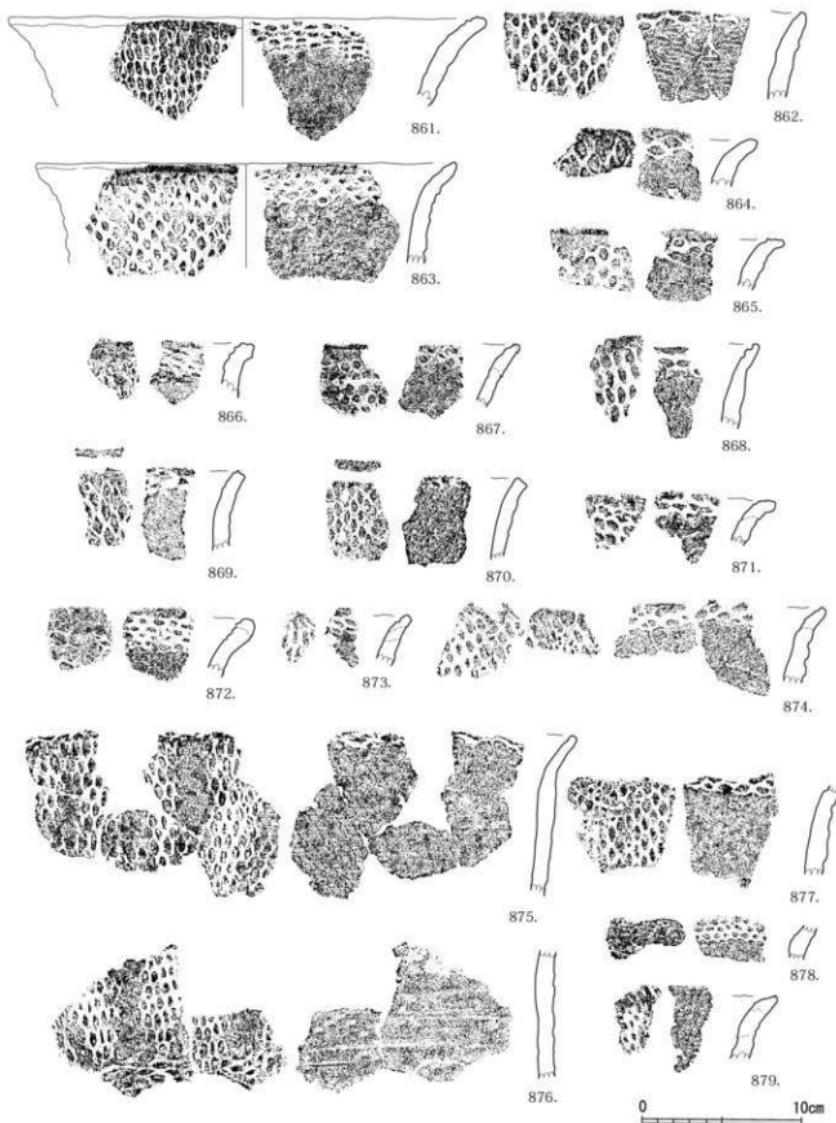
846は開き気味の口縁部で、口唇部を丸く仕上げている。外面は右斜走から左斜走の順に3単位の楕円押型文を施している。内面はナデ調整を行った後に、横走する楕円押型文を施し、その後、



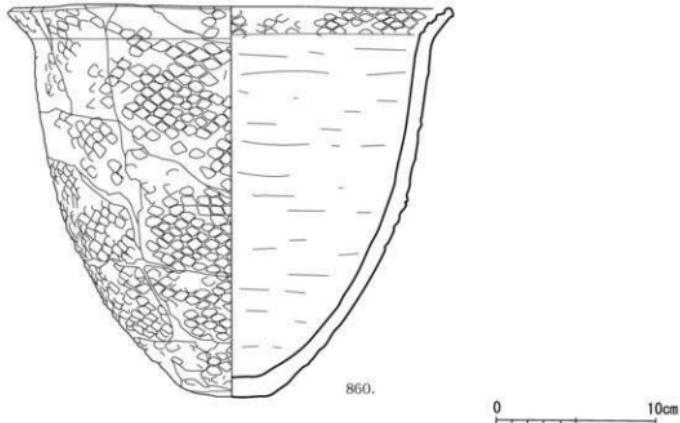
第 115 図 繩文土器実測図 (3) ($S=1/3$)



第116図 繩文土器実測図(4) (5=1/3)



第117図 溝文土器実測図(5) ($S = 1/3$)



第118図 繩文土器実測図(6)(S=1/3)

原体条痕を施文している。

4B類(第116図847~853)

847・848は平坦な口唇部と内面に稜を持つ、外反する口縁部であり、ほぼ同じ調整・施文を行っている。外面は縱走する楕円押型文が施されており、内面はナデ調整が施された後に、稜の上部に原体条痕というよりは、柵状文が施されている。

852は外反する口縁部であり、口唇部は欠損しているため、その形状を窺う事はできない。外面に2単位の縱走する楕円押型文を施し、内面はナデ調整を行った後に、原体条痕を施している。

853は口唇部を尖らせた、外反する口縁部である。調整・施文は852と同じであるが、内面に稜を形成しない点が異なっている。

4C類(第116図849~851)

849~851は口唇部を尖らせた、外反する口縁部である。外面には縱走する楕円押型文を施し、内面はナデ調整を施した後に、まず粗大で幅広い凹線に似た短い原体条痕を施した後に、この原体条痕の端部に重ねる形で、原体条痕を施している。

4D類(第116図854~859、第118図860、第117図861~878)

外反する口縁部であるが、口唇部に文様帶を持つものと、持たない2者が存在する。このうち、

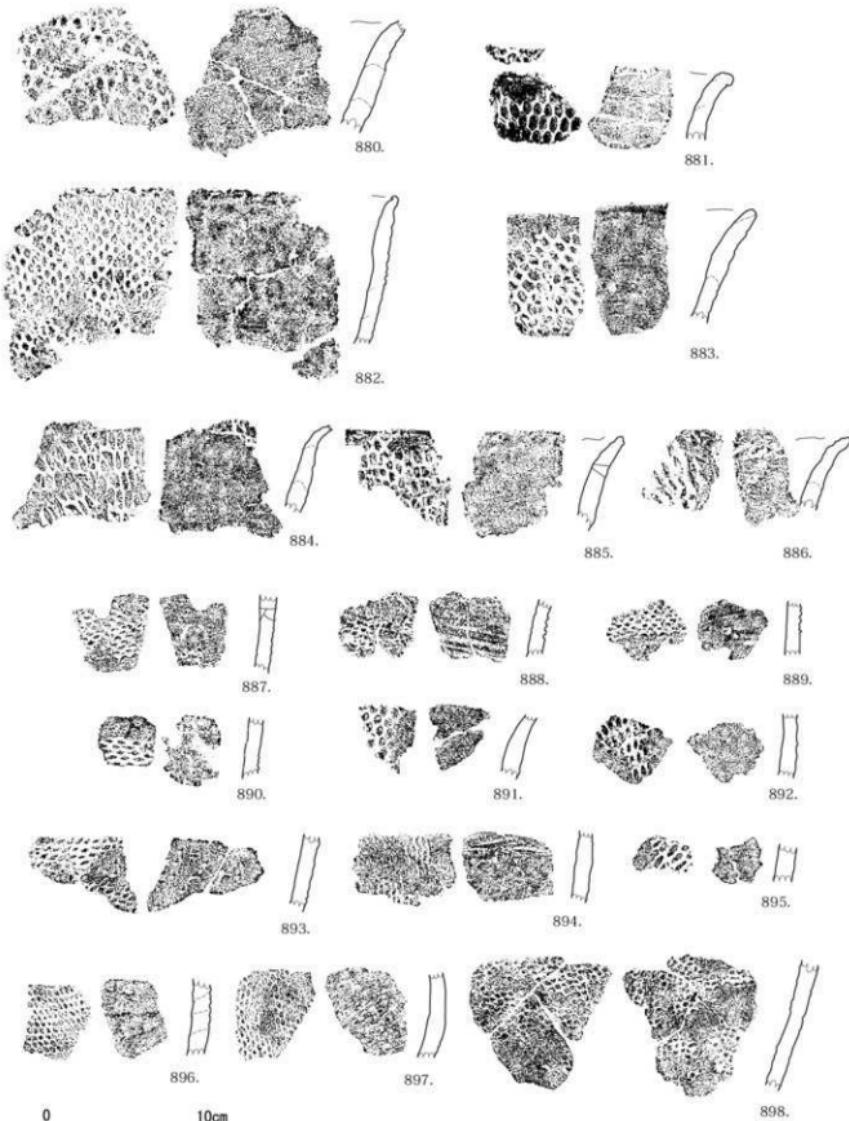
854~859が前者、860~878が後者である。

前者に関しては、内・外表面をナデ調整した後に、外面から施文を行い、次に口唇部から内面にかけての施文を行っている。この際、口唇部に平坦面を作り出して、そこを文様帶とするもの(854)と、口唇部にとくに平坦面を形成せず施文したもの(855~858)が存在する。

後者に関しては、口唇部に施文しない事もあってか、この部位の形状は、丸く仕上げたものや、尖らせたもの、平坦面を有するものが混在している。しかしながら、調整・施文工程は全て同じである。内面施文に関しては2単位の押型文を1回転させたものが多いようである。

860は口径30.2cm、器高26.8cmの完形資料であり、やや外反する口縁部から、砲弾形の胴部・底部に至る器形を呈する。外面には縱走する楕円押型文が施され、内面には、ナデ調整を施した後に、横走する楕円押型文を施している。外面の口縁部にはススの付着が見られる。また内面には煮沸に使用したとおぼしき使用痕が観察される。

875・876は同一個体である。口唇部を丸く仕上げた外反する口縁部から、砲弾形の胴部に続く器形である。外面はナデ調整の後に、縱走する楕円押型文をベルト状施文した後に、胴部下部に横



第119図 溝文土器実測図(7) (S=1/3)

走する楕円押型文を施している。内面はナデ調整の後に、口縁部付近にのみ横走する楕円押型文を施している。

4E類（第117図879、第119図880～886）

外反する口縁部で、外面に施文されるのみで内面に施文しないタイプである。楕円押型文を施す口縁部の主体をなす一群である。いずれの資料も、口唇部を尖らせた、外反する器形をしており、内・外面にナデ調整を施した後に、外面のみ縦走する楕円押型文を2～3単位施している。

胴部（第119図887～898、第120図899～905）

各類型に分類する事が困難だった資料をまとめた。報告の便宜上、施文方向により分類を行っている。

横走する楕円押型文

887～890が横走する楕円押型文が施された胴部片である。いずれも器壁が薄く、押型文の粒径が際立って小さい。また、外面にベルト状施文を行っているという特徴がある。このベルト状施文は器面全体に押型文を施した後に、押型文の一部分をナデ消して無文帯を形成するのではなく、施文段階で押型文と無文帯を一定の間隔毎に配置する事を意識している様である。内面はナデ調整がなされているが、888に関しては条痕調整が行われている。さらに887は焼成後穿孔が施されているが、まず外面から穿孔を行い、次に内面から行う事によって形成している。

縦走・斜走する楕円押型文

縦走する楕円押型文の中でも、891～899の資料は粒径が小さく900～905の資料は粒径が大きい。

また890～895はベルト状施文を施しており、898は外面に不定方向の押型文を施し、内面も外面と同様な施文を行っている。押型文土器において胴部の内面まで施文を施すケースは稀であり、その押型文の粒径の小ささや、施文方向と合わせ、時期推定を困難にしていると言わざるを得ない。

905は外面に粗大な楕円押型文が施文されている。内面はナデによる調整が施されている。903・902は同一固体であるが、胴部上半部は縦

走する楕円押型文が施されているのに対し、胴部下半～底部付近については斜走する楕円押型文が施されている。

底部・底部付近（第120図906・907、第121図908～919）

底部～底部付近に該当し、各類型に分類する事が困難だった資料をまとめた。

906～913が底部付近に該当するが、胴部などに比べて、明瞭に施文されているものが少ないようである。

底部は丸底の出土に限られ、明確な平底の資料は確認できなかった。

なお、外面に2次的な焼成痕が観察できた資料は存在しなかった。

III 複合押型文

胴部（第121図920～924）

胴部のみの出土であり、口縁部形態に基づく分類はできなかった。920～922は楕円押型文と山形押型文の折衷土器であり、923・924は楕円押型文と条痕文の折衷土器である。

920・921は外面にナデ調整を行った後、縦走する楕円押型文を施し、無文帯を挟んで、縦走する山形押型文を施している。922は外面に斜走する楕円押型文を施した後に、斜走する山形押型文を施している。内面はナデ調整が施されている。

923は外面に斜走する楕円押型文を施した後に、条痕文が施されている。内面はナデによる調整が施されている。924は条痕文を施した後に、楕円押型文が施されている。内面はナデ調整が施されている。

IV 格子目押型文

胴部（第121図925・926）

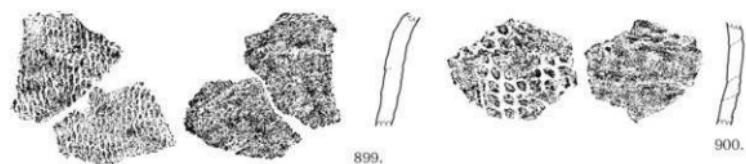
口縁部の出土は無く、胴部片のみが出土している。

925・926は同一個体ではないものの、同一の施文及び調整が施されている。両者とも外面に格子目押型文を施し、内面はナデによる調整を行っている。

V 枝回転文

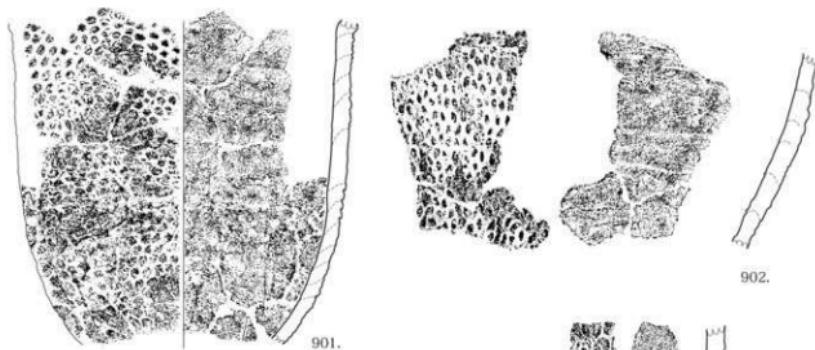
口縁部形態②（第122図927）

927は口縁端部をやや平坦に仕上げた、僅か



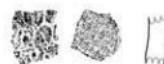
899.

900.



901.

902.

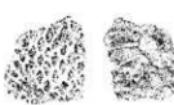


903.



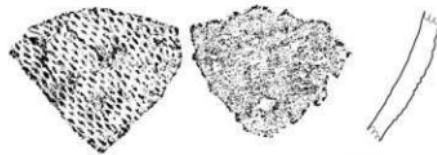
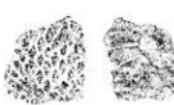
904.

905.



905.

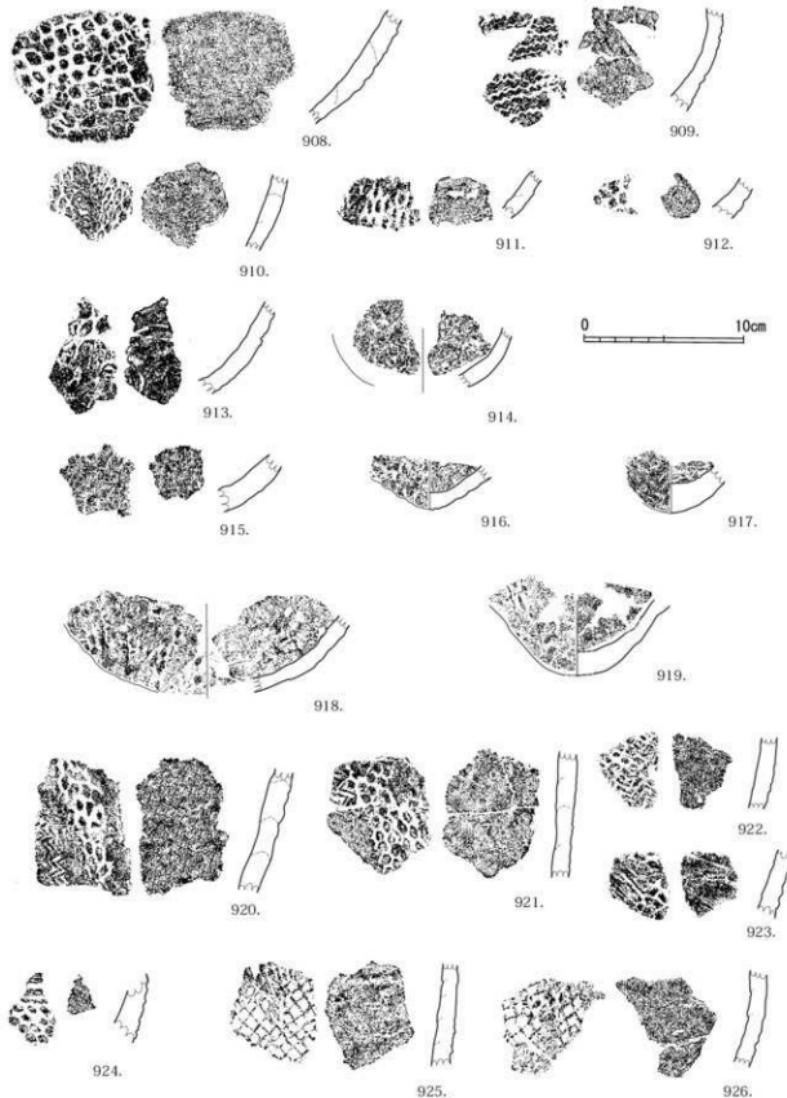
906.



907.



第120図 溝文土器実測図(8) (S=1/3)



第121図 橋文土器実測図(9) ($S = 1/3$)

に外反する口縁部である。外面に松の子葉の回転施文によると推測される圧痕が観察できる。内面はナデによる調整が施されている。

胴部（第122図928・929）

928・929には、927と同様の調整・施文がなされている。

VI 繩文

口縁部形態①（第122図932）

932は口唇部を丸く仕上げた、直口する口縁部である。外面に斜走する繩文を施し、内面はナデ調整の後、口縁部上端部のみ横走する繩文を施している。

口縁部形態②（第122図930）

930は口唇部の形状は不明であるが、外反する口縁部である。外面に斜走する繩文を施し、内面はナデ調整の後、口縁部上端部のみ横走する繩文を施している。

胴部（第122図933・934）

933・934ともにいずれの類型に当てはまるのか不明瞭であるため、一括して報告する。

933は外面に斜走する繩文を施している。内面はナデによる調整を施している。934も基本的に933と同じ施文・調整であるが、外面の施文方向が僅かに異なっている。

VII 撫糸文

935が撫糸文。936・937には網目状撫糸文が施されている。

口縁部形態②（第122図935～937）

935は撫糸文を施した口縁部である。欠損のため、口唇部形状は不明瞭ながら、直口し、やや開き気味の口縁部形状になるものと思われる。内面にはナデ調整が施されている。

936は口縁端部を丸く仕上げた、やや外反する口縁部である。内外面ともナデ調整を施した後に、外面全体に網目状撫糸文を施文している。937は口縁端部を丸く仕上げた、やや外反する口縁部である。内外面ともナデ調整を施した後に、外面全体及び、内面に網目状撫糸文を施文している。

VIII その他（第122図938）

以上I～VIIの文様にカテゴライズできない資料である。

938は外反する口縁部から、砲弾形の胴部へと至る器形をしている。内面はケズリにより調整されるが、これにより稜を形成し、稜から上を外面と同様の押型文を施している。外面には変形柵状文とも言うべき押型文を施している。口唇部には刻みが施される。

III群2（第122図939～940）

939・940は同一個体であり、やや外反する口縁部（939）から、稜をなして屈曲する胴部（940）という器形をなしている。

939は内外面ナデによる調整を行った後に、外面に放射状モチーフの連続貝殻腹縁刺突文、内面の口縁部上部に貝殻復縁刺突文を施している。口唇部には連続貝殻腹縁押引文を施している。

IV群 貝殻文系・条痕文系土器

1類（第122図941～943、第123図944～949）

941～944は、やや外反する口縁部である。口唇部は平坦に仕上げ、ここに刻みを施すものもある。内面はミガキ・ケズリにより調整が施される。外面には、貝殻腹縁刺突文を施した後に、楔形突帯文を施す。

948・949は胴部であるが、先に報告した口縁部とは異なる個体である。外面に斜走する貝殻条痕による調整を施した後に、貝殻腹縁刺突文を施している。内面は縱方向に貝殻腹縁部によるケズリ調整痕が観察される。

2類（第123図945～947）

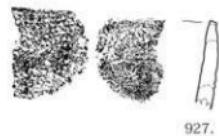
945～946は、やや外反する口縁部である。口唇部は平坦に仕上げ、ここに刻みを施すものもある。内面はナデにより調整が施される。外面には、貝殻腹縁押引文を施した後に、楔形突帯文を施す。

947は、外面に連続貝殻腹縁押引文を施した胴部である。内面はケズリによる調整痕が観察できる。

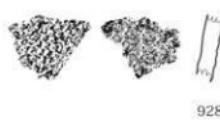
1・2類の底部（第123図950～952）

先に報告した1類・2類の底部と推測される資料である。

950は円筒形をなす平底であり、外面に棒状工具による線刻が施されている。内面はケズリ調整



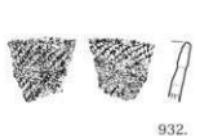
927.



928.



929.



932.



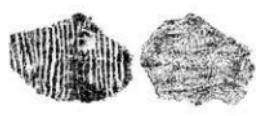
930.



933.



934.



935.



936.



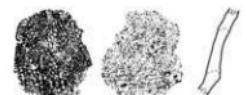
938. 0 10cm



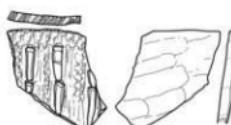
937.



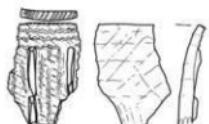
939.



940.



941.



942.



943.

第122図 橢文土器実測図(10) (S=1/3)

がなされている。951は円筒形をなす平底であり、外面に棒状工具による線刻が施される。内面調整は950・952と同じくケズリ調整が施されているが、950・952に比べ器壁が厚くなっている。952の器形は950と同じであり、器壁の厚さも同様であるが、950に施されている条痕文は見られない。

3類（第123図953～956、第124図957）

3個体出土しているが、いずれも調整・文様に大差はない。土器胎土中に金色粒を含んでいる。

953は、やや内湾し口唇部をミガキ調整により平坦に仕上げた口縁部である。外面は貝殻により綾杉條条痕文が3列施されている。施文順序は下から上部の順に条痕文を施している。内面は口唇部と同じく横方向のミガキ調整である。

954は953と同様の部位・調整・施文が施されているが、外面の施文原体の大きさが953より若干大きいようである。955は954の同一個体であり、胴部に相当する。

4類（第12図158）

158は、やや外反し口縁端部をミガキ調整により丸く仕上げた口縁部である。内外面ミガキ調整を行った後に、外面は連続貝殻復縁押引文を施している。また外面には炭化物が付着している。

5類（第124図959）

959は、外面に縱方向の条痕文を施した後に、横方向の条痕文を施文している。内面は風化しているが、ミガキ調整を行った痕跡が観察される。

6類（第124図960・961）

960は口唇部を丸く仕上げた、やや外反する口縁部である。外面には貝殻条痕文が施され、内面・口唇部はミガキによる調整が施されている。また土器胎土中に径1～3mm前後の黄色軽石が含まれている。961は口唇部を平坦に仕上げた、内湾する口縁部である。内外面ともに風化が著しく、調整痕は明瞭に観察できなかった。外面には口縁端部に1列の連続刺突文が施されている。

4～6類の底部（第124図962～964）

先に報告した4～6類の底部と推測される資料である。

962・963・964は底径こそ違えども、同じ器

形であり、同じ調整・施文が施されている。

器形は円形平底であり、底面から器壁が斜め方向に立ち上がっていき事から、底径よりも口径の方が大きい事が予想できる。なお962のみ底部に製作台の跡と考えられる圧痕が観察される。なお、外面に2次的な焼成痕が観察できた資料は存在しなかった。

V群 沈線文系土器

1類（第124図965・966）

965は、大きく開く口縁部である。内外面ともミガキ調整が行われ、外面にのみ矢羽状沈線文と連点文を施している。966は口唇部が欠損しているものの、ラッパ状に開く口縁部である。内外面に丁寧なナデを施し、外面に三角形を基調とした沈線文を施し、その後、連続した連点文を施している。

2類（第124図968・969）

2個体出土している。968は頸部に相当する。外面にナデ調整を行った後に、胴部に網目状撚糸文を施している。その後、頸部に4条、口縁部に3条の沈線文が施されている。内面はナデによる調整が施されている。

969は外面にナデ調整を行った後に、胴部に網目状撚糸文を施した後に2条+αの沈線文が施されている。内面はナデによる調整が施されている。

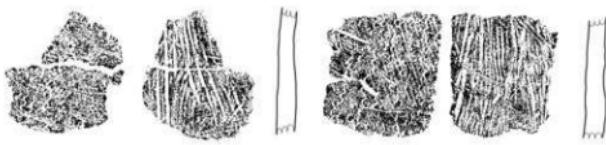
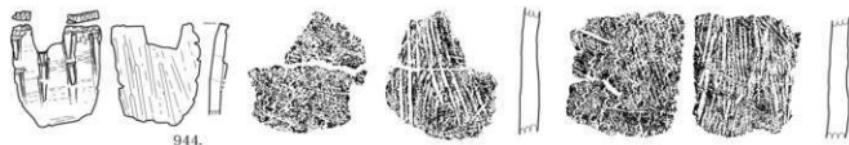
3類（第124図967）

ラッパ状に開く口縁部から、バケツ形の胴部に至る器形である。口唇部は尖らせ、羽状の条痕文を施している。内外面はミガキ調整が施され、外面の頸部に3本の沈線文を施し、その沈線文を集約するかのように、この文様上に2本の三日月状の沈線文を施している。

■石器・石製品

石鏃（第127・128図）

II層以下から検出された資料に加え、I層と表土および縄文後期以降の遺構から検出された資料についても、縄文早期と判断できるもの（いわゆる鎌形鏃や特に黒曜石製の小形三角形鏃）については、ここで取り扱う。その他、石材などの特徴から早期に属する可能性があるものの、破損品で

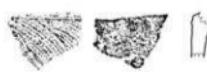


949.

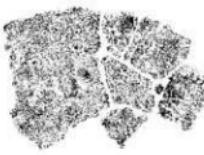


947.

949.



第123図 橋文土器実測図(11) ($S = 1/3$)



0 10cm

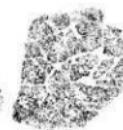
957.



958.



959.



959.



960.



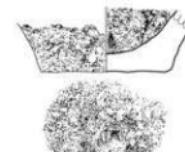
961.



962.



963.



964.



965.



966.



967.



967.



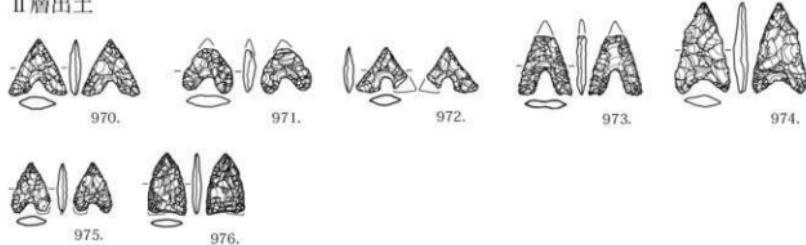
968.



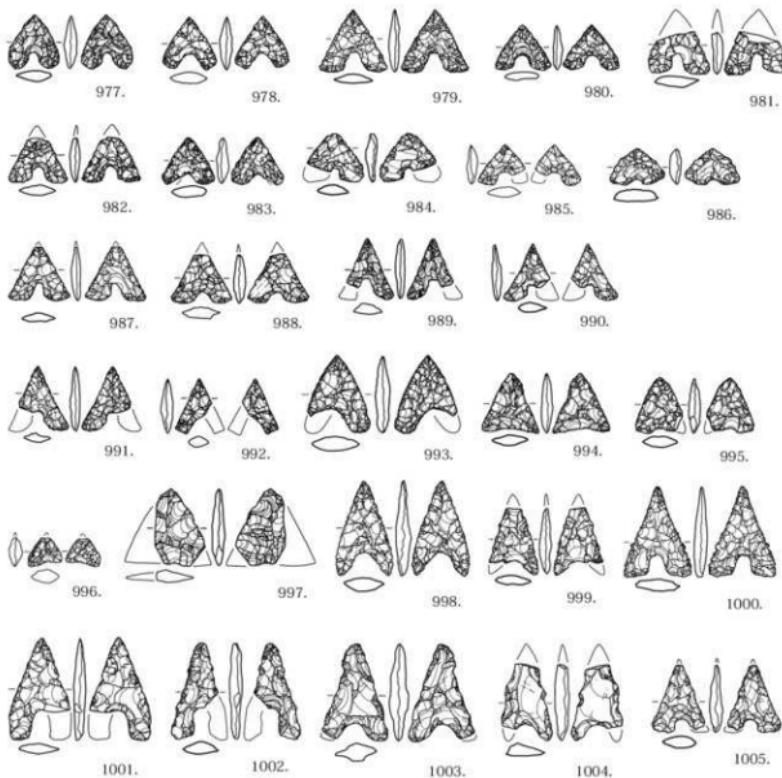
969.

第124図 繩文土器実測図(12) (S=1/3)

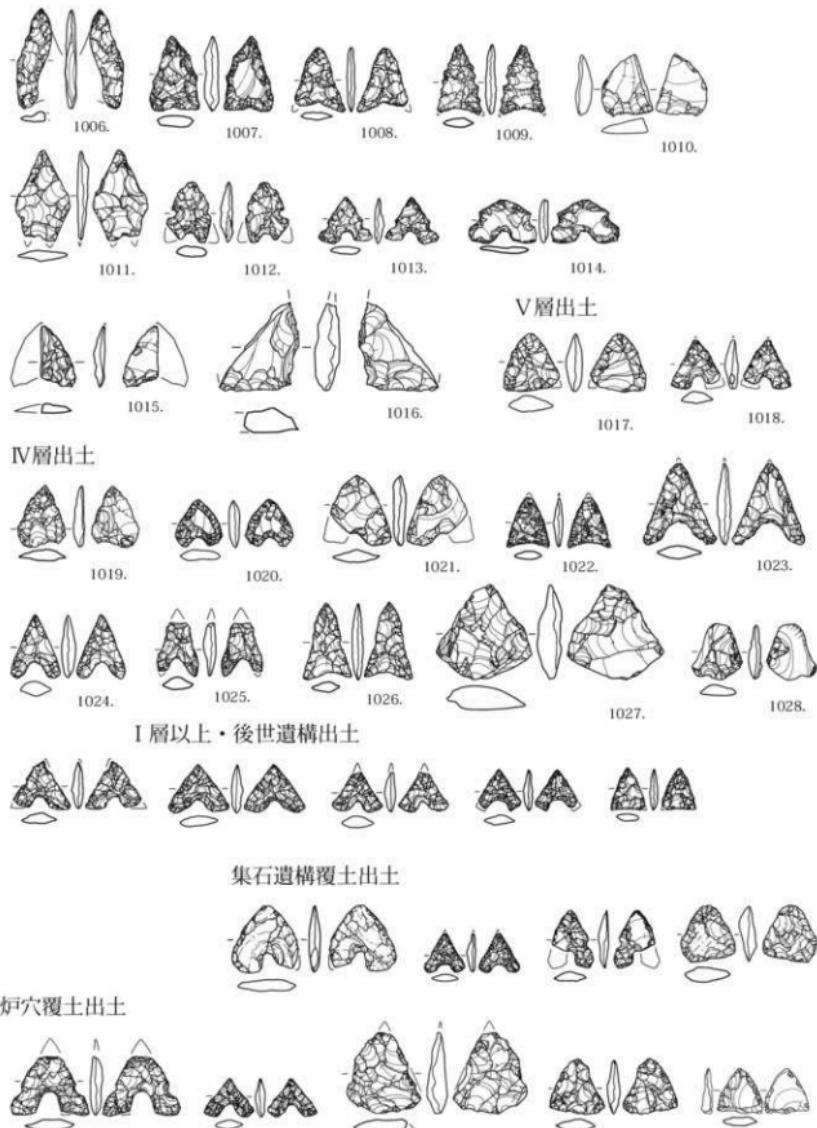
II層出土



III層出土



第125図 繩文時代早期の石器（1）(S= 2/3)



第 126 図 繩文時代早期の石器 (2) ($S = 2 / 3$)

形態的な特徴が判読できない資料は後期以降の所産と認定し、第2分冊に掲載することにした。また逆に、II層以下から検出されたものでも、形態的に後期以降の所産と判断したものは、第2分冊に掲載した。この基準で集成した結果、合計92点の石器を認定できた。

これらの出土状況の内訳は、縄文時代早期の遺構内出土が9点（集石遺構4点、炉穴5点）、遺構外の包含層出土が83点である。

その他の石器としては、石匙、E区で確認された石斧製作遺構に伴う石斧未成品、炉穴に伴う環状石斧など重要な遺物が数多くあるが、今回は掲載できなかった。第二分冊に譲りたい。

遺構出土の遺物

A区

SI 8

1101は口唇部を丸く仕上げた、外反する口縁部である。外面は縦走する楕円押型文が施されている。内面はナデ調整が行われ、外面の施文を行った後に、口唇部に楕円押型文を施している。

SI20

1102・1103は楕円押型文土器の胴部、1104は枝回転文の胴部である。1102・1103とともに外面は斜走する楕円押型文を施し、内面はナデ調整を行っている。1104は外面に枝回転文を施し、内面はナデ調整を施している。

SI25

1105は外面に枝回転文を施した胴部であり、内面はナデ調整を行っている。1106は楕円押型文を施した底部であり、底部形態は丸底を呈する。内面はナデ調整である。

SI26

132は外面に縦走する楕円押型文を施した、底部付近であると考えられる。内面はナデ調整が行われている。

SI37

1108は楕円押型文土器の胴部である。外面に斜走する楕円押型文を施し、内面はナデ調整が行われている。

SI69

1109は楕円押型文土器の胴部である。外面に

斜走する楕円押型文を施し、内面はナデ調整が行われている。

SI75

1110・1111共に山形押型文土器の胴部である。1110は外面に斜走する山形押型文を施している。内面はナデ調整である。1111は外面に幾何学的な山形押型文を施している。内面はナデ調整である。

SI77

1112は楕円押型文土器の胴部である。外面に横走する楕円押型文を施し、内面はナデ調整を施している。

SI83

1113は外面に斜走する楕円押型文を施した胴部であり、内面はナデ調整を行っている。

SI86

1114・1115は外面に斜走する楕円押型文を施した胴部である。内面にはナデ調整を施す。

SI87

1116は口唇部を、やや丸く仕上げた口縁部である。外面には横走する楕円押型文を施し、内面には、ナデ調整の後に外面と同様の施文を施す。また焼成の後に穿孔がなされている。1117は縦走する楕円押型文を施した胴部である。内面はナデ調整が行われている。

SI90 - 93

1118は不定方向に楕円押型文を施した胴部である。押型文の粒径は、他の集石遺構出土土器に比べ小さい。内面はナデ調整が行われている。

SI91

1119は口唇部に平坦面を持つ、外反した口縁部である。外面は、ナデ調整を施した後、斜走する楕円押型文をベルト状施文している。内面はケズリ調整である。また口唇部に刻みを施している。

SI96

1120は外面に縦走する山形押型文を施す胴部である。内面はナデ調整が行われている。1121は外面に縦走する楕円押型文が施された胴部である。内面はナデ調整が行われている。

B 区

SI153

1122 は外面に横走する楕円押型文を施した胸部である。内面にはナデ調整が施されている。

SI153 + SI155

SI153 と SI155 の接合資料である。1124 は口唇部を丸く仕上げた、外反する口縁部である。外面には縦走する楕円押型文を施し、内面にはナデ調整を施した後に、口縁上端部にのみ横走する楕円押型文を施している。

SI155

1123 は斜走する楕円押型文を施した胸部である。内面にはナデ調整が施される。

SI155 + SI164

SI155 と SI164 の接合資料である。1125 は縦走する楕円押型文を施した胸部であり、内面にはナデ調整を施す。

SI156

1126・1127 ともに、外面に斜走する楕円押型文を施した胸部である。内面はナデ調整が行われている。

SI187

1116 は口唇部をやや尖らせた、外反する口縁部である。外面に横走する楕円押型文を施し、内面はナデ調整の後に、口縁部上端のみ外面と同様の施文を行っている。また、焼成後の穿孔が観察されるが、これは外面から穿孔した後に内面から穿孔を行う事により形成されている。

炉穴出土土器所見

A 区

SP 1

1128 は外面に縦走する山形押型文を施した胸部である。内面はナデ調整痕が観察される。

SP 3

1129 は口唇部を尖らせた外反する口縁部である。外面には縦走する楕円押型文が施され、内面にナデ調整が行われている。1130 は胸部であり、1129 と同じ調整・施文が行われている。

SP 4

1131 は外面に斜走する楕円押型文を施した胸部である。内面にはナデ調整が施されている。

SP 5

1132 は外面に斜走する楕円押型文を施した胸部である。内面にはナデ調整が施されている。

SP11

1133 は口縁部を丸く仕上げた外反する口縁部である。外面には縦走する楕円押型文を施し、内面にはナデ調整痕が観察できる。

SP17

1134 は口唇部をやや平坦に仕上げた、外反する口縁部である。外面に縦走する楕円押型文を施し、内面にはナデ調整痕が観察できる。内外面の調整・施文の後に、口唇部に楕円押型文を施している。

SP18

1135 は外面に斜走する楕円押型文を施した胸部である。内面にはナデ調整が施されている。

SP23

1136 は外面に斜走する楕円押型文を施した胸部である。内面にはナデ調整が施されている。

SP26

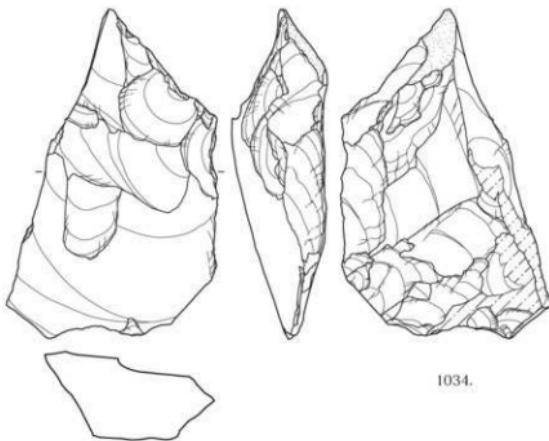
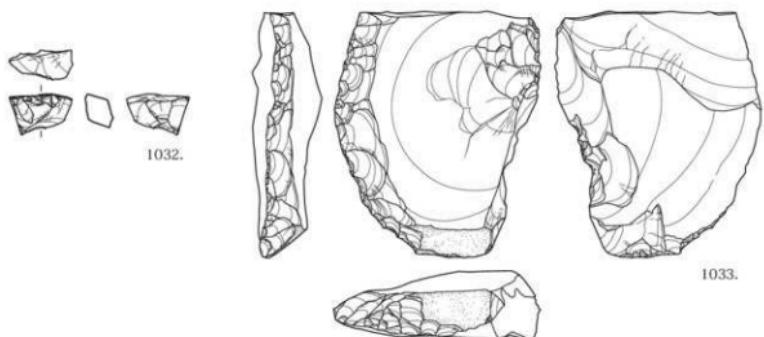
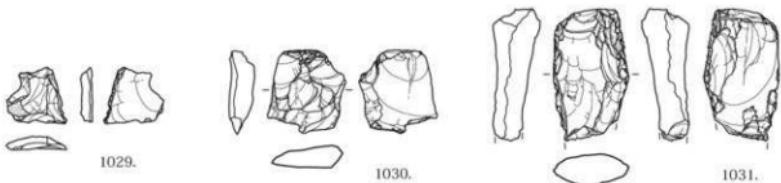
1137 は口唇部に平坦面を有する、やや開き気味の口縁部である。外面には縦走する山形押型文を施し、内面にはナデ調整の後、口縁上端部にのみ柵状文を施している。1138 は口唇部を先細りに仕上げた、外反する口縁部である。外面に斜走する山形押型文を施している。内面はナデ調整の後、横走する楕円押型文を施している。1139 は外面に斜走する楕円押型文を施した頸部から胸部である。頸部の形状を観察する限りでは、口縁部は外反している様である。内面にはナデ調整が施されている。

SP27

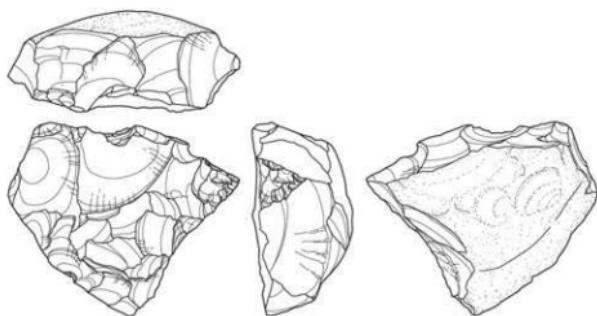
1140・1141 は口縁部を丸く仕上げた、外反する口縁部である。外面には縦走する楕円押型文を施している。内面にはナデ調整を施すが、1141 は調整の後に、2段の粗大な原体条痕を施している。

SP31

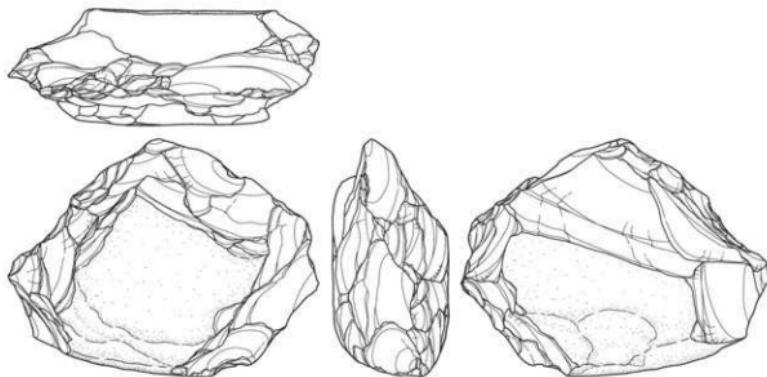
1142 は底部に縦走する楕円押型文を施した底部である。底面が欠損しているため、具体的な底部形態は不明瞭であるが、おそらく丸底の可能性



第127図 縄文時代早期の石器（3）(S=2/3)



1035.



1036.

第 128 図 繩文時代早期の石器 (4) ($S = 2 / 3$)

第1表 土器観察表（1）

番号	器種	部 位	取上げ番号	出土地点	調整・文様		色 質		胎 土	備考
					外面	内面	外面	内面		
801	深鉢	口縁部	214	E区Ⅳ層 E区Ⅴ層	日置条痕→ナデ→口縁部(唇部)に縦走する 2列の折衷文	日置条痕→ナデ	褐色	褐色	透明粒、赤褐色粒	織痕痕
803	深鉢	口縁部	2535-2541	E区Ⅲ層	日置条痕→ナデ	日置条痕→ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒	織痕痕
805	深鉢	胴部	708	E区Ⅲ層	日置条痕→ナデ	日置条痕→ナデ	褐色	褐色	白色粒	織痕痕
802	深鉢	口縁部	1 4 6 + 5 0 4	E区Ⅲ層	ナデ	ナデ	褐色	褐色	白色粒、黒色透明粒	織痕痕
804	深鉢	口縁部	43	E区Ⅳ層	ナデ	ナデ	褐色	褐色	透明粒	織痕痕
806	深鉢	口縁部	95	C区	ナデ	ナデ	褐色	褐色	白色透明粒、砂粒(1)	織痕痕
807	深鉢	口縁部～胴部	6 0 6 + 2 6 5 4 + 2 7 4 9 + 2 8 2 0 +	E区Ⅲ層	ナデ	日置条痕→ナデ	褐色	褐色	白色透明粒、砂粒(1)	織痕痕

が高い。内面には不定方向のナデ調整痕が観察できる。

SP34

1143は外面に縱走する山形押型文を施した胴部である。内面はナデ調整痕が観察される。

SP35

1144は外面に斜走する楕円押型文を施した底部付近である。内面にはナデ調整痕が観察できる。

1145はやや外反する口縁部である。

SP36

1146は外面に縱走する山形押型文を施した底部付近である。内面にはナデ調整痕が観察できる。

1147外面に縱走する楕円押型文を施した底部付近である。内面にはナデ調整痕が観察できる。

SP37

1148は口唇部を尖らせた、外反する口縁部である。外面には縱走する楕円押型文を施し、内面にはナデ調整の後、口縁部上端部にのみ横走する楕円押型文を施している。

SP43

1149は口唇部に平坦面を持つ、開き気味の口縁部である。外面にはナデ調整の後に、斜走する楕円押型文を施し、内面は外面と同じく、ナデ調整の後に、横走する楕円押型文を施している。内外面の施文の後に、口唇部に楕円押型文を施す。

1149に施される楕円押型文は、他の遺構内出土のものよりも粒径が小さいようである。

SP44

1150は外面に斜走する楕円押型文を施した胴部である。内面はナデ調整が行われている。

SP46

1151は外面に斜走する楕円押型文を施した胴部である。内面はナデ調整が行われている。

SP49

1152は外面に斜走する楕円押型文を施した胴部である。内面はナデ調整が行われている。

SP52

1153・1154は外面に斜走する楕円押型文を施した底部付近である。内面にはナデ調整痕が観察できる。1155は口唇部を尖らせた、開き気味の口縁部である。外面には斜走する縫文を施し、内面にはナデ調整の後に、口縁部上端部のみに縫文を施している。1156は外面に横走する山形押型文を施した胴部である。

SP53

1157は口唇部を丸く仕上げた、外反する口縁部である。外面はナデ調整を行った後に、斜走する楕円押型文を施している。内面はナデ調整を施した後、口縁部上端部にのみ横走する楕円押型文を施している。1158は外面に縱走する楕

第2表 土器觀察表(2)

番号	器種	部 位	取上げ番号	出土地点	調整・文様		色 調		胎 土	備考
					外面	内面	外面	内面		
808	深鉢	口縁部	863 + 2878	E区Ⅲ層	ナデ	ナデ	褐色	褐色	白色透明粒、赤褐色粒 砂粒①	鐵頭瓶
809	深鉢	口縁部	101	E区Ⅲ層	ナデ	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒	鐵頭瓶
810	深鉢	口縁部	2843	E区Ⅲ層	ナデ	ナデ	褐色	褐色	白色粒、赤褐色粒	鐵頭瓶
811	深鉢	口縁部	87	E区Ⅲ層	ナデ	ナデ	褐色	褐色	白色粒、赤褐色粒 鐵頭瓶、外面 久ス付着	
812	深鉢	口縁部	865 + 1775	E区Ⅲ層	ナデ	ナデ	褐色	褐色	白色粒、赤褐色粒	鐵頭瓶
813	深鉢	口縁部	2594+2743	E区Ⅲ層	ナデ	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒	鐵頭瓶
814	深鉢	口縁部	—	E区Ⅲ層	ナデ	貝殻条痕→ナデ	褐色	褐色	白色粒	鐵頭瓶
815	深鉢	口縁部	262	E区Ⅲ層	ナデ	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒	鐵頭瓶
816	深鉢	口縁部	168	E区縫透出 層	ミガキ→朱文	ミガキ	褐色	褐色	黄色バニス	外底ス付着、 鐵頭瓶
817	深鉢	口縁部	763	E区Ⅲ層	ナデ	ナデ	褐色	褐色	透明粒、白色粒	鐵頭瓶
818	深鉢	口縁部～側面	680-2812	E区Ⅲ層	ナデ	貝殻条痕→ナデ	褐色	褐色	白色透明粒、透明粒	鐵頭瓶
819	深鉢	口縁部	2902	E区Ⅲ層	ナデ	貝殻条痕→ナデ	褐色	褐色	白色透明粒、黑色透明 粒	鐵頭瓶
820	深鉢	口縁部	2905	E区Ⅲ層	ナデ	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒	鐵頭瓶
821	深鉢	口縁部	988	E区Ⅲ層	ナデ	ナデ	褐色	褐色	白色粒	鐵頭瓶
822	深鉢	口縁部	116	A区Ⅲ層	横走する山形押型文 部に刷み	ナデ→原体条痕	褐色	褐色	白色粒、黑色透明粒	
823	深鉢	口縁部	4882	B区Ⅰ層	横走する山形押型文	ナデ→原体条痕	褐色	褐色	赤褐色粒	外底ス付着
824	深鉢	口縁部	—	A区Ⅱ層	横走する山形押型文	ナデ→口縁部上端部のみ 横走する山形押型文	褐色	褐色	透明粒、砂粒①	
825	深鉢	口縁部	6473	A区Ⅰ層	横走する山形押型文	ナデ→口縁部上端部のみ 横走する山形押型文	浅黃褐色	褐色	黑色透明粒、白色粒 内・外底ス付着	
826	深鉢	口縁部	61	A区SAI	横走する山形押型文	ナデ→口縁部上端部のみ 横走する山形押型文	褐色	褐色	半透明粒、白色粒	
827	深鉢	口縁部	1578	B区	横走する山形押型文	ナデ→口縁部上端部のみ 横走する山形押型文	褐色	褐色	白色粒	
828	深鉢	口縁部	2136	A区Ⅲ層	横走する山形押型文	ナデ→口縁部上端部のみ 横走する山形押型文	褐色	褐色	白色粒、黑色透明粒	外底ス付着
829	深鉢	口縁部	9037	A区Ⅲ層	横走する山形押型文→口縫 部に山形押型文	ナデ→口縁部上端部のみ 横走する山形押型文	褐色	褐色	赤褐色粒	
830	深鉢	口縁部	—	—	ナデ	ケズリ→口縁部上端部の み横走する山形押型文	褐色	褐色	透明粒、砂粒③	
831	深鉢	口縫部	—	A区Ⅰ層	横走する山形押型文	ナデ→口縁部上端部のみ 横走する山形押型文	褐色	褐色	白色粒、透明粒	外底ス付着
832	深鉢	口縫部	1494	A区Ⅱ層	ナデ→横走する山形押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒、透明粒	外底ス付着
833	深鉢	口縫部	6427	B区Ⅰ層	ナデ→横走する山形押型文	ナデ	褐色	褐色	砂粒③	外底ス付着
834	深鉢	口縫部	3081	A区Ⅲ層	ナデ→横走する山形押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒、白色粒	
835	深鉢	口縫部	861	A区Ⅲ層	ナデ→横走する山形押型文 →焼成後孔	ナデ	褐色	褐色	黑色透明粒、白色粒	外底ス付着
836	深鉢	口縫部	—	A区SAI	横走する山形押型文→口縫 部に刷み	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒、白色透明粒	外底ス付着
837	深鉢	口縫部	76	A区SAI	横走する山形押型文を帶状 青文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒、白色粒	
838	深鉢	縫部	915	A区Ⅱ層	横走する山形押型文を帶状 青文	貝殻条痕	褐色	褐色	赤褐色粒、透明粒	外底ス付着

第3表 土器観察表(3)

番号	器種	部 位	取上げ番号	出土地点	調整・文様		色 調		胎 土	備考		
					外面		内面					
					外面	内面	外面	内面				
839	深鉢	側部	864	A区I層	横走する山形押型文を部状 強文	ナデ	褐色	褐色	透明粒、赤褐色粒			
840	深鉢	底部	1474	A区II層	横走する山形押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒	内面スリフ有		
841	深鉢	口縁部	549	A区II層	横走する楕円押型文	ナデ→口縁部上端のみ横 走する楕円押型文	褐色	暗褐色	白色透明粒、赤褐色粒、 透明粒			
842	深鉢	口縁部	1603	A区III層	横走する楕円押型文	貝殻条痕→口縁部上端のみ横 走する楕円押型文	褐色	暗褐色	褐色粒、透明粒			
843	深鉢	口縁部	1676	A区I層	横走する楕円押型文 口縫 部に横走する山形押型文	ナデ→口縁部上端のみ横 走する楕円押型文	浅黄褐色	浅黄褐色	白色粒、砂粒①			
844	深鉢	口縁部	—	—	横走する楕円押型文 口縫 部に横走する楕円押型文	ナデ	黑褐色	褐色	赤褐色粒、黑色透明粒	外表面スリフ有		
845	深鉢	口縫部	521	A区II層	横走する楕円押型文	ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	白色透明粒			
846	深鉢	口縁部	592	E区	ナデ→斜走する楕円押型文 柔面	ナデ→山形押型文→原体 柔面	褐色	褐色	白色透明粒、黑色透明 粒、白色粒、砂粒①			
847	深鉢	口縁部	80	A区N層 b	横走する楕円押型文	ナデ→原体回転による原 体柔面	褐色	褐色	黑色透明粒、白色透明 粒	外表面スリフ有		
848	深鉢	口縁部	13073	A区I層	横走する楕円押型文 口縫部に原体回転による原 体柔面	ナデ→原体回転による原 体柔面	褐色	褐色	赤褐色粒、白色粒			
849	深鉢	口縁部	S A 6	A区	横走する楕円押型文	ナデ→原体柔面	褐色	褐色	白色粒、赤褐色粒、砂 粒②	外表面スリフ有		
850	深鉢	口縁部	4638	A区III層	横走する楕円押型文	ナデ→原体柔面	褐色	褐色	黑色透明粒、白色透明 粒、砂粒②			
851	深鉢	口縁部	F5-4	B区I層	横走する楕円押型文	ナデ→原体柔面	褐色	褐色	赤褐色粒、黑色透明粒、 白色透明粒、砂粒①			
852	深鉢	口縁部	—	A区	横走する楕円押型文	ナデ→原体柔面	褐色	浅黄褐色	砂粒②	外表面スリフ有		
853	深鉢	口縁部	—	A区	横走する楕円押型文	ナデ→原体柔面	暗褐色	褐色	砂粒②	外表面スリフ有		
854	深鉢	口縁部	2502	A区I層	横走する楕円押型文 口縫 部に横走する楕円押型文	ナデ→口縁部上端のみ横 走する楕円押型文	暗褐色	暗褐色	黑色透明粒、白色粒、 砂粒②			
855	深鉢	口縁部	6537	B区	横走する楕円押型文 口縫 部に横走する楕円押型文	ナデ→口縁部上端のみ横 走する楕円押型文	褐色	褐色	赤褐色粒、白色透明粒	外表面スリフ有		
856	深鉢	口縁部	18697	B区III層	横走する楕円押型文 口縫 部に胡刺	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒、白色透明粒、 黑色透明粒			
857	深鉢	口縁部	4549	A区III層	横走する楕円押型文 口縫 部に胡刺	ナデ→口縁部上端のみ横 走する楕円押型文	褐色	褐色	赤褐色粒、白色透明粒			
858	深鉢	口縁部	814	A区III層	ナデ→横走する楕円押型文 口縫部に胡刺	ナデ→口縁部上端に横走 する山形押型文	褐色	褐色	赤褐色粒、砂粒②			
859	深鉢	口縁部	8638	A区I層	横走する楕円押型文 口縫 部に胡刺	ナデ→口縁部上端のみ横 走する楕円押型文	褐色	浅黄褐色	白色透明粒			
860	深鉢	口縫～底部	—	—	横走する楕円押型文	ナデ→口縫部上端のみ横 走する楕円押型文	褐色	褐色	白色透明粒、赤褐色粒、 砂粒②、小礫	外表面スリフ有		
861	深鉢	口縁部	148	A区	横走する楕円押型文	ナデ→口縫部上端のみ横 走する楕円押型文	褐色	褐色	黑色透明粒、白色粒、 金色透明粒、砂粒②	外表面スリフ有		
862	深鉢	口縁部	M5-4	C区III層	横走する楕円押型文	ナデ→口縫部上端のみ横 走する楕円押型文	褐色	褐色	赤褐色粒、砂粒②			
863	深鉢	口縫部	476	A区III層	横走する楕円押型文	ナデ→口縫部上端のみ横 走する楕円押型文	褐色	暗褐色	白色透明粒、赤褐色粒、 砂粒②、小礫			
864	深鉢	口縫部	649	A区III層	横走する楕円押型文	ナデ→口縫部上端のみ横 走する楕円押型文	褐色	褐色	赤褐色粒、透明粒、白 色透明粒	外表面スリフ有		
865	深鉢	口縫部	1556	A区III層	ナデ→横走する楕円押型文	ナデ→口縫部上端のみ横 走する楕円押型文	褐色	褐色	赤褐色粒、透明粒、白 色透明粒	外表面スリフ有		
866	深鉢	口縫部	4032	B区I層	ナデ→横走する楕円押型文	ナデ→口縫部上端のみ横 走する楕円押型文	褐色	褐色	赤褐色粒、白色粒			
867	深鉢	口縫部	784	A区II層	横走する楕円押型文	ナデ→口縫部上端のみ横 走する楕円押型文	褐色	褐色	赤褐色粒、透明粒			

第4表 土器観察表（4）

番号	器種	部 位	取上げ番号	出土土地点	調査・文様		色 調		胎 土	備考
					外面	内面	外面	内面		
868	深鉢	口縁部	SA 75-15	B区	ナデ→横走する楕円押型文 横走する楕円押型文	ナデ→口縁部上端部のみ 横走する楕円押型文	褐色	褐色	砂粒③	
869	深鉢	口縁部	3365.	B区	横走する楕円押型文	ナデ	黒褐色	褐色	赤褐色粒。白色粒	外面スズ付着
870	深鉢	口縁部	7036	B区Ⅰ層	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒。白色粒	外面スズ付着
871	深鉢	口縁部	787	A区Ⅱ層	横走する楕円押型文	ナデ→口縁部上端のみ横走する楕円押型文	褐色	褐色	赤褐色粒。白色粒	
872	深鉢	口縁部	1651	A区Ⅱ層	ナデ→横走する楕円押型文 横走する楕円押型文	ナデ→口縁部上端のみ横走する楕円押型文 ナデ→口縁部上端のみ横走する楕円押型文	浅褐色	淡褐色	黑色透明粒。白色粒。 砂粒①	外面スズ付着
873	深鉢	口縁部	14214	B区Ⅰ層	横走する楕円押型文	ナデ→口縁部上端のみ横走する楕円押型文	黒褐色	褐色	赤褐色粒。白色粒。透明粒	
874	深鉢	口縁部	—	A区Ⅰ～Ⅲ層	横走する楕円押型文	ナデ→口縁部上端のみ横走する楕円押型文	褐色	褐色	赤褐色粒。白色粒。透明粒	
875	深鉢	口縁部	117	A区Ⅱ層	横走する楕円押型文を帯状文	ナデ→口縁部上端部のみ横走する楕円押型文	黒褐色	褐色	赤褐色粒。白色粒。透明粒	
876	深鉢	胴部	—	B区	横走する楕円押型文→横走する楕円押型文	ナデ	浅褐色	淡褐色	黑色透明粒。白色粒、透明粒	
877	深鉢	口縁部	3205	B区	横走する楕円押型文	ナデ→口縁部上端にのみ横走する楕円押型文	浅褐色	淡褐色	赤褐色粒。白色粒。透明粒	外面スズ付着
878	深鉢	口縁部	15-3	C区Ⅰ層	ナデ	ナデ→口縁部上端にのみ横走する楕円押型文	褐色	黑灰色	金包粒。白色粒	
879	深鉢	口縁部	—	A区Ⅱ層	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒。白色粒	外面スズ付着
880	深鉢	口縁部	3713	A区Ⅲ層	ナデ→横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色粒。黑色透明粒。 小穂	
881	深鉢	口縁部	870	A区Ⅱ層	ナデ→横走する楕円押型文 口部に横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色透明粒。黑色透明粒	
882	深鉢	口縁部	—	A区	ナデ→横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色透明粒。赤褐色粒。 透明粒、砂粒②	
883	深鉢	口縁部	1703	A区Ⅱ層	ナデ→横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒。透明粒。黑色透明粒	外面スズ付着
884	深鉢	口縁部	3912	A区Ⅲ層	ナデ→横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色粒。透明粒。砂粒③	外面スズ付着
885	深鉢	口縁部	94	A区Ⅱ層	横走する楕円押型文 補修穴あり	ナデ	褐色	褐色	白色粒。赤褐色粒。透明粒。小穂	
886	深鉢	口縁部	1123	A区Ⅱ層	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒。白色粒小穂	
887	深鉢	胴部	6-1	B区表土	横走する楕円押型文→補修穴	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒・黑色透明粒	埴輪底
888	深鉢	胴部	SA4 NE K	A区	ナデ→横走する楕円押型文 金帯状施文	目殺条痕→ナデ	褐色	黑褐色	赤褐色粒	
889	深鉢	胴部	4000	A区Ⅲ層	横走する楕円押型文を帯状文	ナデ	褐色	褐色	白色透明粒。透明粒	
890	深鉢	胴部	15-2	C区Ⅰ層	ナデ→横走する楕円押型文 剥落のため不明	剥落のため不明	暗灰黄色	暗灰黄色	白色粒。白色粒。砂粒①	
891	深鉢	胴部	1232	A区Ⅰ層	横走する楕円押型文を帯状文	ナデ	黒褐色	褐色	赤褐色粒・黑色半透明粒	外面スズ付着
892	深鉢	胴部	14217	B区Ⅰ層	横走する楕円押型文を帯状文	ナデ	褐色	黑褐色	白色粒。赤褐色粒	
893	深鉢	胴部	344	A区Ⅱ層	幾何学的に楕円押型文を帯状施文	ナデ	褐色	褐色	白色粒。赤褐色粒。透明粒	
894	深鉢	胴部	5595	B区Ⅰ層	横走する楕円押型文を帯状文	ヘラナデ	褐色	褐色	赤褐色粒。透明粒	内面に付着
895	深鉢	胴部	1592	A区Ⅱ層	横走する楕円押型文を帯状文	ナデ	褐色	明褐色	黑色透明粒。赤褐色粒	外面スズ付着
896	深鉢	胴部	7519	B区Ⅱ層	横走する楕円押型文	ケズリ	褐色	褐色	黑色透明粒	

第5表 土器観察表(5)

番号	器種	部 種	取上げ番号	出土地点	調整・文様		色 調	胎 土	備考
					外面	内面			
897	深鉢	側部	7648	B区Ⅲ層	観走する楕円押型文	ケズリ	褐色 黒褐色	白色粒、白色透明粒	外面ス付着
898	深鉢	側部	2291 + 1100	A区Ⅲ層	不定方向の楕円押型文	ナデ→不定方向の楕円押型文	褐色 褐色	白色粒、砂粒①	
899	深鉢	側部	5596 + 6734	B区Ⅰ層	観走する楕円押型文	ナデ	褐色 褐色	赤褐色粒、白色粒	外面ス付着
900	深鉢	側部	3077	A区Ⅲ層	観走する楕円押型文	ナデ	褐色 褐色	赤褐色粒、小穢	
901	深鉢	側部	383 + 1638	SA 6	観走する楕円押型文→斜走する楕円押型文	ナデ	褐色 黒褐色	赤褐色粒、透明粒、白 色透明粒	内外面にスス 付着
902	深鉢	側部	4029	A区Ⅳ層	観走する楕円押型文	貝殻条痕→ナデ	褐色 黒褐色	赤褐色粒、透明粒、白 色透明粒	
903	深鉢	側部	—	A区Ⅰ ~ Ⅲ層	斜走する楕円押型文	ナデ	褐色 褐色	赤褐色粒、小穢	外面ス付着
904	深鉢	側部	—	—	観走する楕円押型文	ナデ	褐色 褐色	黑色透明粒、赤褐色粒	
905	深鉢	側部	1287	A区Ⅱ層	斜走する粗大な楕円押型文	ナデ	黒褐色 褐色	白色透明粒、砂粒②	
906	深鉢	底部附近	421	A区Ⅲ層	観走する楕円押型文	ナデ	褐色 浅黄色	白色透明粒、砂粒③	
907	深鉢	底部附近	15-3	C区Ⅰ層	斜走する楕円押型文	ケズリ	黒褐色 黒褐色	金色粒、白色粒	
908	深鉢	底部附近	956	A区Ⅲ層	観走する楕円押型文	ナデ	褐色 浅黄色	白色粒、黑色透明粒	
909	深鉢	底部附近	1542	A区Ⅲ層	斜走する楕円押型文	ナデ	褐色 褐灰色	白色粒、金色粒	
910	深鉢	底部附近	1490	A区Ⅲ層	観走する楕円押型文→ナデ る事による滑状施文	ナデ	褐色 褐色	赤褐色粒、黑色透明粒	
911	深鉢	底部附近	1528	A区Ⅲ層	観走する楕円押型文	ナデ	褐色 褐色	赤褐色粒、砂粒②	
912	深鉢	底部	8814	B区Ⅱ層	観走する楕円押型文	ナデ	褐色 褐色	黑色透明粒	
913	深鉢	底部附近	1277 + 170	A区Ⅲ層	観走する楕円押型文	ナデ	褐色 褐色	黑色透明粒	
914	深鉢	底部	307	A区Ⅲ層	観走する楕円押型文	ナデ	褐色 褐色	白色粒、砂粒②	
915	深鉢	底部	1342	A区Ⅲ層	傾化のため不明	ナデ	浅黄色 浅黄色	白色粒	
916	深鉢	底部	4448	A区Ⅲ層	観走する楕円押型文	ナデ	褐色 褐色	砂粒②	
917	深鉢	底部	1481	A区Ⅱ層	観走する楕円押型文	ナデ	褐色 褐色	黑色透明粒	
918	深鉢	底部	—	A区Ⅲ層	観走する楕円押型文	ナデ	浅黄色 浅黄色	黑色透明粒、小穢	
919	深鉢	底部	589	A区Ⅲ層	観走する楕円押型文	ナデ	褐色 褐色	赤褐色粒、黑色透明粒、 白色透明粒	
920	深鉢	側部	1124	A区Ⅲ層	ナデ→観走する楕円押型文 →観走する山形押型文	ナデ	褐色 褐色	赤褐色粒、黑色透明粒	
921	深鉢	側部	1319	A区Ⅲ層	ナデ→観走する楕円押型文 →観走する山形押型文	ナデ	褐色 褐色	赤褐色粒、黑色透明粒	外面ス付着
922	深鉢	側部	3570	A区Ⅰ層	斜走する楕円押型文→斜走 する山形押型文	ナデ	浅黄色 褐色	白色透明粒	
923	深鉢	側部	6860	A区Ⅰ層	斜走する楕円押型文→貝殻 条痕文	ナデ	褐色 褐色	白色粒	
924	深鉢	側部	1525	A区Ⅲ層	淡褐色→斜方向の楕円押型 文	ナデ	褐色 褐色	白色粒	
925	深鉢	側部	2689	A区Ⅰ層	観走する格子目押型文	ナデ	褐色 褐色	白色粒	
926	深鉢	側部	968	A区Ⅱ層	斜走する格子目押型文	ナデ	褐色 褐色	小穢	
927	深鉢	口縁部	1445	A区Ⅱ層	ナデ→枝回転文	ナデ	褐色 褐色	黑色透明粒、白色粒	
928	深鉢	側部	66	B区Ⅰ層	枝回転文	ナデ	明褐色 褐色	赤褐色粒、白色粒	

第6表 土器観察表(6)

番号	器種	部 位	取上げ番号	出土地点	調整・文様		色 調		胎 土	備考		
					外面		内面					
					外面	内面	外面	内面				
929	深鉢	胴部	F7	E区Ⅰ層	柱回転文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒。白色粒			
932	深鉢	口縁部	802	A区Ⅱ層	斜走する縦文	ナデ→横走する縦文	褐色	褐色	赤褐色粒。白色粒			
930	深鉢	口縁部	1444	A区Ⅱ層	斜走する縦文	ナデ→口縁部上端部のみ 横走する縦文	褐色	褐色	黑色透明粒。白色粒	外面ス付着		
933	深鉢	胴部	29	SA2	斜走する縦文	ナデ	暗褐色	暗褐色	黑色透明粒。			
934	深鉢	胴部	5180	B区Ⅰ層	斜走する縦文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒			
935	深鉢	口縁部	1328	A区Ⅱ層	斜走する縦文	ナデ	暗褐色	暗褐色	白色粒。透明粒			
936	深鉢	口縁部	4179	A区Ⅱ層	ナデ→縦走する網目状燃焼文	ナデ→口縁部上端のみに 横走する網目状燃焼文	褐色	褐色	黑色透明粒。白色粒			
937	深鉢	口縁部	1868	A区	ナデ→縦走する網目状燃焼文	ナデ→口縁部上端のみに 横走する網目状燃焼文	褐色	褐色	赤褐色粒。黑色透明粒			
938	深鉢	口縁部	12050	A区Ⅰ層	変形押垂文。口縫部に刻み	ケズリ→変形押垂文	暗褐色	暗褐色	赤褐色粒。白色透明粒			
939	深鉢	口縁部	1235	A区Ⅱ層	ナデ→迷走貝殻腹縫刺突文	ナデ→口縁部上端のみ貝 殻腹縫刺突文	褐色灰	褐色灰	黑色透明粒	外面ス付着		
940	深鉢	胴部	1469	A区Ⅲ層	ナデ→迷走貝殻腹縫刺突文	ナデ	褐色灰	褐色灰	黑色透明粒。	外面ス付着		
941	深鉢	口縁部	182	E区縫縫 置窓	縦走する貝殻腹縫刺突文→ 網目状燃焼文	ミガキ・ケズリ	暗褐色	暗褐色	黑色透明粒。白色透明 粒			
942	深鉢	口縁部	2800	E区Ⅲ層	縦走する貝殻腹縫刺突文→ 網目状燃焼文	ミガキ・ケズリ	暗褐色	暗褐色	黑色透明粒。白色透明 粒	外面ス付着		
943	深鉢	口縁部	84	E区Ⅲ層	縦走する貝殻腹縫刺突文	ミガキ・ケズリ	暗褐色	暗褐色	黑色透明粒。白色透明 粒			
944	深鉢	口縁部	15-2	C区	縦走する貝殻腹縫刺突文→ 横形 突文	ケズリ	暗褐色	暗褐色	白色粒。砂粒①			
948	深鉢	胴部	1095	A区Ⅲ層	斜走する貝殻条痕→縦走す る貝殻条痕	ナデ	暗褐色	暗褐色	白色粒			
949	深鉢	胴部	336	A区Ⅲ層	斜走する貝殻条痕→縦走す る貝殻条痕	ナデ	暗褐色	暗褐色	白色粒			
946	深鉢	口縁部	2 T 表土	E区	斜走する貝殻条痕→引文→ 横形突文。口縫部に刻み	ナデ	暗褐色	暗褐色	黑色半透明粒			
945	深鉢	口縁部	816	E区Ⅲ層	斜走する貝殻条痕→引文→ 網目状燃焼文	ナデ	暗褐色	暗褐色	白色粒。砂粒①			
947	深鉢	胴部	PS-4	C区Ⅰ層	迷走貝殻腹縫刺突文	ケズリ	暗褐色	暗褐色	黑色透明粒。砂粒①			
950	深鉢	底部	295 1層	E区Ⅲ層	貝殻条痕→縦走する横刻	ケズリ	褐色	褐色	黑色透明粒。砂粒①			
951	深鉢	底部	Q9 1層	C区	三方キ一腰割	ケズリ	褐色	褐色	黑色透明粒。白色粒。 砂粒①			
952	深鉢	底部	2652	E区Ⅲ層	ナデ	ケズリ	褐色	褐色	黑色透明粒。白色透明 粒。砂粒①			
953	深鉢	口縁部	表土	C区	口縫による横彫状条痕文	ミガキ	褐色	褐色	金色粒。白色粒			
954	深鉢	口縁部	81 + 326	E区Ⅲ層	口縫による横彫状条痕文	ミガキ	褐色	褐色	金色粒。白色粒			
955	深鉢	胴部	2566	E区Ⅲ層	口縫による横彫状条痕文	ミガキ	褐色	褐色	金色粒。白色粒			
956	深鉢	胴部	M8 及土	C区	斜方向の貝殻条痕文	ナデ	褐色	褐色	白色透明粒。砂粒①			
957	深鉢	胴部	1375	A区Ⅱ層	貝殻条痕文	ナデ	褐色	浅黃褐色	黑色透明粒。透明粒			
958	深鉢	口縁部	80-115	E区Ⅲ層	ミガキ→迷走貝殻腹縫刺突 文	ミガキ	淺黃褐色	淺黃褐色	小礫。黑色透明粒。	外面ス付着		
959	深鉢	胴部	SA4 NE区	A区	縦走する貝殻条痕文→横走する貝 殻条痕文	ナデ?	褐色化のため不明	淺黃褐色	淺黃褐色	黑色透明粒		
960	深鉢	口縁部	—	—	貝殻条痕文	ミガキ	褐色灰	淺黃褐色	黑色透明粒	外面ス付着		
961	深鉢	口縁部	—	—	ナデ? →口縫部に迷走刺突 文	ナデ?	褐色灰	淺黃褐色	黑色透明粒	外面ス付着		

第7表 土器観察表(7)

番号	器種	部 積	取上げ番号	出土地点	調査・文様		色 調		胎 土	備考
					外面	内面	外面	内面		
962	深鉢	底部	5892	三区Ⅲ層	ミガキ→貝殻磨縁押引文 底面に压痕	ミガキ	明黄褐色	明黄褐色	白色粒、透明粒	
963	深鉢	底部	2666	Ⅲ層	ミガキ→貝殻磨縁押引文	ミガキ	明黄褐色	明黄褐色	白色粒、透明粒	
964	深鉢	底部	156	三区Ⅲ層	ミガキ→貝殻磨縁押引文	ミガキ	明黄褐色	明黄褐色	白色粒、透明粒	
965	深鉢	口縁部	Q9～Q10 表上	三区	矢羽状の沈線文→2列単位 の構点文	ミガキ	褐色	褐色	赤褐色粒	
966	深鉢	口縁部	178	A区Ⅲ層	ナデ→幾何学的な沈線文→ 油点文	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	白色透明粒	
968	深鉢	底部	357	三区Ⅲ層	ナデ→網目状撲糸文→沈線	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	白色粒、黑色透明粒	
969	深鉢	側部	948	三区	ナデ→網目状撲糸文→2本 +△の沈線	ナデ	褐色	褐灰色	透明粒	
967	深鉢	口縁部	—	—	ミガキ→沈線文 口縁部に 羽状の葉痕文	ミガキ	明黄褐色	明黄褐色	白色透明粒	

円押型文を施した胴部である。内面はナデ調整が施されている。

SP56

1159は外面に縱走する山形押型文を施した胴部である。内面はナデ調整が施されている。

SP57

160は外面に斜走する楕円押型文を施した胴部である。内面はナデ調整が施されている。

SP61

1161・1162は外面に斜走する楕円押型文を施した胴部である。内面はナデ調整が施されている。1163は内外面にナデ調整を施した底部である。底部形態は平底を呈する。

SP63

1164は外面に縱走する楕円押型文を施した胴部である。内面はナデ調整が施されている。

SP64

1165は外面に縱走する山形押型文を施した底部である。底面が欠損しているため、具体的な底部形態は不明瞭であるが、おそらく丸底の可能性が高い。内面にはナデ調整痕が観察できる。

SP65

1166は外面に縱走する楕円押型文を施した胴部である。内面はナデ調整が施されている。

1167は外面に縱走する楕円押型文を施した胴部である。内面はナデ調整が施されている。

SP66

1168は外面に縱走する楕円押型文を施した胴部である。内面はナデ調整が施されている。

SP68

1169・1170・1171は外面に縱走する楕円押型文を施した胴部である。内面はナデ調整が施されている。

SP69

1172は外面に縱走する山形押型文を施した胴部である。内面はナデ調整が施されている。

1173・1174・1175は外面に縱走する楕円押型文を施した胴部である。内面はナデ調整が施されている。

SP71 + SP72

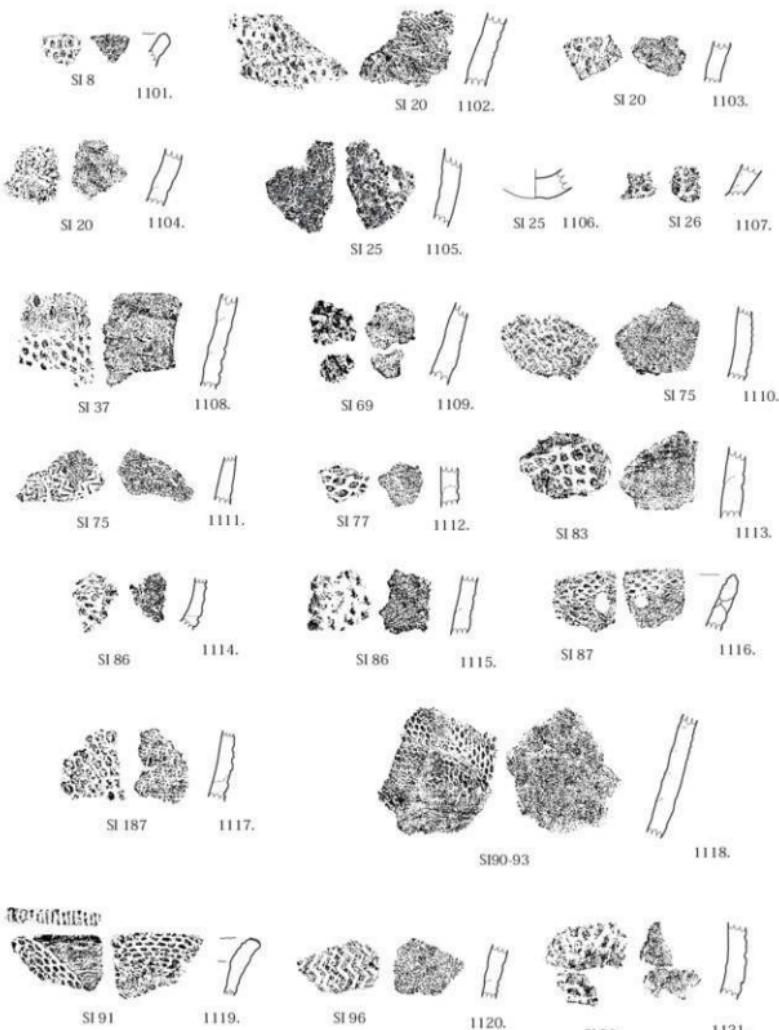
1176は底部であり、その形態は丸底を呈する。外面には縱走する山形押型文を施し、内面はナデ調整を行っている。

SP72

1177は口唇部を尖らせた、外反する口縁部である。外面には縱走する楕円押型文を施し、内面にはナデ調整を施す。1178は横走する楕円押型文を施した胴部である。内面にはナデ調整を施す。

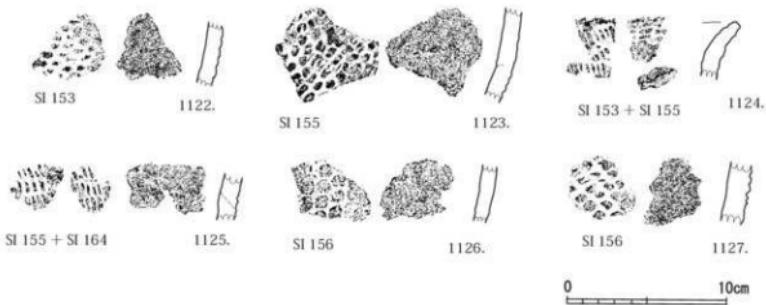
SP73

1179には外面に縱走する楕円押型文を帯状施文した胴部である。内面にはナデ調整が施される。



0 10cm

第129図 繩文土器実測図(13) 集石遺構出土土器① (S=1/3)



第130図 繩文土器実測図(14) 集石遺構出土土器② (S = 1/3)

B区

SP122

1180はやや外反する口縁部である。口唇部が欠損しているため、具体的な口縁部の形状・施文は不明である。外面には斜走する山形押型文を施し、内面にはナデ調整を施している。1181は外面に斜走する山形押型文を施した胴部である。内面にはナデ調整を施している。1182は外面に縦走する山形押型文、1183・1184は外面に縦走する楕円押型文を施した胴部である。内面にはナデ調整が施されている。1183は他の土器に比べ、押型文の粒径が小さい。

SP123

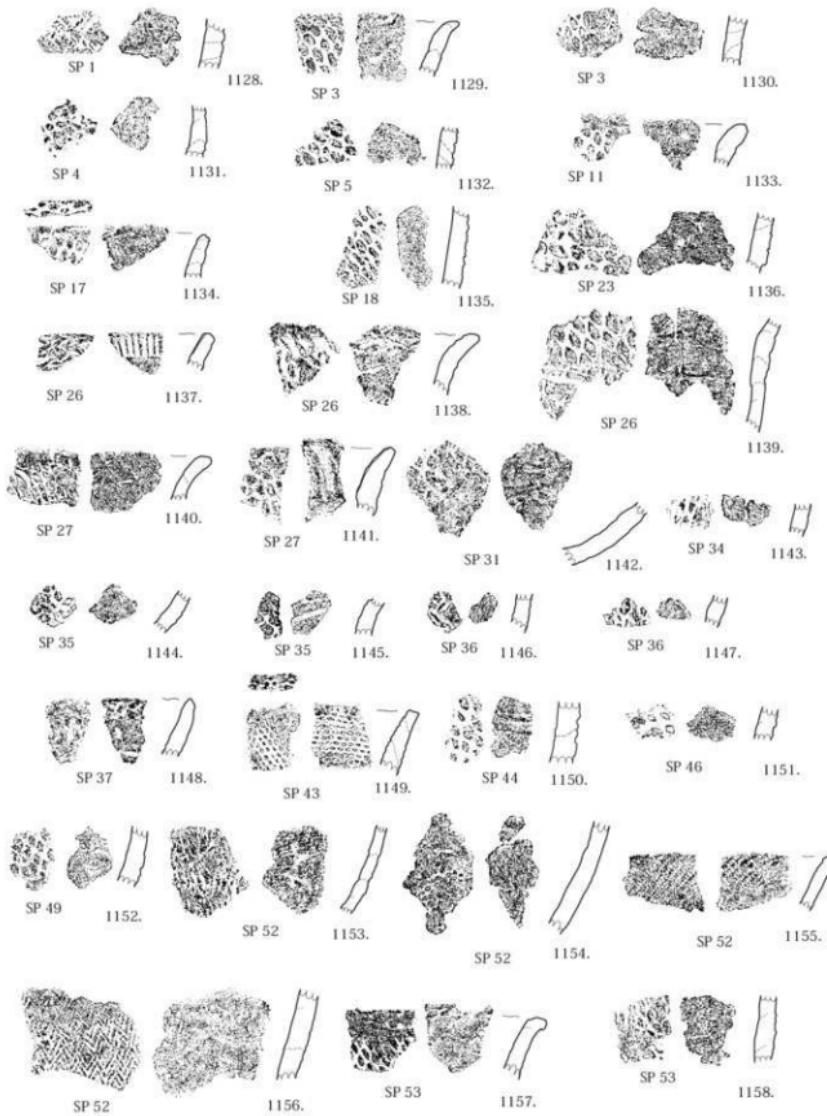
1185は外面に撚糸文を施した胴部である。内面にはナデ調整を施すが、調整が不充分のため、輪積痕が明瞭に観察できる。

SP174

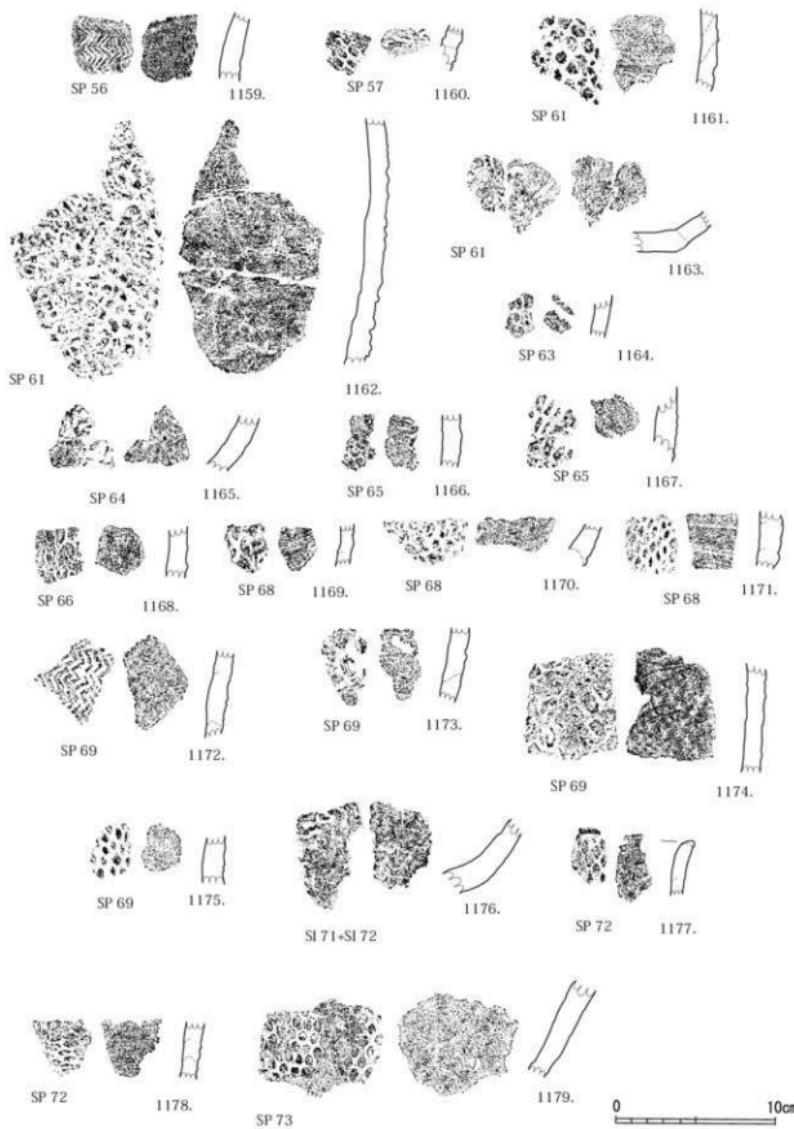
1186は外面に縦走する楕円押型文を施した胴部である。内面にはナデ調整を施す。

SP175

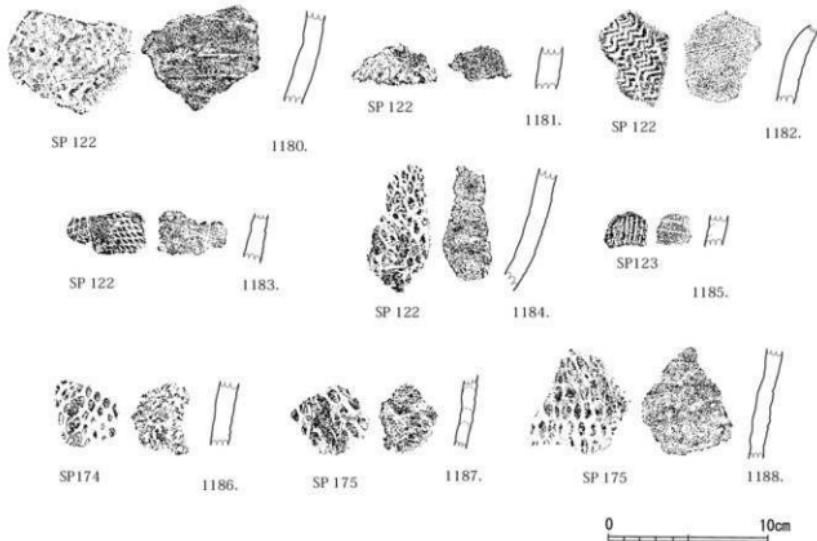
1187・1188は外面に縦走する楕円押型文を施した胴部である。内面にはナデ調整を施す。



第131図 檻文土器実測図(15) 炊穴出土土器① (S=1/3)



第132図 檻文土器実測図(16) 炊穴出土土器② (S = 1 / 3)



第133図 縄文土器実測図(17) かげ穴出土器③ (S = 1/3)

第8表 土器観察表(8)

集石遺構出土土器観察表

実測番号	器種	部位	取上げ番号	出土地点	調査・様様		色調		胎土	備考
					外面	内面	外面	内面		
1101深鉢	口縁部	SI 8-6	A区	縦走する楕円押型文 口内 縦に楕円押型文	ナデ		に赤い黄褐色に赤い黄褐色	白色粒、砂粒①	外曲スス付着	
1102深鉢	側部	SI 20-10	A区	縦走する楕円押型文	ナデ		褐色	褐色	赤褐色粒	
1103深鉢	側部	SI 20-5	A区	縦走する楕円押型文	ナデ		褐色	褐色	白色粒、透明粒	外曲スス付着
1104深鉢	側部	SI 20-6	A区	段回転文	ナデ		褐色	褐色	黒色透明粒、透明粒	
1105深鉢	側部	SI 25-7	A区	段回転文	ナデ		浅黄褐色	浅黄褐色	白色粒	
1106深鉢	底部	SI 25-	A区	縦走する楕円押型文	ナデ		浅黄褐色	浅黄褐色	赤褐色粒、白色粒	
1107深鉢	底部付近	SI 25-11	A区	縦走する楕円押型文	ナデ		褐色	褐色	赤褐色粒、白色粒	
1108深鉢	側部	SI 37-2	A区	縦走する楕円押型文	ナデ		褐色	褐色	赤褐色粒	
1109深鉢	側部	SI 69-3	A区	縦走する楕円押型文	ナデ		褐色	褐色	赤褐色粒	
1110深鉢	側部	SI 75-P2	A区	縦走する山形押型文	ナデ		浅黄褐色	浅黄褐色	白色粒	

第9表 土器観察表（9）

実測 番号	器種	部 位	取土番号	出土 地点	調整・文様		色調		胎 土	備考
					外 面	内 面	外 面	内 面		
1111深鉢	側部	SI75	A区	幾何学的な山形押型文	ナデ	褐色	褐色	透明粒		
1112深鉢	側部	SI 77 - I	A区	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色粒		
1113深鉢	側部	SI 83 - I	A区	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒、白色粒 黑色透明粒		
1114深鉢	側部	SI 86 - I	A区	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	黑色透明粒、透明 粒	内面スス付着	
1115深鉢	側部	SI 86 - P3	A区	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	墨褐色	赤褐色粒、白色粒 内面スス付着		
1116深鉢	口縁部	SI 87 - P4	A区	横走する楕円押型文 植物 示あり	ナデ→横走する楕円押型文	暗褐色	褐色	黑色透明粒	外 面スス付着	
1117深鉢	側部	SI 87 - 3	A区	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒、小繊		
1118深鉢	側部	SI 90 + 93 - 28	A区	不定方向の楕円押型文→△ ガキ	ナデ	褐色	墨褐色	白色透明粒、白色 粒	内面スス付着	
1119深鉢	口縁部	SI 91	A区	ナデ→横走する楕円押型文をハル ト状施文、口縁部に鉛み	ケズリ→横走する楕円押型 文	褐色	褐色	白色透明粒、黑色 透明粒		
1120深鉢	側部	SI 96 - P2	A区	横走する山形押型文	ナデ	褐色	褐色	黑色透明粒、半透 明粒		
1121深鉢	側部	SI 96 - P1 + P 3	A区	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色粒		
1122深鉢	側部	SI 153	B区	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	黑色透明粒、赤褐色 粒、白色透明粒	内外面スス付着	
1123深鉢	側部	SI 155	B区	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色粒		
1124深鉢	口縁部	SI 153 + SI 155	B区	横走する楕円押型文	ナデ→横走する楕円押型文	褐色	褐色	赤褐色粒、白色粒		
1125深鉢	側部	SI 155 - 9 - SI 164 - 1	B区	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒		
1126深鉢	側部	SI 156	B区	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	黑色透明粒、透明 粒		
1127深鉢	側部	SI 156	B区	横走する楕円押型文	ナデ	黄褐色	黄褐色	白色粒		
1128深鉢	側部	SP 1	A区	横走する山形押型文	ナデ	褐色	褐色	白色粒、赤褐色粒		
1129深鉢	口縁部	SP 3 - 3, 4	A区	横走する楕円押型文	ナデ	灰褐色	灰褐色	白色粒、砂粒②		
1130深鉢	側部	SP 3 - 3 + 4 5	A区	横走する楕円押型文	ナデ	暗褐色	褐色	赤褐色粒、白色粒		
1131深鉢	側部	SP 4	A区	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色、小繊		
1132深鉢	側部	SP 5	A区	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	小繊		
1133深鉢	口縁部	SP 11	A区	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色粒、白色透明 粒		
1134深鉢	口縁部	SP 17 理土	A区	横走する楕円押型文 口縁 部に楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色粒、砂粒③	外 面スス付着	
1135深鉢	側部	SP 18 - 3 理土	A区	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色粒		
1136深鉢	側部	SP 23 - 1	A区	横走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒、白色粒 内面スス付着		
1137深鉢	口縁部	SP 26 - 15	A区	横走する山形押型文	ナデ棒状文	灰褐色	灰褐色	白色粒		

第10表 土器観察表(10)

実測番号	器種	部位	取上げ番号	出土地点	調査・文様		色調		胎土	備考
					外面	内面	外面	内面		
1138深鉢	口縁部	SP 26	A区	鋸走する山形押型文	ナデ→横走する楕円押型文	褐色	褐色	赤褐色粒、黒色透明粒		
1139深鉢	縁～胴部	SP 26-2・3	A区	鋸走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色透明粒、赤褐色粒	外曲スス付着	
1140深鉢	口縁部	SP 27 1・2	A区	鋸走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒、白色透明粒	外曲スス付着	
1141深鉢	口縁部	SP 27 5	A区	鋸走する楕円押型文	ナデ→2段の原体条痕	褐色	褐色	赤褐色粒	外曲スス付着	
1142深鉢	底部	SP 31	A区	鋸走する楕円押型文	不定方向のナデ	褐色	褐色	白色粒、透明粒	外曲スス付着	
1143深鉢	胴部	SP 34 1	A区	鋸走する山形押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒、小穢		
1144深鉢	底部付近	SP 35 1	A区	鋸走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒		
1145深鉢	口縁部	SP 35 3	A区	ナデ→鋸走する楕円押型文	ナデ→原体条痕	褐色	褐色	赤褐色粒、白色粒	外曲スス付着	
1146深鉢	底部付近	SP 36	A区	鋸走する山形押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒		
1147深鉢	底部付近	SP 36 3	A区	鋸走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒		
1148深鉢	口縁部	SP 37 2	A区	鋸走する楕円押型文	ナデ→口縁部上端部のみ横走する楕円押型文	褐色	褐色	白色透明粒		
1149深鉢	口縁部	SP 43	A区	ナデ→斜走する楕円押型文 口縁部に楕円押型文	ナデ→口縁部上端部のみ横走する楕円押型文	褐色	褐色	白色粒、白色透明粒		
1150深鉢	胴部	SP 44 1・4	A区	鋸走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	砂粒②	外曲スス付着	
1151深鉢	胴部	SP 46	A区	鋸走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色粒、小穢		
1152深鉢	胴部	SP 4 9	A区	鋸走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色粒、小穢	外曲スス付着	
1153深鉢	底部付近	SP 52	A区	鋸走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色透明粒	外曲スス付着	
1154深鉢	底部付近	SP 52	A区	鋸走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	砂粒②		
1155深鉢	口縁部	SP 52	A区	鋸走する繩文	ナデ→口縁部上端部のみ繩文	黒褐色	黒褐色	透明粒、黒色透明粒		
1156深鉢	胴部	SP 52	A区	横走する山形押型文	ナデ	褐色	褐色	透明粒、赤褐色粒		
1157深鉢	口縁部	SP 53	A区	ナデ→斜走する楕円押型文 走する楕円押型文	ナデ→口縁部上端部のみ横走する楕円押型文	褐色	褐色	白色粒、小穢		
1158深鉢	胴部	SP 53	A区	鋸走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒		
1159深鉢	胴部	SP 56	A区	鋸走する山形押型文	ナデ	淡黄褐色	浅黄褐色	白色透明粒		
1160深鉢	胴部	SP 57 4	A区	鋸走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	砂粒②		
1161深鉢	胴部	SP 61 2	A区	鋸走する楕円押型文	ナデ	褐色	黑色	黑色透明粒、小穢、 赤褐色粒	内曲スス付着	
1162深鉢	胴部	SP 61	A区	鋸走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒	繩痕痕	
1163深鉢	底部	SP 61 2	A区	ナデ→鋸走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	砂粒②		
1164深鉢	胴部	SP 63	A区	鋸走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒、白色粒	外曲スス付着	
1165深鉢	底部	SP 6 4	A区	鋸走する山形押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒、砂粒②	内曲付着痕あり	

第11表 土器観察表(11)

実測 番号	器種	部 位	取上げ番号	出土 地点	調査・文様		色調		胎 土	備考
					外面	内面	外面	内面		
1166深鉢	胴部	SP 6.5	A区	縦走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色透明粒、砂粒①		
1167深鉢	胴部	SP 6.5	A区	縦走する楕円押型文	ナデ	暗褐色	暗褐色	白色粉、白色透明粒、赤褐色粒	外曲スス付着	
1168深鉢	胴部	SP 66	A区	縦走する楕円押型文	ナデ	暗褐色	褐色	白色透明粒、透明粒		
1169深鉢	胴部	SP 68.2	A区	縦走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒、白色粒		
1170深鉢	胴部	SP 68.3	A区	縦走する楕円押型文	ナデ	淡黄褐色	浅黄褐色	白色透明粒	外曲スス付着	
1171深鉢	胴部	SP 68.3	A区	縦走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色透明粒、透明粒		
1172深鉢	胴部	SP 69	A区	縦走する山形押型文	ナデ	褐色	褐色	白色粉、白色透明粒		
1173深鉢	胴部	SP 69	A区	縦走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色透明粒		
1174深鉢	胴部	SP 69	A区	縦走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	褐色		
1175深鉢	胴部	SP 69	A区	縦走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色粒		
1176深鉢	底部	SP 71・72	A区	縦走する山形押型文	ナデ	褐色	褐色	黑色透明粒、白色透明粒		
1177深鉢	口縁部	SP 72	A区	縦走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒、黑色透明粒	外曲スス付着	
1178深鉢	胴部	SP 72	A区	縦走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒、砂粒②	外曲スス付着	
1179深鉢	胴部	SP 73.1・2	A区	縦走する楕円押型文をナデによる帶状施文	ナデ	褐色	暗褐色	赤褐色粒、黑色透明粒	内曲スス付着	
1180深鉢	口縁部	SP122	B区	縦走する山形押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒		
1181深鉢	胴部	SP122	B区	縦走する山形押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒	外曲スス付着	
1182深鉢	胴部	SP122	B区	縦走する山形押型文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒	外曲スス付着	
1183深鉢	胴部	SP122	B区	縦走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色粒、赤褐色粒		
1184深鉢	胴部	SP122	B区	縦走する楕円押型文	ナデ	褐色	暗褐色	赤褐色粒、白色粒		
1185深鉢	胴部	SP123	B区	擦系文	ナデ	褐色	褐色	赤褐色粒、黑色透明粒		
1186深鉢	胴部	SP174	B区	縦走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	白色透明粒		
1187深鉢	胴部	SP175	B区	縦走する楕円押型文	ナデ	褐色	褐色	砂粒①	外曲スス付着	
1188深鉢	胴部	SP175	B区	縦走する楕円押型文	ナデ	暗褐色	暗褐色	赤褐色粒	内外曲スス付着	

第14節 自然科学分析の成果

野首第2遺跡では、放射性炭素年代測定法、植物珪酸体分析、リン酸分析について、古環境研究所に分析を依頼した。ここでは第一分冊に報告する後期旧石器時代および縄文時代早期に関わる放射性炭素年代測定の分析結果を示すとともに、その意味付けないし評価をおこなう。なお資料が帰属する地区や分析結果の詳細については第二分冊にまとめて掲載する予定である。

放射性炭素年代測定の結果

各地区から採取した計18点のサンプルについて、古環境研究所を通じて米国ペータ社に分析を依頼した。A区では縄文時代早期の炉穴から4点、集石遺構から8点、後期旧石器時代の礫群から6点（うち2点は礫群に伴うピット）。計18点の資料の年代測定をおこなった。その結果、炉穴と集石遺構から採取された資料はいずれも8000年B.P.前半に数値が取まり、ほぼ押型文期に限られる出土遺物の傾向と整合的な結果といえそうである。炉穴と集石遺構が相互に切り合い関係を持つ事例も確認されたことから、両者が同一集団によって構築され利用された可能性を補強する材料となった。

また、A.T直上から検出された27号礫群の 22370 ± 120 年B.P.、MB3上部から検出された37号礫群の 28010 ± 220 年B.P.という結果も、従来示してきた年代観をほぼ追証するもの

と評価できる。

問題は、27号礫群と同じくA.T直上において確認した19-2号礫群と、28-3号礫群から得られたサンプルの分析結果である。調査段階において当該礫群が層位的にA.T直上およびVI層上部から検出されたことは疑いなく、構成礫の諸属性の検討からもそのことは裏付けられる。したがって、上記の分析結果の説明としては、縄文早期（押型文）に由来する炭化物が該期遺構の構築などの作用にしたがって下方に拡散したものと測定した可能性が考えられる。19-2号礫群の2点のサンプルは、構成礫の分布範囲に確認されたピットから採取したものであるが、このピットの埋土は基本層序第V層（MB1）に類似しており、当初は礫群に伴う後期旧石器時代段階の施設を構成するピットである可能性などを考慮していた。だが、さきに示した分析結果からは、これらのピットが縄文時代早期の所産である可能性が強く示唆される結果となった。これは、とりもなおさず縄文時代早期のピットが本来の掘り込み面（=集石遺構検出面）では検出できなかったことを示しており、当該期の遺構の実相を考えるうえで、重要な問題を喚起するものといえる。これに関連して、縄文時代早期の環状ピット群も、仮に礫を伴わなければ検出がきわめて困難な遺構であることも想起されよう。

第IV章 成果と課題

第1節 後期旧石器時代石器群の編年的整理

(1) 時期細分について

本遺跡では、都合6枚に亘る後期旧石器時代の遺物集中層準が確認された。これらは主に砾群の出土レベルと母岩資料認定を試みた遺物の分布様相から分離し得たものであるが、より詳細に各遺物の技術・形態的特徴およびその出土状況を検討するならば、さらに複数の資料群に区分することができる。既に前章においては、第VI期石器群とほぼ同一層準から出土した細石刃石器群を、I群の基部加工ナイフ形石器が主体となる石器群から時期的に分離すべきとの考えに沿った記述をおこない、第VII期を設定した。

第VII期の設定にも異論が予想される一方で、第VI期以前についても、細分の余地が残される可能性もある。宮崎県域における後期旧石器時代石器群の編年の概観を示したものとして、2005年の宮崎県旧石器文化談話会による10段階編年案(文献24)がある(以下、「10段階編年」と略す)。以下では、10段階編年に照らしつつ、各時期の内容について若干の検討をおこなう。

(2) 各石器群の特徴と細分の可能性

第Ⅰ期 本遺跡第Ⅰ期と時期的に並行すると考えられる石器群は九州島全域においても少ないと。本遺跡においては剥片や石核類など、少量の資料が確認された。ナイフ形石器も1点確認されたが、上層からの落ち込みの可能性も残し、他遺跡の出土事例との比較検討が必要とされよう。様相は不明瞭であるが、10段階編年の第1段階に比定されよう。

第Ⅱ期 二側縁加工ナイフ形石器と台形石器が代表的なトゥールとなる。ナイフ形石器については第Ⅲ期に含めた資料との共通性が高く、混在の可能性も排除できない。ただし、第Ⅲ期にみられるような小形の資料は確認されない。ナイフ形石器の素材は必ずしも石刃に限らないが、他に出土した縦長剥片や石刃の存在を考慮すると、石刃生産が技術的レパートリーにあった可能性は高い。台

形石器の素材も縦長剥片の折断により獲得される。なお、石核とした資料には斧形石器の整形に類似した剥離痕を有するものもあるが(第17図36)、断定はできない。本石器群は10段階編年の第2段階に比定される。

第Ⅲ期 石刃・縦長剥片素材の二側縁加工ナイフ形石器(Ⅱ群a類)と不定形剥片素材の一側縁加工ナイフ形石器が主体となる。後者には背面に素材剥片のポジ面を配する資料が含まれる。

今回は未掲載であるが、接合資料にも縦長剥片を志向したと思しき資料があり(接合資料No.65-1)、石刃生産は行使された剥片剥離技術のなかで重要な位置を占めていたものと思われる。また、一般的な石刃の生産に伴って、接合資料6-1にみられるような、断面が分厚な小形石刃の生産もおこなわれていたことは興味深い。剥片素材石核(石核Ⅰb類)の小口を作業面として小形石刃を生産する技術は、本遺跡第VI期の基部加工ナイフ形石器の素材生産にも共通する技術であるが、奈良県法華寺南遺跡にみられるように(文献25)、AT下位黒色帶上部の段階にも一定程度存在した可能性が高い。

他に特筆すべき事項としてB区VII層上部から出土した研磨痕有る石片(第28図101)の存在が挙げられる。第二分冊に掲載予定の縄文後・晩期の包含層や遺構からは700点を越える磨製石斧が出土しているが、これらに使用された石材とこの研磨痕有る石片のそれとは石質が異なる。候補としては斧形石器(局部磨製石斧)の刃部付近の破片である可能性が指摘したが、本遺跡の資料は断片的にすぎる。全国的にもAT下位黒色帶上部の斧形石器の出土事例は兵庫県七日市遺跡(文献26)など少数を数えるのみである。今後の類例増加を期待したい。

出土層位やナイフ形石器の特徴を考慮して、本石器群は10段階編年の第3段階に比定できる。

第Ⅳ期 二側縁加工ナイフ形石器が主要なトゥールとなるが、第Ⅲ期の二側縁加工ナイフ形石器がⅡ群a類であったのに対し、本時期ではⅡ群b類が優勢となる。これらは狸谷形ナイフ形石器とも呼ばれる形態のナイフ形石器であるが、従来は剥

片尖頭器に伴出する組成が通有と捉えられてきた経緯がある（たとえば文献27など）。だが、最近では本県牧内第1遺跡（文献28）、鹿児島県箕作遺跡（文献29）など、ナイフ形石器II群b類が単純組成で剥片尖頭器を伴わずに出土する事例が数例確認されている。本遺跡の事例もこれに該当し、A T上位の全層位を通じて剥片尖頭器は1点も出土していない。

剥片尖頭器とナイフ形石器II b類が使用空間を違えて同時期に製作された可能性は依然として残されるが、時期を違える可能性も今後は考慮すべきであろう。10段階編年においては狸谷型ナイフ形石器（ナイフ形石器II b類）は剥片尖頭器とともに第5段階に位置付けられている。それに先立つ第4段階は本県春日地区遺跡第2地点（文献30）のようにA T下位の第3段階にも類似したナイフ形石器II a類が主体となる石器群と規定されている（文献24）。

第4段階に比定されるナイフ形石器II群a類と本遺跡第IV期のナイフ形石器II群b類とは技術的特徴が大きく異なる。前者は素材を縦位に用い、後者は横位または斜位に用いる。また、素材の形状、剥片剥離技術自体、両者は対照的な在り方を示す。したがって、これら二つのナイフ形石器石器群が同時に存在したとは考えにくい。藤木聰氏が指摘するように、10段階編年の第3段階と第4段階の石器群の間にも厳密には差異があるが（文献31）、いずれもII群a類ということでは共通しており、編年的には10段階編年の第4段階石器群（ナイフ形石器II群a類）から本遺跡第IV期石器群（ナイフ形石器II群b類）への変遷が妥当な推定と言えよう。

このように考えると、本遺跡第IV期石器群のうちナイフ形石器II b類はいわば10段階編年の第4段階と第5段階の間、もしくは第5段階の前半といった位置付けが適当となる。

いま一つ考慮せねばならないのは、本遺跡第IV期石器群が細分される可能性である。第35図118・126などのナイフ形石器は他のII群b類とは特徴を異にする。これらが10段階編年第4段階石器群に属する可能性は充分に考えられよう。

出土層位は現象的にいえば“ A T直上 ”に違いないが、そこには時間幅を見積もある必要がある。

第V期 本時期の石器群には多様な顔付きの石器群が含まれる。ナイフ形石器I群c類・III群a類・V群、角錐状石器、尖頭器などである。とはいえ、技術的特徴の共通性を捉えるならば、大きくは二つのグループに収斂する。一つはナイフ形石器III群a類であり、いわゆる瀬戸内系石器群である。もう一つが鋸歯状プランディングまたは基部裏面平坦剥離を特徴とするグループでナイフ形石器I群c類・V群、角錐状石器、尖頭器が含まれる。

本遺跡における瀬戸内系石器群は豊富な母岩・接合資料に恵まれた。ただし、ナイフ形石器の技術形態的様相には変異も認められる。多数の同一母岩資料を有するナイフ形石器は小さなサイズやイレギュラーな形態のものが目立つ。一方、単独もしくは少數の同一母岩資料のみ有するナイフ形石器は比較的大きなサイズで、丁寧な仕上げのものが含まれる。前者には母岩No.43・63などが該当し、後者には第47図154・155などの資料が該当する。これらは時期的に分離される可能性もあるが、製作と使用のそれぞれに場に対応する可能性も指摘できる。母岩No.63では同一母岩資料数に占めるトゥールの比率は非常に小さいが、剥片の多くは有底剥片である。これら有底剥片の中には微細剥離痕を有するものも含まれるが、多くはこの場でおこなわれた剥片剥離の残滓と推定される。

鋸歯状プランティングと基部裏面平坦剥離を特徴とする第二のグループの在り方を如実に示すのが、第183号礫群に伴うナイフ形石器の在り方である。この礫群には3点のナイフ形石器が伴うが、形態は3点それぞれに異なりつつも、基部裏面平坦剥離を入れる点では共通している（第49図183～185）。素材形態を異にしながらも、こうした技術的特徴を共有するのが第二のグループの最大の特徴である。すなわち、剥片剥離の段階では齊一性に乏しい剥片を獲得するが、鋸歯状プランティングまたは基部裏面平坦剥離を駆使して機能を同じくする尖頭形石器を製作するのである。尖頭器と分類したグループもこの加工の度合

いが高い資料と評価できる。技術形態的な記述ではナイフ形石器、角錐状石器、尖頭器といった便宜的分類を必要とするが、機能形態的には等価の尖頭形石器のグループと一括することができる。

本時期の石器群を 10 段階編年に当てはめるに第一のグループである瀬戸内系石器群と第二のグループでは大形の角錐状石器が第 5 段階に該当する。しかしながら、本遺跡には剥片尖頭器が組成しない。このように考えると本遺跡の状況からは、10 段階編年の第 5 段階石器群の細分可能性を示すことができる。また、層位的には第 6 段階石器群との関係を考える必要もある。第一のグループと第二のグループが共存するのか否かについても今後の課題としたい。

第 VI 期 本時期の石器群は九州地域において終末期と評価されてきたナイフ形石器（I 群）と台形石器を含む。

ナイフ形石器 I 群は A 区を中心に分布がみられ、また E 区ではトゥールの検出例は少ないものの、当該期に比定しうる豊富な母岩・接合資料が確認された。特に、母岩 No. 42 は 82 点からなる接合資料を持ちながらも、同一母岩のナイフ形石器を組成しない点で興味深い。この母岩は一抱えほどもあるサイズで、当該期の原石の搬入形態の一端を示す。

一方、台形石器は石刃あるいはそれに類する縦長剥片を素材とするグループと、その他の不定形剥片を素材とするグループとに分かれる。ここで問題となるのはほぼ同一の層準から出土しているナイフ形石器 I 群と台形石器の編年的評価である。当初、ナイフ形石器 I 群が注目された大分県域の遺跡では、百花台型台形石器をはじめとした台形石器類の出土はあまり確認されていない。A T 上位段階の台形石器類が希薄な様相は当該地域の分布論的特徴と言える可能性がある。

一方、本遺跡では、A・C 区においてナイフ形石器 I 群と百花台型に類する形態も含む台形石器類が分布を重ねて確認され、また細石刃も同一層位から分布を重ねて確認された。こうした様相は鹿児島県域においても看取されており、厳密な意味で共存したとは断定できないまでも、両者に

極めて近い編年的位置付けを与えられることを示唆する。両者の編年関係、あるいは両者が共存したと仮定した場合の構造論的評価は今後の課題である。細石刃石器群の評価については小林輕石が安定的に堆積する地域における現段階の層位的知見から、本報告では分離できるものと考える。10 段階編年に照らすならば、ナイフ形石器 I 群が第 7 段階に相当し、これに台形石器を加えた様相が本遺跡の第 VI 期石器群と評価できる。

第 VII 期 本遺跡からは、A・C 区を中心に細石刃石器群関連遺物が検出された。ただし、A 区では細石刃核の検出ではなく、細石刃の散発的な分布を確認したにとどまる。一方、C 区東南～E 区にかけては細石刃・細石刃核・その他の石核・剥片・碎片類がまとまって出土した。そこで、ここでは主に C 区からの出土資料を中心に、諸側面からの検討をくわえ、そのうえで、A 区の資料との関連にも言及し、本遺跡の細石刃石器群の様相を把握したい。

まず、確認された細石刃核の形態には、既往の型式名を当てはめるならば、①野岳・休場型（茶園型・位牌塔型を含む）を主体として、他に②船野型、畦原型が認められる。①と②では、利用石材の傾向も顕著に異なり、前者が、肉眼では桑ノ木津留産と推定される黒曜石を、後者が珪質頁岩岩、砂岩などの近傍地産と思しき諸石材を主に用いる。ただし、例外として①には砂岩製の野岳・休場型を含み、型式論的に注目される。また、②には黄白色に風化する流紋岩 I 群 a 類を含む。この石材は、五ヶ瀬川流域の後期旧石器時代遺跡に通有な石材と類似し、原産地が県北以北である可能性を残す。

10 段階編年では①が概ね第 8 段階、②が概ね第 9 段階に比定できる。ただし、層位的な裏付けは取れず、両者が共存した可能性は排除できない。

（3）小結

試みに 10 段階編年との対応をはかった場合、整合する時期と、そうでない時期とがある。本遺跡の知見から、宮崎県内の旧石器時代編年網の整備に寄与できる部分も少なくない。今後、他遺跡の石器群との比較が望まれる。

第2節 繩文時代早期土器群の編年的整理

(1) 本節の目的

前章において縄文時代早期の土器について報告を行ったが、本節においては、これらの土器群を先行土器編年と照らし合わせる形で時間的な評価を行う。それに合わせて、各類型の土器出土量分布に基づく、空間的把握を行いたい。これらの作業を合わせて行う事により、各型式の主体的な分布域を把握する事で、より詳細な遺跡内の空間利用に迫っていきたい。それに統いて、各類型の肉眼観察に基づく、器製作・使用痕観察の所見を記載する。

(2) 土器群の時間的評価及びその他の所見 I群 爪形文

E区において、1個体が確認されている(第113図)。県内において、この爪形文土器の類例としては、川南町霧島遺跡(文献32)が知られるのみである。霧島遺跡・野首第2遺跡とも出土層位が不明確なため、層位から時間軸を類推する事は困難であると言わざるを得ない。ただし、器形・胎土がII群と類似する点には注意が必要であろう。

いずれにせよ、現段階でこの類型の時間軸上の位置付けとしては、草創期後半～早期初頭を想定しておきたい。

II群 無文土器

無文土器はE区を中心にC区において僅かに出土している(第135図)。一方で押型文土器が主体的に出土しているA区においては、無文土器の出土はほとんど見られない。この無文土器群は型式設定の指標となりうる文様こそ施されていないが、口縁部の形態から分類を試みた事は前章のとおりである。

それでは、時間的な位置付け、土器製作・使用について触れておきたい。

時間的位置付け

1類、2類共に口縁部の形態が異なる他は、ほぼ同じ調整が施されている。両者の分布は混在しており、類型毎の主体的な分布域は確認できなかった。また全て第III層からの出土であり、同一

層内における、類型毎の相対的上下関係も認められない。

県内における無文土器の類例としては新富町音明寺第1遺跡(文献33)、川南町霧島遺跡があげられる。音明寺第1遺跡からは、尖底から胴部が中膨れし、内湾あるいは直口する口縁部へと続く資料が出土している。口縁部が内湾するものは、内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。直口する口縁部に関しては内外面ナデ調整が施されている。

霧島遺跡からは、尖底で砲弾形の器形を持つ資料が出土している。器面はナデ調整が施されており、丁寧に仕上げられている。

これら2つの遺跡において出土した資料に関しては、器形や胎土(色調、纖維混入、焼成が堅緻)、も野首第2遺跡出土資料と類似している事から、この3遺跡の土器群は時間的に並行するものと考えてよかろう。

また、無文土器の良好な出土例を県外に求めるならば、大分県陽弓遺跡(文献34)があげられる。

陽弓遺跡からは、尖底から胴部が中膨れし、内湾あるいは直口する口縁部へと続く資料がまとまって出土している。器面調整はナデ調整が主体であり、野首第2遺跡II群と非常に類似している。

それでは、これら無文土器はどのように時間的位置付けがなされるのであろうか。陽弓遺跡で出土した一群は、綿貫俊一氏により陽弓式として設定され、川原田式の直前の型式として位置付けされている(文献35・36)。野首第2遺跡から出土している大部分の資料が、この型式学的な特徴を備える事から、陽弓式に該当するものと考えられる。

また、単一遺跡内から、無文土器と押型文土器が混在している事例としては、大分県利光遺跡がある(文献37)。この遺跡も、野首第2遺跡の出土事例と同じく、押型文土器と無文土器の分布域は異なっている。これらの事例は、押型文土器と無文土器が併存しているのではなく、時間的に異なる所産であるという事の傍証になるであろう。

製作・使用

類の土器は、縄文土器の作製としてはオーソ

ドックスともいべき、粘土の輪積みにより器形を形成し、その後、各種の調整により輪積み痕を消す作業を行っている。最終調整痕としてはナデが多用されているが、その前段階で条痕調整を行うものも存在している。口唇部を尖らせているものは、指による粘土のつまみ上げによる。器壁が薄手のものは、明確にケズリにより器壁を調整した痕跡は観察できなかった。また、押型文などと異なり、指押さえによる圧痕が多く見て取れる事にも特徴があろう。

肉眼による胎土の観察による限りにおいては、ベースとなる粘土は、同じ色調・鉱物が含まれており、ほぼ同一のもので作製を行ったと考えてよからう。また胎土には纖維痕が多く観察される。

III群 押型文土器

本遺跡において最も多く出土している土器群であるが、出土量に対しそのヴァリエーションには一定のまとまりが認められる。ここでは、野首第2遺跡出土の押型文土器に関して、時間的な位置付け、土器製作・使用について触れていきたい。

時間的位置付け

時間的位置付けを述べる前に、簡単ではあるが、押型文の施文毎、文様毎の出土比率について触れてみたい。

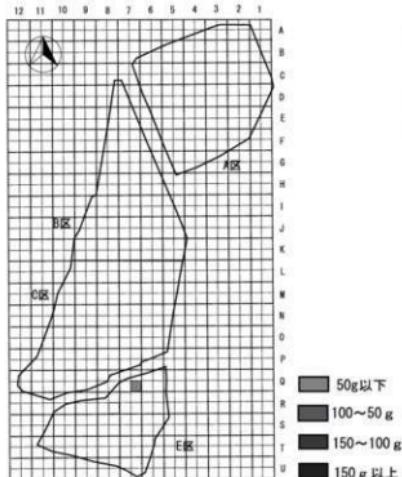
まず、施文方向であるが、約9割を縦・斜方向施文が占めており、横施文の土器はごく限られた量しか出土していない（第136図）。

次に、文様の内訳であるが、楕円押型文が約7割を占めている。山形押型文は全体の2割の出土量であり、以下、縄文、撚糸文、格子目押型文が出土している（第137図）。

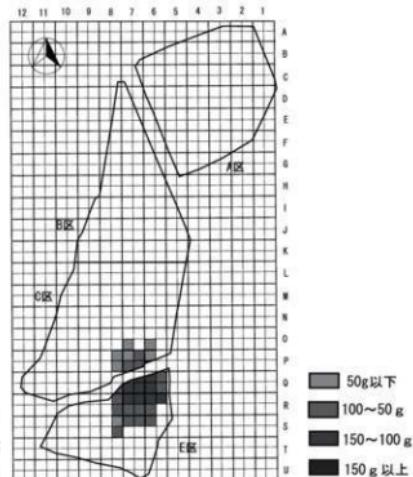
施文方向と文様の親和性についてであるが、横施文、縦・斜方向施文とも楕円押型文が卓越している。しかしながら、横方向施文の中には、格子目押型文や縄文、撚糸文は存在していない（第138・139図）。

横方向施文の出土分布域はA区内において散漫に見られるのみである（第140図）。縦・斜方向施文ではA区を中心にE区まで分布が確認されている（第141図）。

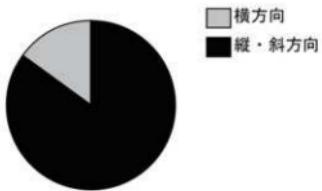
それでは、押型文土器の時間的位置付けについて触れていきたい。



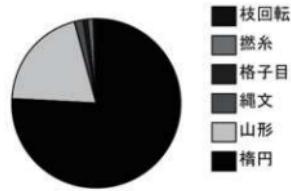
第134図 I群出土重量分布図



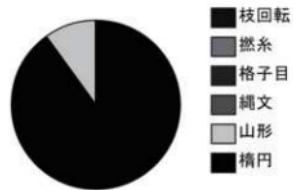
第135図 II群出土重量分布図



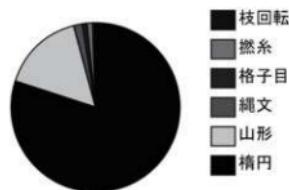
第136図 押型文施文方向別出土量



第137図 文様出土量



第138図 横施文文様別出土量



第139図 縦・斜方向文様別出土量

押型文土器は、東九州において精力的に型式学的研究が行われ、「東九州編年」と呼ばれる、土器編年が確立している（文献38～41）。九州島内における他の地域においても、この編年を緩用して押型文土器の位置付けを行っているのが実情であり、本報告においても「東九州編年」に沿った形で、出土資料の時間的位置付けについて検討したい。しかしながら、岩永哲夫氏が指摘したように、本県の押型文土器は、東九州とは異なる地域色が見て取れる（文献42・43）、野首第2遺跡においてもそれは当てはまる。これを踏まえ、東九州編年との対比と合わせて、これら資料の検討も行う。

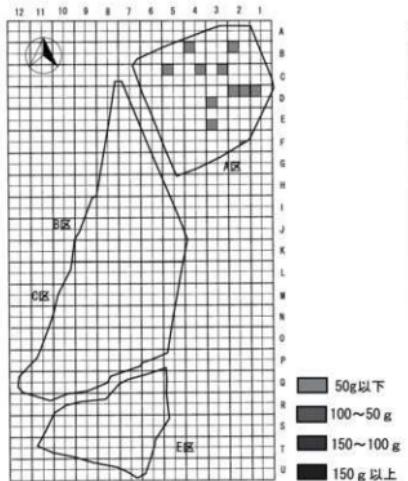
東九州編年において、古手に位置付けられている押型文土器が、横走するベルト状施文を施す川原田式である。野首第2遺跡においても、ベルト状施文が施された資料が出土している。第117図875・876、第119図887～895がそれに該当するが、これら全てがいわゆる川原田式の枠内に収まるとは考え難い。これには、①施文方向が横ではなく、縦あるいは幾何学的な事、②押型文

の粒径が、4類などと等しい事があげられる。その中でも887～890に関しては川原田式の範疇に入ると考えて良かろう。

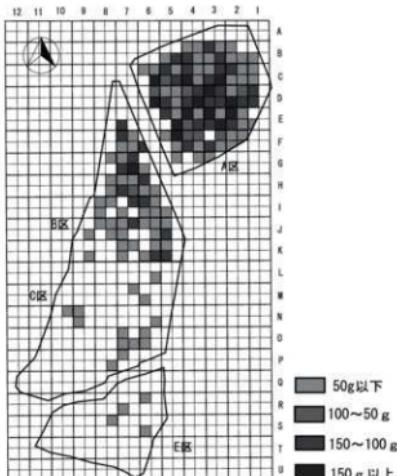
本遺跡から出土している、横走する押型文が施された資料はごく少数に限られる。841のような粒径が小さく、内外面に施文されている資料は、大分県稻荷山遺跡における出土が知られており、841をはじめとする1D類は、この並行期に位置付けられよう。822に関しても、外面横方向施文、内面に原体条痕のみという文様構成から、時間的にはこれに並行するか、若干後続するという枠内に収まるものと考えられる。

統いて縦走施文である。本遺跡で出土している押型文土器の中で、最も出土が多いものが、この外面に縦走施文を施したものであり、文様も山形文・構円文・格子目文と多彩になっている。押型文の粒径も他のものに対して大きいようである。

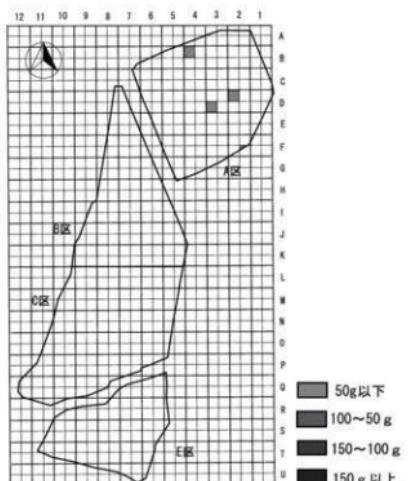
これらの資料の口縁部を観察すると内面には①原体条痕を施すもの、②横方向の押型文を施すものと、③文様等施さないものの3種に分けることができる。



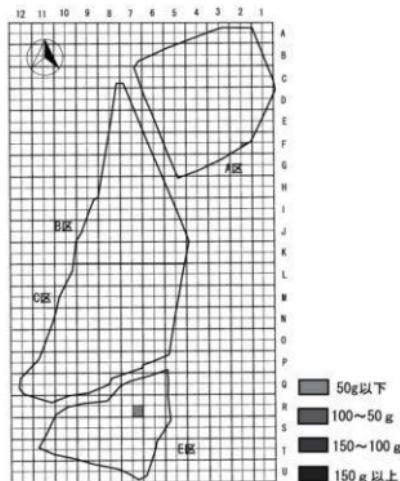
第140図 横施文出土重量分布図



第141図 縦・斜施出土重量分布図



第142図 1D類出土重量分布図



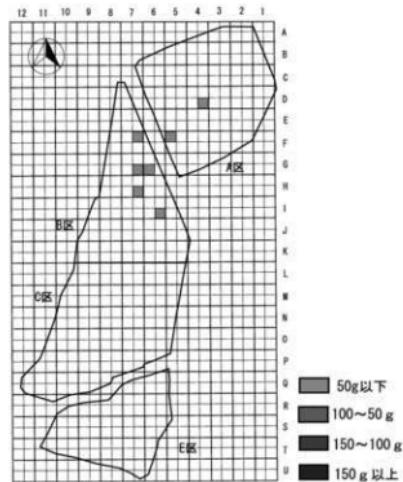
第143図 4A類・4B類出土重量分布図

押型文土器の型式変化を考慮すると、II類aのような横方向施文の押型文土器に後続するのは、縱方向に押型文を施し、内面に原体条痕を施す下菅生B式とされている。それに後続するのが、田村式である。この考えに立つと、本遺跡においては4A類の846などが、器形の全体像が不明瞭ながらも下菅生B式の並行期に該当するであろう。ここで問題となるのが、4D類、4E類の位置付けである。これらの土器群は、宮崎県域や熊本県域において主体的に出土する傾向にあり、大部分県域を中心とする東九州域においては、むしろ少数派であるといえる。宮崎県域同様に、これらの土器が多く出土する熊本県域において、これらの押型文土器は沈目式とされ、下菅生B式が分布域を拡大する中で本来の型式情報を拡散させた型式と理解されている（文献44）。この前提に立つと、4E類は、内面に押型文を施すという情報のみを維持するタイプであり、4D類の847・848は、内面に原体条痕のみを施したタイプであると言える。しかしながら、「条痕を引く」という情報は喪失しており、柵状文を施す事により擬似的

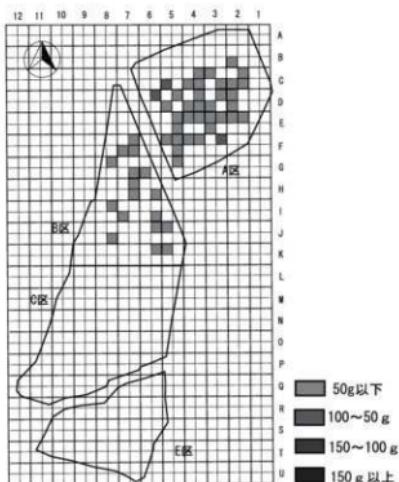
に原体条痕を表現していると言えよう。

田村式並行期と考えられるのが4C類などである。4C類の849や850に代表される一群は田村式に類似するが、内面の原体条痕（沈線）を2重に施すという点において、田村式とは一線を画している。ここで考えられる型式は、瀬戸内を代表とする西日本において主体的に分布している高山寺式である。田村式と高山寺式は型式内容の親和性が指摘されており、時期的にこの枠内に収まるものと考えられる。

III群2としたものは、手向山式に相当する。この時期と考えられるものに網目状燃糸文を施した口縁部が出土している。網目状燃糸文は初期の塞ノ神式に主体的に施される文様である。塞ノ神式の型式学的研究の進展とは対照的に、網目状燃糸文の起源自体は不明瞭であった。今回、野首第2遺跡において出土した資料は、器形や施文の特徴から判断して、田村式～手向山式並行期に位置付けられると考えられるが、ここに塞ノ神式の文様の系譜を求める事が可能かもしれない。ただし、網目状燃糸文自体の出自や、塞ノ神式に先行する



第144図 4C類出土重量分布図



第145図 4D類出土重量分布図

平柄式に網目状撚糸文を施す資料が存在しない、という問題は残されたままである。

以上、野首第2遺跡における押型文土器の時間的位置付けに関して考察を行った。これをまとめたものが第12表である。

野首第2遺跡においては、押型文土器編年における初期の型式から出土しているが、下菅生B式並行期までは、その出土量はごく少数に限られている（第142・143図）。田村式並行期になると、土器の出土量が増加すると共に、胎土のヴァリエーションも爆発的に増加するようである（第146図）。この出土量増加という現象には、ごく限られた一時期に増加したのか、もしくは、土器使用の集積の結果としての増加なのか、慎重に検討する余地が残されている。特に、同一土器型式内において土器胎土が複数存在するという事象は、在地で作られた土器と、外部から持ち込まれた土器の存在、あるいは粘土採取地点の変更による土器胎土の変化が考えられよう。下菅生B式・田村式本来の型式情報を保持した資料は少なく、在地的な様相が色濃くなる。換言すれば、客体的

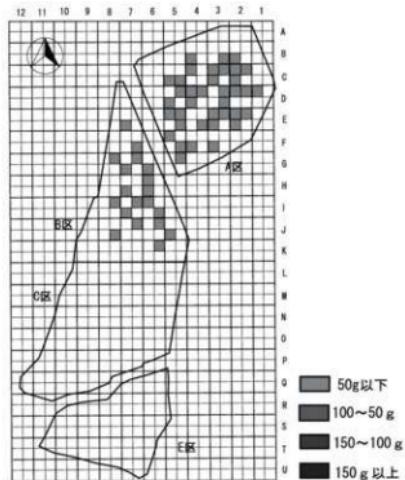
に流入してきた押型文という文様要素が主体的に受け入れられるようになった時期といえよう。

また田村式並行期になると、瀬戸内地域の土器が出土しており、押型文化圏内の広域交流が窺える。しかしながら、分布域は限られている事から、あくまで客体的な要素に留まっていると考えられる（第143図）。野首第2遺跡においては、前段階の土器群を引き続き継承して使用していた可能性がある。

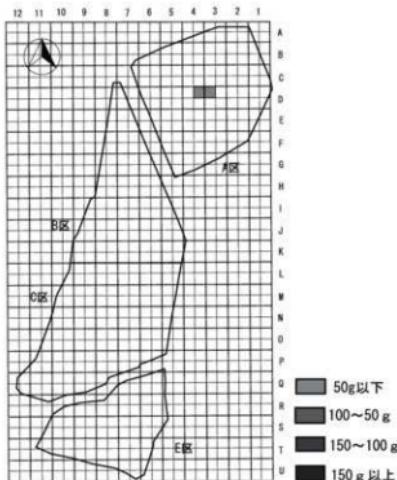
製作・使用

先にも触れているが、野首第2遺跡からは、数千点にのぼる押型文土器が出土している。ここでは、資料の観察に基づき、土器の製作・使用に関する所見を述べたい。

結論から述べると、野首第2遺跡からは押型文土器を作成していたと類推される遺構は検出されていない。そのためこの土器群が在地で作られたものか、集団の移動に伴い移入されたものか判然としない。ただし、土器の胎土には一定のまとまりがあり、さらに各型式との親和性も看取される。



第146図 4E類出土重量分布図



第147図 III群2出土重量分布図

それでは、土器の製作から記述していきたい。器形を形成する際には輪積みが行われており、粘土の幅は同一個体内においては、ほぼ等間隔になっている。ただし、口縁部上端にごく小さい幅の粘土帯を積み上げる事により、口唇部を形成している資料が散見された。

器形を形成した後に、輪積痕を消すべく調整作業が行われている。最終調整痕には内外面ともに指ナデが多用され、その後に施文が行われる。基本的に外面→内面→口唇部の順に施文を行っているようである。ここで注目すべきは、施文部位と施文方向の関係である。口縁部～胸部上半にかけては縱走する押型文を施しているものの、底部付近に近づくにつれ施文方向が斜走～不定方向になる資料が認められる。この脈略に立つと、野首第2遺跡出土資料においては、施文方向の縱走・斜走の違いは、あくまでも施文部位の違いに起因する可能性が考えられる。

次に、土器の2次焼成痕観察に基づく、土器使用の実態についての所見を述べたい。

今回の発掘調査においては、一固体ながら、ほぼ完形の資料に恵まれた。この土器についての詳

細は前章に詳しいが、この中で注意すべき点は胴部下半～底部にかけてスス等の付着が全く観察されない点にある。このススの付着部位に着目して他の底部を観察した場合、例え内面に炭化物が付着している場合であっても、外面にはススが付着していない事に気付く。

この事は、尖底・丸底の土器を煮沸器として使用する場合は、胴部過半を埋設、あるいは土を盛り上げ、底部を安定させた上で、火をくべ、その結果として、土器の口縁部～胸部にススがついたものと想定される。今回の調査では、土器の使用の実態を示す遺構を検出することが出来ず、早期の尖底及び丸底土器の使用実態を考える上での課題を残す結果となつたが、遺跡内で、土器を埋納した遺構や、焼土のみで埋込み等が見られないものの有無など注意が必要であろう。特に、深鉢が埋設されている場合、祭祀などと結びつけられる事例が多いため、埋設状況や土器の詳細な観察に基づく評価が求められる。

また野首第2遺跡から出土した押型文土器の底部は、ほぼ丸底のみに限られている。この点についても触れてみたい。野首第2遺跡が主体的に押

第12表 押型文土器の時間的位置づけ

東九州編年	野首第2遺跡出土土器	中九州編年
陽弓式	II群	↓
↓	↓	川原田式
川原田式	III群	↓
↓	↓	稻荷山式
稻荷山式	III群 1D類	↓
↓	↓	早水台式
早水台式		↓
↓		下菅生B式
下菅生B式	III群	↓
↓	↓	田村式
田村式	III群 4C類、4D類、4E類	沈目式
↓	↓	↓
ヤトコロ式		ヤトコロ式
↓		↓
手向山式	III群 2	手向山式

型文土器を使用していた時期に、県南部では岩永氏が指摘したとおり、平底の押型文土器が卓越する傾向にある。この地域による器形の差は何に起因するものだろうか。

先述したとおり、押型文土器以前にはⅡ群に代表される無文土器が展開していたと考えられる。これらは、音明寺第1遺跡出土例のように尖底深鉢である。一方の宮崎県域南部においては押型文流入以前に、平底の貝殻文円筒形土器が主体的に分布している。この器形はバケツ形であり、この器形に押型文という文様要素を補完する事により、円筒形押型文土器が成立したものと考えられる。つまり、押型文流入以前の主体的な使用土器に押型文という文様要素を補完した存在が、宮崎県域の押型文流入期であると考えられる。ここで注意しなければならない事は、押型文を補完した土器型式は、その地域における土器使用の実態を反映しているという事である。換言すれば、この現象をもとに、異なる系統に属する型式間の並行関係を論じる事はかなわない可能性がある。

在地の器形に新たな文様を補完した背景には、実際の土器使用方法が、自立できない尖底・丸底と、自立できる平底では大きく異なる点があげられる。つまり、押型文流入以前の土器型式（というよりは器形）と、その土器使用実態の差違が、器形選択の重要な要素となったものと考えられる。丸底の資料が型式を下るにつれ増加の一途をたどるという事は、押型文の西日本における齊一化に飲み込まれたという事であり、南九州独自の型式群の終焉を意味していよう。

IV群 貝殻文系・条痕文系土器

IV群には、南九州において主体的に出土する、円筒形貝殻文土器や、中九州条痕文土器ともよばれる一群を内包している。これらの型式学的な細分及び、時間的な位置付けは以下の通りである。

時間的位置付け

1類、2類は加栗山式に該当する。各調査区において散見されるが、主体的な出土は見られない（第148図）。おそらくは移入品であろう。また角筒土器や、レモン形とも称される、円筒形と角筒形の折衷土器は出土していない。1類は貝殻腹

縁刺突文を多用し、2類は貝殻腹縁押引文を多用しているが、加栗山式に後続する吉田式段階においては、貝殻押引文が主体的な文様要素となる事から、1類→2類という時間差が考えられる。この土器型式に並行すると考えられているのが、早水台式並行期や中原式であるが、当遺跡においては、その並行関係を検証する事はかなわなかった。

野首第2遺跡出土例については、例えば鹿児島県域や宮崎県南部地域における出土例と比べると、調整・施文とも非常に雑である。加栗山式は貝殻文円筒形土器群の中で最も出土事例が多く、かつ分布域が広い土器型式であるが、野首第2遺跡が所在する高鍋町域は分布域の縁辺に位置する。さらにマクロな視点で分布域を見てみると、野首第2遺跡が立地する舌状台地平坦面には、この型式の主体的な分布域は存在せず、台地縁辺の野首第1遺跡や、後背の丘陵上に立地する老瀬坂上第3遺跡に主体的な分布を見せる点は、この土器を使用した人々の、生活圏の選択を考察する上で好資料であろう。

3類は口縁部は内湾し口唇部に平坦面を持ち、底部は平底でバケツ状の器形を持つ。胴部には羽状の条痕文を施す。これらの特徴から桑ノ丸式に該当すると考えられる。野首第2遺跡においてはE区を中心に、他の調査区においても散漫な分布を見せる（第149図）。文様・調整がほぼ同じである事から、これらはほぼ同じ時間軸上の産物であると捉える事が可能であろう。

4類は、C・E区において散漫な分布を見せる（第150図）。4類の特徴は、表面はミガキ調整を施した後に口縁部を中心横方向の貝殻腹縁押引文を施す。裏面はミガキ調整を施す。器形は円筒形で、いわゆるバケツ形を呈する。これら諸特徴に該当する土器型式としては中原式土器があげられる。

中原式土器は木崎康弘氏により設定されI～V式に細別されているが（文献45）、E区を中心に出土しているものはⅢ式に該当する。5類は、中原V式に該当する。

6類はE区において主体的に分布している。その分布域はⅡ群とほぼ同じである（第150図）。

6類は4類に類似するが、胴部に斜方向の条痕調整を施し、口縁部に刺突文を施す。この土器型式は、上杉彰紀氏や金丸武司氏が設定した別府原式（文献48・49）、重留のいう前原西式（文献50）に該当する。

製作・使用

製作技法に関しては破片資料のみで、具体的に論じる事はかなわないが、胎土に関しては、II群・III群などと異なる様相が観察できた。以下、各類型毎に観察の所見を記載する。

1・2類

粘土の色調はII群よりも赤黒いものを使用しているが、これが厳密に粘土の差なのか、焼成時の条件に起因するものなのか判然としない。

3類

粘土の色調は、全て共通しており、胎土中に金色粒が含まれている。

4類・5類

浅黄色～白色の粘土を基調に、各種混和材が含まれている。東九州自動車道建設（都農～西都間）建設に伴う発掘調査において出土する中原式は、

混入物こそ多少の差異はあるが、ほぼ同じような色調（白っぽい色）をしている。この事は同一層内の粘土を使用し製作されている可能性や、土器の文様のみではなく、色調までもが型式情報として伝播していた可能性もある。

6類

基本的な胎土は4類・5類と近似するが、黄色バニスが含まれている点が異なっている。

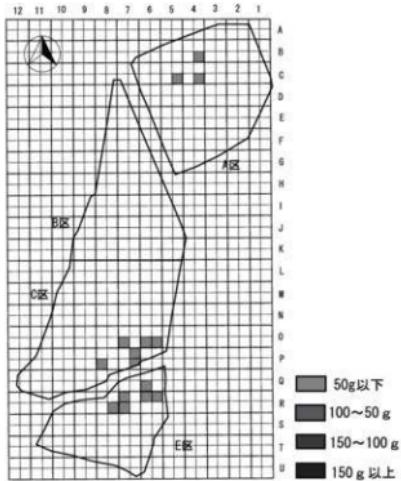
V群 沈線文系土器群

ラッパ状の器形で沈線文・撫糸文を多用するこの一群は、早期後半期に位置付けられている平椿式や塞ノ神式に該当する。本遺跡では、散漫に分布し主体的な出土は見られなかった（第151図）。

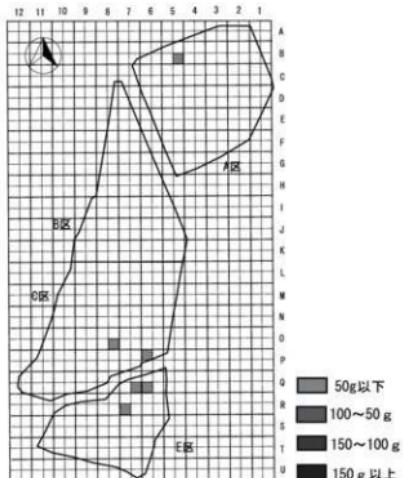
1類は平椿式であり、965が966に対して、時間的に先行するものと考えられる。

2類は河口貞徳氏の塞ノ神A式a（文献51）、高橋信武氏の塞ノ神I式に該当する（文献52）。

3類は同じく塞ノ神式であり、胴部に施文を施さないものである。口縁部の文様モチーフは2類と等しく、この類型に並行するものと考えられる。野首第2遺跡に隣接する野首第1遺跡においては



第148図 1類・2類出土重量分布図



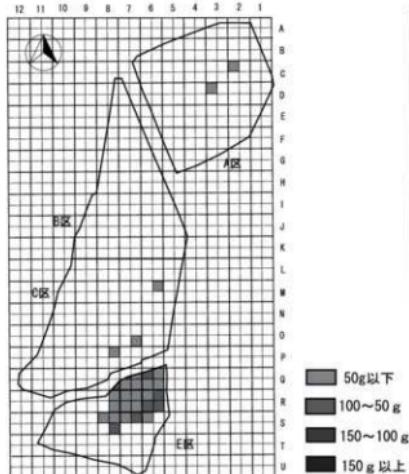
第149図 3類出土重量分布図

塞ノ神式、及び後続する早期終末の条痕文土器がそれぞれ一時期を形成している（文献9）が、野首第2遺跡においては一定量の出土が見られない。このことから、この時期には主体的にこのエリアを生活領域として使用していたとは考え難い。

（3）まとめ

1. 時間的評価

以上、簡単ながら野首第2遺跡における縄文時代早期土器群の時間的位置付けを行った。本文中で度々言及した事ではあるが、周辺の同時期の遺跡に比べ、下菅生B式並行期前後という、時間的に限定された時期に遺物数が増え、それに伴うように遺物の分布域が、台地線辺付近から台地平坦面へと変化を見せている。これが、遺物重積の結果なのか、この時期の生活空間の使用戦略の結果なのかは、なお検討の余地が残されている。ともかく、この時期を境に積極的な（居住エリア並びにその附属施設としての）遺跡の利用は見られず、次に、主体的な生活の痕跡が現れるのは縄文時代後期まで待たねばならない。



5類はA区、6類はE区にのみ分布

第150図 4, 5, 6類出土重量分布図

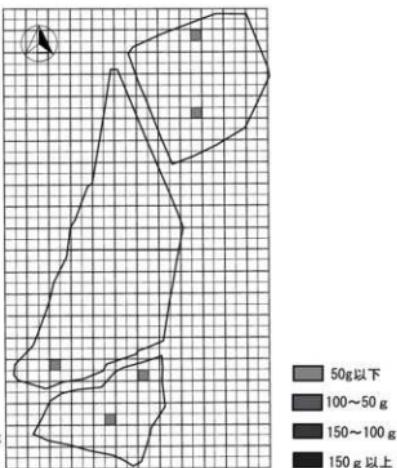
また他の遺跡を含めた、土器群毎の生活空間の差違に言及するならば、同じ台地上に位置する野首第1遺跡や老瀬坂上第3遺跡において主体的に出土したIV群に相当する土器群が、野首第2遺跡においては、あくまでも客体的な存在に留まっている点にも注意が必要であろう。同一台地内における遺跡の立地条件の差が、分布する土器群の差と捉えられる可能性もある。この点は、これまであまり議論の俎上に上がらなかった分野だけに、今後の検討を要する。

2. 製作・使用

製作に関しては、完形資料に恵まれたとは言い難く、黒斑の位置から焼成過程を復元する事はかなわぬ、器形成形や胎土の肉眼観察に留まった。

器形成形は粘土帶の輪積みのみであり、板状に成形した粘土の組合せにより器形を作り出す事例は無かった。これには角筒の器形が存在していない事に起因している可能性が高い。

胎土に関しては、各土器群毎に一定のまとまりを看取る事ができた。これをまとめたものが第13表である。まず、ベースとなる粘土は第I・II・



第151図 V群出土重量分布図

III群が共通しており、第IV群に関しては各類型毎に異なっている。換言すれば、同じ系統に属する土器群は、同じ粘土を使用して製作されている可能性が高い。

第IV群に関しては、先述した通り、異なる系統の土器型式の集合体であり、型式毎に粘土の色調を観察すると一定のまとまりが見て取れる。

粘土の中に混和材を混ぜ合わせたものを土器の胎土とする事は、先学が指摘する通りである（文献53）。河川などの踏査の結果、胎土に含まれている混和材には、遺跡近辺で採取が可能なものと、存在が確認出来なかったものがある。混和材として多用されている赤色粒は基本層序の第VII層や第IX層において、普遍的に存在しており、この土を胎土として使用したと仮定するならば、意識して混和材として使用したのではなく、そもそも粘土中に含まれていた可能性が高い。これは白色透明粒にも当てはまる。また、白色粒や、黒色透明粒は小丸川の砂礫中に含まれており、容易に手に入る環境であったといえる。遺跡近辺で採取できなかつたものが、金色粒や、黄色バミスであり、それを証明するかのように、これらを含む土器はごく少数に限られている。

仮に、一定のまとまりを有する土器群の中での、マイノリティが他地域からの移入土器であるとすれば、現地で採取不可能な鉱物を含んだ土器、具体的にはIII群において、浅黄褐色の粘土を使用し

ているものや、金色粒が含まれる資料、IV群5類は移入土器である可能性を指摘できる。

III群中で胎土のヴァリエーションが増加するのには、出土点数が増加する4類などであり、この時期の積極的な人々の移動・交流が窺える。

またIV群6類の中で、黄色バミスを含む土器は、川南町域を中心に一定のまとまりが看取されるようであり、土器の流通を考察する上で興味深い資料となろう。

土器の使用実態を示す遺構は検出できず、土器の2次的焼成痕観察に基づく使用の類推に留まった。土器の使用方法という最も根本的な問題には、未だ明確な回答を得る事はできず、土器の製作跡の有無と共に、大きな課題を残す事になった。

第3節 繩文時代早期の炉穴と集石遺構

A区からB区にかけて押型文土器を伴う集石遺構と炉穴が検出された。C・E区においては、貝殻条痕文土器（早期前半）に伴うと考えられる集石遺構と炉穴が検出されている。全区を合計すると、集石遺構169基、炉穴168群を数える。集石遺構と炉穴の先後関係は、A区における切合い関係から判断する限り、炉穴→集石・集石→炉穴のいずれもが確認されており、存続期間は一定の時間幅に収まるものと考えられる。また、14C年代は概ね8000年代前半に集中している。

第13表 各土器群における胎土（粘土）の使用

I群	II群	III群	IV群1・2類	IV群3類	IV群4類	IV群5類
褐色系粘土						
纖維混入	纖維混入					
浅黄色系粘土						
褐色系粘土 I						
褐色系粘土 II						
その他の粘土			■			

集石遺構や礫群の検出に先立って、夥しい数の散礫が確認された。礫の多くは被熱しており、それに混じって押型文土器や石鏃、剥片、石核などが確認された。礫器や石斧などの大形石器は少ないが、炉穴の床面近くで検出された環状石斧は注目される。また、Ⅲ層～Ⅳ層上部で炉穴を検出した際に、埋土中からチャート製の碎片が集中して検出される現象も興味深い。これらは、石鎚や石匙などを製作した際の残滓を廃棄した可能性が指摘できよう。

一方、C区ではA区と比較して炉穴、集石とともに散漫な分布を示す。第二分冊に触れるように縄文時代後期以降の土壤消失現象による影響を考慮する必要はあるが、それを差し引いてもA区とは異なる様相が看取される。出土土器や検出基數の違いのほか、集石遺構の形態が大きく異なる。すなわちA区やB区においては深い掘り込みと配石を有するものが一定量認められるのに対し、C区においてはそれが認められない。A・B区とC区において時間的な空間利用の差が認められる可能性がある。

A・B区から検出されたような深い掘り込みを有する集石遺構I群は、小丸川を挟んで対岸に所在する尾花坂上遺跡からも検出されており、他には清武町の船引台地上の諸遺跡から集中して見つかっている。こうした集石遺構I群がどのように機能したのかは未だ不明であるが、今後、立地や実験考古学などの観点からの追究が期待される。

第V章 おわりに

野首第2遺跡では、七つの時期に亘る後期旧石器時代から現代に至るまで、連綿と続く人類生活の痕跡が確認された。第一分冊では、後期旧石器時代と縄文時代早期を扱ったが、掲載できたのは部分的な情報にとどまった。続く第二分冊において、観察表などのデータを揃え、責を果たしたい。

引用・参考文献

- 文献1：北郷泰道 編 1982『持田中尾遺跡発掘調査概要報告書』高鍋町教育委員会
- 文献2：近藤 協 編 1986『妻道南遺跡 発掘調査報告書』高鍋町教育委員会
- 文献3：山本 格 編 1995『中尾・牛牧地区遺跡農村基盤総合整備パイロット事業尾鈴2期地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高鍋町文化財調査報告書第7集 高鍋町教育委員会
- 文献4：茂山 譲・大野寅夫 1977『児湯郡下の旧石器』『宮崎考古』第3号 宮崎考古学会
- 文献5：茂山 譲 1980『畦原型細石核 一大野寅夫 採集石器 集成一』『宮崎考古』第6号 宮崎考古学会
- 文献6：吉本正典 編 2003『平成14年度 東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査報告書III』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第76集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献7：吉本正典・堀田孝博 編 2004『東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査報告書IV 平成15年度』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第91集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献8：谷口武範・今塙屋毅行・森本征明・岡田 論 編 2005『東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査V』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第111集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献9：田中 光・藤木 晃・飯田博之 編 2004『野首第1遺跡 県道木城高鍋線高速関連道路・河川等緊急整備事業(青木地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第86集 宮崎県埋蔵文化財センター

- 文献 10：吉本正典 編 2005『崩戸遺跡 東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 11』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 103 集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献 11：阿部直人・竹田亨志 編 2005『老瀬坂上第 3 遺跡 東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 23』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 118 集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献 12：岩永哲夫・戸高真知子 編 1991『大戸ノ口第 2 遺跡』高鍋町文化財調査報告書第 5 集 高鍋町教育委員会
- 文献 13：近藤 協 編 1988『水谷原遺跡 県道日置～南高鍋線道路改良事業にともなう埋蔵文化財調査報告書』宮崎県教育委員会
- 文献 14：今塙屋毅行・都成 量・永田和久 編 2006『下耳切第 3 遺跡 東九州自動車道建設（都農～西都間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 30』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 125 集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献 15：今塙屋毅行 2003『野首古墳群・山王古墳群・牛牧古墳群ほか』『第 29 回九州古墳時代研究会古墳見学会資料』第 29 回九州古墳時代研究会実行委員会
- 文献 16：山本 格 編 1991『町内遺跡発掘調査報告書 老瀬坂上第 2 遺跡 高鍋城跡』高鍋町文化財調査報告書第 6 集 高鍋町教育委員会
- 文献 17：須藤隆司 1991「ナイフ形石器の型式論（1）」『旧石器考古学』第 42 号 旧石器文化談話会
- 文献 18：松本 茂 2006b「資料紹介：宮崎県春日地区遺跡第 2 地点の細石刃石器群」「九州旧石器」第 6 号九州旧石器文化研究会・大分県旧石器談話会
- 文献 19：宍戸 章 1992「尾鉢山酸性岩類製の磨石－交易と産地・石材選択に関する試論－」『宮崎考古』第 12 号 石川恒太郎先生追悼論文集 宮崎考古学会
- 文献 20：小畑弘己・岡本真也・古森政次・渡辺一徳・田口清行 2001「いわゆる「阿蘇産黒曜石」の産地発見とその意義－阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩露頭の発見－」『旧石器考古学』第 62 号 旧石器文化談話会
- 文献 21：『宮崎県総合博物館研究紀要』第 25 号 宮崎県総合博物館
- 文献 22：五十嵐彰 1998「考古資料の接合－石器研究における母岩・個体問題－」『史学』第 67 卷 3・4 号 三田史学会
- 文献 23：金山喜昭 1984「武蔵野・相模野両台地における旧石器時代の砾群の研究」『神奈川考古』第 19 号 神奈川考古同人会
- 文献 24：宮崎県旧石器文化談話会 2005『宮崎県下の旧石器時代遺跡概観』『旧石器考古学』第 66 号旧石器文化談話会
- 文献 25：松浦五輪美 2005「近畿・瀬戸内地方の後期旧石器時代における剥片剥離の一侧面」『考古論集』川越哲志先生退官記念論集 川越哲志先生退官記念事業会
- 文献 26：山本 誠 編 2004『兵庫県氷上郡春日町七日市遺跡（Ⅲ）旧石器時代の調査 近畿自動車道敦賀線（吉川～福知山）建設事業（春日 JCT）に伴う発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第 272 冊 兵庫県教育委員会
- 文献 27：木崎康弘 1996「石槍の出現と気候寒冷化－地域文化としての九州石槍文化の提唱－」『旧石器考古学』第 53 号 旧石器文化談話会
- 文献 28：原田茂樹 編 2005『牧内第 1 遺跡（四次調査）東九州自動車道建設（都農～西都間）に伴う埋蔵文化財調査報告書 11』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 104 集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献 29：宮下浩治・角張淳一・北村勇人・久保和也 2004『箕作遺跡 県道松元川辺線整備事業（黄和田地内）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書（18）金峰町教育委員会
- 文献 30：柳田宏一・加藤 学 編 2003『祇園遺跡・春日地区遺跡第 2 地点 県道木城西都線 1 時間構想道路整備事業（春日工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 73 集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献 31：藤木 啓 2005『宮崎平野における旧石器時代の剥片剥離－九州旧石器』第 9 号 九州旧石器文化研究会
- 文献 32：東 恵章 編 1997『霧島遺跡 県道都農線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宮崎

- 県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第4集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献 33：渡部誠一郎・谷口武範・永田和久・金丸琴路編 2005『音明寺第1遺跡 東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 10』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 102 集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献 34：綿貫俊一 編 1996『第4章 陽弓遺跡』『横手遺跡群発掘調査報告書』大分県文化財調査報告第 93 集 大分県教育委員会
- 文献 35：綿貫俊一 1999『九州の縄文時代草創期末から早期の土器編年に関する一考察』『古文化談叢』第 42 集 九州古文化研究会
- 文献 36：綿貫俊一 2003『九州の縄文時代早期前半の土器－岡田憲一氏の原稿を読了した感想－』『利根川』24・25 利根川同人
- 文献 37：坂本嘉弘 編 2002『利光遺跡』『大分県文化財調査報告書』第 132 輯 大分県教育委員会
- 文献 38：賀川光夫 編 1982『第5章 押型文土器の編年－縄文早期から前期への系譜－』『政所馬渡』別府大学付属博物館
- 文献 39：賀川光夫 編 1982『第6章 九州と中国・四国の土器』『政所馬渡』別府大学付属博物館
- 文献 40：坂本嘉弘 1995『西日本の押型文土器の展開－九州からの視点－』『古文化談叢』第 35 集 九州古文化研究会
- 文献 41：坂本嘉弘 1998『東九州の押型文時研究の現状と課題』『九州の押型文土器－論巧編－』縄文集成シリーズ3 九州縄文研究会
- 文献 42：岩永哲夫 1988『九州東南部における縄文早期遺跡の概観－出土土器を中心にして－』『宮崎県総合博物館研究紀要』第 13 輯 宮崎県総合博物館
- 文献 43：岩永哲夫 2004『宮崎県地方の押型文土器』『考古論集－河瀬正利先生退官記念論文集－』河瀬正利先生退官記念事業会
- 文献 44：岩永哲夫 2006『南九州の押型文土器』『宮崎考古』第 20 号 宮崎考古学会
- 文献 45：木崎康弘 1998『中九州西部押型文土器の編年』『九州の押型文土器－論巧編－』縄文集成シリーズ3 九州縄文研究会
- 文献 46：木崎康弘 編 1996『蒲生・上の原遺跡』熊本県文化財調査報告第 158 集 熊本県教育委員会
- 文献 47：木崎康弘 1998『中原式土器について』『九州縄文土器の諸問題』九州縄文研究会
- 文献 48：上杉彰記 2004『別府原式土器』とその周辺』『九州縄文時代早期研究ノート』第 2 号 九州縄文時代早期研究会
- 文献 49：金丸武司 2004『宮崎における縄文時代早期前半の土器群－別府原式土器の設定－』『宮崎考古』第 19 号 宮崎考古学会
- 文献 50：重留康宏 2004『前原西式土器雑考』『九州縄文時代早期研究ノート』第 2 号 九州縄文時代早期研究会
- 文献 51：河口貞徳 1972『塞ノ神式土器』『鹿児島考古』第 6 号 鹿児島県考古学会
- 文献 52：高橋信武 1997『平桟式と塞ノ神式土器の編年』『先史学・考古学論究』II 龍田考古会
- 文献 53：新井司郎 1973『縄文土器の技術』 加曾利貝塚博物館



1. 遺跡遠景（1） 舌状台地の根元から北東を望む



2. 遺跡遠景（2） 山王古墳群から北西に野首第2遺跡を見上げる